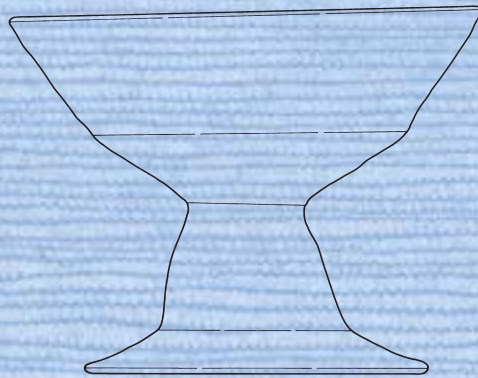


久木ノ城跡・遺跡，古津賀遺跡
神ヶ谷2号窯跡，具同中山遺跡群Ⅱ-2

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ



2003.03

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

久木ノ城跡・遺跡，古津賀遺跡
神ヶ谷2号窯跡，具同中山遺跡群Ⅱ－2

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

2003.03

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

中村市は高知県西部に所在し、幡多郡の中心地です。高知県第一の河川で、「最後の清流」といわれる四万十川や支流である中筋川の下流域に中村市は位置しています。中村市域は古くから開かれた土地であり、幡多郡下で最も多くの遺跡が存在しています。この中村市域では中筋川流域を宿毛方面に向かって延びる高規格道路である中村宿毛道路建設に伴って近年多くの発掘調査が実施され、中村市の歴史が少しずつ明らかになってきました。

本書は平成12・13年度に発掘調査を実施した中村宿毛道路関連の久木ノ城跡・遺跡、古津賀遺跡、神ヶ谷2号窯跡、具同中山遺跡群Ⅱ-2の報告書です。これらの遺跡からは弥生時代・古墳時代・古代の各時代に互る遺構・遺物が確認されており、幡多郡の歴史を考えるうえで貴重な資料を新たに蓄積することができました。

また、これらの資料は中村市や幡多郡の歴史を解明していくうえで貴重なものであるとともに、地域の方々に埋蔵文化財の重要性を御理解していただく資料になると思われ、ぜひ多くの方々に活用して頂きたいと願っております。

最後に、調査にあたり多大な御理解と御協力を頂いた国土交通省中村工事事務所、地元関係者の方々、発掘調査に従事して下さった作業員の皆様には心より御礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 島内 靖

例言

1. 本書は中村宿毛高規格道路建設計画に伴い平成12・13年度に発掘調査を実施した久木ノ城跡・遺跡、古津賀遺跡、神ヶ谷2号窯跡、具同中山遺跡群Ⅱ-2の発掘調査報告書である。
2. 各本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 久木ノ城跡・遺跡は高知県中村市上ノ土居に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡であり、なかでも弥生時代の高地性集落に特筆される。古津賀遺跡は中村市古津賀に所在しており、古墳時代の祭祀関連遺構が確認されている。神ヶ谷2号窯跡は高知県宿毛市平田町に所在する古代の須恵器窯跡であり、窯体1基とそれに伴う灰原1ヵ所が確認されている。具同中山遺跡群Ⅱ-2は中村市具同に所在し、平成11年度に発掘調査が実施された具同中山遺跡群Ⅱ-2に隣接している。今回の調査では密度が低い弥生時代及び古墳時代の遺物集中箇所が確認されている。発掘調査延べ面積は久木ノ城跡・遺跡が2,368m²、古津賀遺跡が163m²、神ヶ谷2号窯跡が181m²、具同中山遺跡群Ⅱ-2が1,926m²であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

平成12年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸，臨時職員 大橋真弓

調査総括：同調査課長 重森勝彦

調査担当：久木ノ城跡・遺跡

同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 前田光雄，同主任調査員 山田和吉，同調査員 下村裕，技術補助員 野町和人，測量補助員 岡崎真紀

平成13年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 中城英人，臨時職員 大橋真弓

調査総括：同調査課長 重森勝彦

調査担当：古津賀遺跡

同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 岩本繁樹，同主任調査員 松村信博，技術補助員 野町和人，測量補助員 岡崎真紀

神ヶ谷2号窯跡・具同中山遺跡群Ⅱ-2

同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 岩本繁樹，同調査員 田中涼子・下村裕，技術補助員 野町和人，測量補助員 岡崎真紀

5. 本書の執筆は廣田の指導のもと久木ノ城跡・遺跡，神ヶ谷2号窯跡，具同中山遺跡群Ⅱ-2を下村，古津賀遺跡を岩本がそれぞれ執筆し，編集等は下村が行った。現場写真は岩本，松村，下村が撮影し，遺物写真は廣田の指導のもと下村が撮影した。遺跡の略号は，久木ノ城跡・遺跡が「00-4NH」，古津賀遺跡が「01-4NK」，神ヶ谷2号窯跡が「01-15SK」，具同中山遺跡群Ⅱ-2が「01-5GN」とし，出土遺物の註記等にはこれを使用している。遺構についてはSF（祭祀関連遺構），ST（堅穴住居跡），SK（土坑），SS（段状遺構），P（柱穴），窯体，灰原で表記した。

また、掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは旧日本座標系におけるGNである。ただし、報告書抄録の緯度・経度は世界測地系で記してある。

6. 遺物については、原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表示している。また、遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。
7. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって、下記の方々のご指導並びに貴重なご教示、ご助言を賜りご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。
那須孝悌（大阪市立自然史博物館）、矢木伸欣（宿毛歴史館）、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏
8. 遺構、遺物の測量及び写真撮影は各調査員、技術補助員、測量補助員が行い、測量には各遺跡で新たに設置した3級基準点を使用した。
9. 発掘調査及び遺物整理、報告書作成については、下記の方々にご協力頂いた。

発掘調査

久木ノ城跡・遺跡

畔元武夫、有友実、伊与木晴茂、岡崎桂子、岡本里以、岡本寿美子、岡本寅美、岡本弘美、岡本芳子、沖和子、川村勉、高橋太郎、豊永三男、長尾憲和、長崎竹美、長崎喜久、中山昭子、中山友男、布陽子、野並盧、平地五月、松田五六、松本菊美、松本昇、宮崎貞義、森本勝一、矢野茂世、矢野秋三、山脇良幸

古津賀遺跡

沖和子、岡本寿美子、岡本寅美、野並盧、森本勝一

神ヶ谷2号窯跡

有友実、岡本寿美子、岡本寅美、沖和子、川村勉、中山昭子、布陽子、野並盧、松本菊美、森本勝一、宮路孝輔

具同中山遺跡群Ⅱ-2

有友実、伊与木晴茂、岡崎桂子、岡本里以、岡本寿美子、岡本寅美、岡本弘美、岡本芳子、沖和子、川村勉、高橋太郎、長崎竹美、中山昭子、布陽子、野並盧、平地五月、松本菊美、宮崎貞義、森本勝一、山脇良幸

上記の方々には酷寒、酷暑の中、労を厭わず作業に協力して頂いた。記して感謝の意を表したい。

遺物整理

島村加奈、岸本洋子、元木恵利子、坂本エリ、竹村小百合、松田美香、岩井涼子、吉野絵里、森川歩、森沢美紀、横山めぐみ、原真由美、西村美喜、山崎邦代、後藤雅子、岡本智子

上記の方々には整理作業を担当して頂いた。記して感謝の意を表したい。

10. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局中村工事事務所、社団法人高知県建設技術公社のご協力を頂いた。また、上ノ土居地区長、西谷地区長、江の村地区長、具同地区長をはじめ地元住民の方々に、遺跡に対するご理解とご協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物、その他図面類の関係資料は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 序章

1. はじめに	1
---------------	---

第II章 久木ノ城跡・遺跡

1. 調査の経過	3
(1) 調査の経過	3
(2) 調査の方法	3
(3) 調査日誌抄	4
2. 調査の概要	5
(1) 調査の概要	5
(2) 層序	6
(3) 堆積層出土遺物	6
3. 遺構と遺物	11
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 土坑	14
(3) 段状遺構	14

第III章 古津賀遺跡

1. 調査の経過	19
(1) 調査の経過	19
(2) 調査の方法	19
(3) 調査日誌抄	20
2. 調査の概要	21
(1) 調査の概要	21
(2) 層序	21
(3) 堆積層出土遺物	25
3. 遺構と遺物	27
(1) 祭祀関連遺構	27
(2) ピット	30

第IV章 神ヶ谷2号窯跡

1. 調査の経過	31
(1) 調査の経過	31
(2) 調査の方法	31

(3) 調査日誌抄	32
2. 調査の概要	32
(1) 調査の概要	32
(2) 層序	32
(3) 堆積層出土遺物	34
3. 遺構と遺物	38
(1) 窯体	38
(2) 灰原	46

第V章 具同中山遺跡群Ⅱ-2

1. 調査の経過	49
(1) 調査の経過	49
(2) 調査の方法	49
(3) 調査日誌抄	50
2. 調査の概要	51
(1) 調査の概要	51
(2) 層序	51
(3) 堆積層出土遺物	53
3. 遺構と遺物	60
(1) 祭祀関連遺構	60

第VI章 考察

1. 久木ノ城跡・遺跡	61
(1) 遺構について	61
(2) 遺物について	62
(3) まとめ	62
2. 古津賀遺跡	63
(1) 弥生時代について	63
(2) 古墳時代について	63
3. 神ヶ谷2号窯跡	64
(1) 遺構について	64
(2) 遺物について	65
(3) まとめ	68
4. 具同中山遺跡群Ⅱ-2	68

挿図目次

Fig.1	高知県中村市・宿毛市及び中村宿毛道路関連遺跡位置図	1
Fig.2	久木ノ城跡・遺跡調査区全体図及び基準点配置図 (S=1/1,000)	3
Fig.3	バンク1セクション図	7
Fig.4	バンク2セクション図	8
Fig.5	第I・IV・V層出土遺物(弥生土器・石製品)	9
Fig.6	第V層出土遺物(石製品)	10
Fig.7	ST-1	11
Fig.8	ST-1出土遺物	12
Fig.9	ST-2・3	13
Fig.10	ST-2出土遺物(19は1/2)	13
Fig.11	SK-2	14
Fig.12	SS-1出土遺物	15
Fig.13	SS-4~6出土遺物(28は1/2)	16
Fig.14	SS-7出土遺物	18
Fig.15	古津賀遺跡トレンチ設定図 (S=1/400)	19
Fig.16	TR-1北壁セクション図	22
Fig.17	TR-2北壁セクション図	23
Fig.18	TR-3北壁セクション図	24
Fig.19	第XII・XIV・XV層出土遺物(弥生土器・土師器)	26
Fig.20	SF-1遺物出土状態	27
Fig.21	SF-1出土遺物1	28
Fig.22	SF-1出土遺物2	29
Fig.23	SF-1出土遺物3	30
Fig.24	神ヶ谷2号窯跡調査区全体図及び基準点配置図 (S=1/2,000)	31
Fig.25	東壁セクション図	33
Fig.26	第I層出土遺物(須恵器・磁器, 1は1/3)	34
Fig.27	第VIII層出土遺物(須恵器)	35
Fig.28	第IX層出土遺物(須恵器)	35
Fig.29	第X層出土遺物(須恵器)	36
Fig.30	調査区平面図	38
Fig.31	窯体完掘平面図	39
Fig.32	窯体内遺物出土状態	40
Fig.33	窯体埋土出土遺物	41
Fig.34	床面出土遺物1	42

Fig.35	床面出土遺物2	43
Fig.36	床面出土遺物3	44
Fig.37	灰原範囲図	45
Fig.38	灰原出土遺物	46
Fig.39	具同中山遺跡群Ⅱ-2調査区全体図及び基準点配置図(S=1/1,000)	49
Fig.40	西壁セクション図	52
Fig.41	古墳時代遺構平面図	53
Fig.42	第Ⅸ層出土遺物1(弥生土器)	54
Fig.43	第Ⅸ層出土遺物2(土師器)	55
Fig.44	第Ⅸ層出土遺物3(土師器)	56
Fig.45	第Ⅸ層出土遺物4(手づくね土器・鉄製品, 26は1/3)	56
Fig.46	第Ⅹ層出土遺物(弥生土器)	57
Fig.47	SF-1遺構配置図	58
Fig.48	SF-1遺物出土状態	59
Fig.49	SF-1出土遺物	60

図版目次

PL. 1	伐採前風景(西より)	SS-1(西より)
	伐採前風景(東より)	SS-7(南西より)
PL. 2	伐採後風景(西より)	SS-6弥生土器(31)出土状態
	伐採後風景(南より)	SS-7遺物出土状態(東より)
PL. 3	平場検出状態(南西より)	PL. 9 弥生土器(壺)
	ST-3検出状態(南より)	弥生土器(壺・甕)
PL. 4	遺構完掘状態(南西より)	PL.10 弥生土器(壺)
	遺構完掘状態(北上空より)	弥生土器(壺)
PL. 5	バンク1(西より)	PL.11 弥生土器(壺・甕)
	バンク1(北西より)	弥生土器(壺・甕)
PL. 6	バンク2(南西より)	PL.12 弥生土器(甕), 石製品(磨製石斧・砥石)
	バンク2(南東より)	PL.13 弥生土器(高杯), 石製品(磨製石鏃・磨製石斧・石錐・叩石・凹石)
PL. 7	ST-1完掘状態(北東より)	PL.14 弥生土器(壺・甕), 石製品(磨石・砥石・台石)
	ST-2・3完掘状態(北東より)	PL.15 調査前風景(北より)
PL. 8	第Ⅴ層弥生土器(4)出土状態	調査前風景(東より)
	第Ⅴ層磨製石斧(11)出土状態	PL.16 SF-1検出状態(南より)
	ST-1(東より)	
	ST-2・3(南より)	

	SF-1検出状態(北より)		窯体内遺物出土状態(北東より)
PL.17	TR-1北壁セクション(南より) TR-1完掘状態(西より)	PL.33	第X層須恵器出土状態(北東より) 第VIII層須恵器(3)出土状態
PL.18	TR-2北壁セクション(南より) TR-2完掘状態(南東より)		窯体縦バンク(北西より) 窯体横バンク(北より)
PL.19	TR-3第X層遺構検出状態(南西より) TR-3第X層遺構完掘状態(南より)		灰原縦バンク(東より) 灰原横バンク(南より)
PL.20	TR-3第XII層遺構検出状態(北より) TR-3第XII層遺構完掘状態(南より)		床面須恵器(42)出土状態 床面須恵器(43)出土状態
PL.21	TR-3北壁セクション(南より) TR-3完掘状態(東より)	PL.34	床面須恵器(53)出土状態 床面須恵器(54・56)出土状態
PL.22	SF-1土師器壺・高杯(5・11)出土状態 SF-1土師器甕(6)出土状態 SF-1土師器高杯(9)出土状態 SF-1土師器高杯(12)出土状態 SF-1手づくね土器(15)出土状態 SF-1手づくね土器(17・18)出土状態 TR-3土師器甕(1・2・3)出土状態 TR-3弥生土器甕(4)出土状態		床面須恵器(57)出土状態 床面須恵器(61)出土状態 灰原須恵器出土状態 灰原須恵器出土状態 灰原須恵器出土状態 灰原炭化物検出状態
PL.23	土師器(甕) 土師器(壺)	PL.35	須恵器(杯・高杯), 磁器(皿)
PL.24	弥生土器(甕), 土師器(甕) 土師器(甕)	PL.36	須恵器(杯)
PL.25	土師器(高杯)	PL.37	須恵器(杯・皿・高杯・鉢)
PL.26	手づくね土器	PL.38	須恵器(蓋・杯・皿・壺)
PL.27	調査前風景(北より) 窯体・灰原検出状態(北より)	PL.39	須恵器(蓋・杯・皿)
PL.28	窯体検出状態(北より) 窯体完掘状態(北より)	PL.40	須恵器(蓋・杯)
PL.29	窯体検出状態(北より) 窯体完掘状態(北より)	PL.41	須恵器(蓋・杯・皿)
PL.30	調査区完掘状態(北西上空より) 調査区完掘状態(北上空より)	PL.42	須恵器(蓋・杯・皿)
PL.31	東壁セクション(北より) 東壁セクション(北西より)	PL.43	調査前風景(北東より) 調査前風景(西より)
PL.32	窯体内遺物出土状態(北東より)	PL.44	西部第XX層遺構検出状態(西より) 西部第XX層遺構完掘状態(西より)
		PL.45	西部第XIII層完掘状態(西より) 西部第XIII層完掘状態(東より)
		PL.46	東部第XX層遺構検出状態(東より) 東部第XX層遺構完掘状態(東より)
		PL.47	東部第XIII層完掘状態(東より) 東部第XIII層完掘状態(西より)
		PL.48	西壁セクション(東より)

	西壁セクション(東より)		土師器(甕)
PL.49	SF-1検出状態(北より)	PL.52	弥生土器(甕)
	第XXI層弥生土器(31)出土状態		弥生土器(甕)
PL.50	第XXI層土師器(4)出土状態	PL.53	弥生土器(甕)
	第XXI層土師器(8)出土状態		弥生土器(甕)
	第XXI層土師器(14)出土状態	PL.54	弥生土器(甕), 土師器(甕)
	第XXI層手づくね土器(20)出土状態		弥生土器(甕)
	第XXI層弥生土器(35)出土状態	PL.55	土師器(甕・高杯)
	第XXI層弥生土器(38)出土状態	PL.56	手づくね土器, 鉄製品(刀子)
	第XXI層弥生土器(43)出土状態	PL.57	弥生土器(甕), 土師器(甕・鉢)
	第XXI層弥生土器(44)出土状態	PL.58	弥生土器(甕)
PL.51	土師器(壺)		

付図目次

付図1	久木ノ城跡・遺跡調査区全体図(S=1/200)
-----	-------------------------

第Ⅰ章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局から業務委託を受けた中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成12・13年度に実施した久木ノ城跡・遺跡、古津賀遺跡、神ヶ谷2号窯跡、具同中山遺跡群Ⅱ-2の発掘調査の結果をまとめたものである。具同中山遺跡群を始めとする一連の発掘調査は国土交通省四国整備局中村工事事務所が実施している中村宿毛道路建設工事に伴い、工事区域内に所在する遺跡の中で、工事によって影響を受ける部分について事前の発掘調査及び出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

中村宿毛高規格道路は高知西南中核工業団地等の開発に伴って予想される交通需要の増加に対応するための自動車専用道路として中村宿毛間で建設が進められている。中村宿毛道路の計画路線内に該当する具同地区を始めとする中筋川流域は遺跡の分布密度が高い地域として周知されており、建設省四国地方建設局（現国土交通省四国整備局）中村工事事務所と高知県教育委員会の協議の結果、計画路線内に存在する埋蔵文化財包含地について、平成3年度から財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが試掘調査を実施し、その結果に基づき発掘調査を実施してきた。



Fig.1 高知県中村市・宿毛市及び中村宿毛道路関連遺跡位置図

中村宿毛道路に伴う一連の工事によって発掘調査が実施された遺跡は平成12・13年度調査の久木ノ城跡・遺跡，古津賀遺跡，神ヶ谷2号窯跡，具同中山遺跡群Ⅱ-2を含め12遺跡を数え，縄文時代から中世までの遺構・遺物が確認されている。なかでも具同中山遺跡群は平成6年度に発掘調査が実施された具同中山遺跡群Ⅰに始まり，昨年度発掘調査が実施された具同中山遺跡群Ⅱ-2まで断続的に発掘調査が行われた。中村宿毛道路関係の発掘調査に先立って，中筋川の河川改修に伴う発掘調査が昭和61年度から行われており，具同中山遺跡群では長期間に亙り発掘調査が継続されてきた。この具同中山遺跡群は中筋川の自然堤防上に立地する遺跡で，これまでの調査は中筋川左岸の自然堤防上や自然堤防から後背湿地に向かう緩斜面で行われ，古墳時代中期を中心とする祭祀関連遺構が多く検出されている。遺跡の中心である自然堤防上に位置する調査地区（具同中山遺跡群Ⅲ-3）では，多くの祭祀跡や祭祀関連遺構，また掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出されているが，自然堤防から離れた調査地区（具同中山遺跡群Ⅱ-2）では遺構・遺物の密度が低く，祭祀行為は自然堤防上を中心に行われてきたとみられる。また，神ヶ谷2号窯跡は道路工事中に発見された古代の須恵器窯跡で，本遺跡の東約200mには平成10年度に発掘調査が行われたほぼ同時期の神ヶ谷1号窯跡が存在している。旧地形をみると，神ヶ谷1・2号窯跡とも北西方向に開く谷の開口部付近に立地しており，本遺跡周辺には他にも窯跡が存在している可能性が考えられる。一方，古津賀遺跡は道路建設に伴うものは昨年度の調査が初めてであるが，昭和61年度には後川の河川改修に伴って発掘調査が行われている。古津賀遺跡の一連の発掘調査では具同中山遺跡群と同じく古墳時代の祭祀跡や祭祀関連遺構が検出されており，時期的には具同中山遺跡群よりやや新しいと考えられている。また，古津賀遺跡は中村市教育委員会によっても発掘調査が行われており，弥生時代中期末の高地性集落などが確認されている。今回，中村宿毛高規格道路に関わる部分についての仮設道の建設に伴い，国土交通省四国整備局中村工事事務所と高知県教育委員会の協議の結果，平成13年度に試掘兼本調査が行われた。（下村）

第Ⅱ章 久木ノ城跡・遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

久木ノ城跡・遺跡は中村市上ノ土居に所在しており、遺跡分布調査においては山城である久木ノ城跡の存在が指摘されていた。中村宿毛高規格道路の計画路線内に本城跡が位置しており、平成12年度に実施された試掘調査の結果に基づき、久木ノ城跡・遺跡の記録保存を目的とする発掘調査が実施されることとなった。調査は高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は平成12年10月24日から平成13年1月31日までであり、発掘調査面積は2,368m²であった。

(2) 調査の方法

平成12年度に実施された試掘調査の結果に基づき、遺跡範囲内における工事予定区域9,600m²のうち、2,368m²の発掘調査を行った。

本調査区は山林であったこともあり、まず調査対象範囲内の雑木の伐採を行い、廃土処理のための簡易シューターを設置した。表土及び堆積層の掘削は平坦部は重機を用い、斜面部などは人力で行った。検出された遺構は掘削の後、完掘写真撮影、遺構平面図の作成、レベル測量を行い、遺物は必要に応じて写真撮影、出土状態図の作成、レベル測量を行った。また、調査と併行して土層観察を行い、写真撮影の後、土層断面図を作成し、調査終了時には航空写真撮影及び航空測量を実施した。

測量については、3級基準点・3等水準点を設置して行い、報告書ではこの結果に基づき、図面には公共座標(旧日本座標系)を記している。

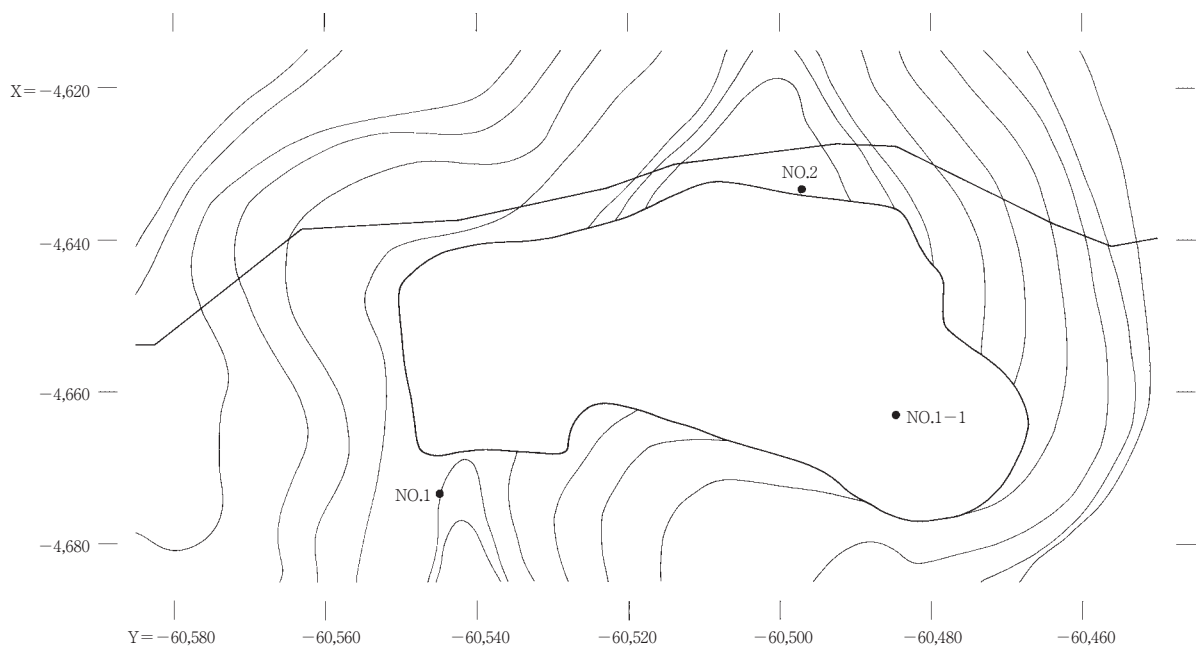


Fig.2 久木ノ城跡・遺跡調査区全体図及び基準点配置図(S=1/1,000)

(3) 調査日誌抄

2000.10.24~2001.1.31

- 10.24 久木ノ城跡・遺跡の調査を開始する。木の取り分け並びに平坦部の機械掘削を行う。
- 10.25 雨天であったが機械掘削並びに平板測量を行う。
- 10.26 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部の人力掘削と木の取り分け並びにシューターを設置する。
- 10.27 平坦部での機械掘削と併行して、斜面部での人力掘削並びにシューターを設置する。
- 10.30 平坦部での機械掘削と併行して、斜面部での人力掘削並びにシューターを設置する。
- 10.31 平坦部での機械掘削と併行して、斜面部での人力掘削並びにシューターを設置する。
- 11.1 雨天のため現場作業は中止する。
- 11.2 雨天のため現場作業は中止する。
- 11.6 東斜面部の人力掘削並びに切り株の抜根を行う。
- 11.7 東斜面部の人力掘削並びに切り株の抜根を行う。
- 11.8 東斜面部の人力掘削並びに切り株の抜根を行う。
- 11.9 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、南斜面部の人力掘削並びに切り株の抜根を行う。
- 11.10 雨天のため現場作業は中止する。
- 11.13 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部の人力掘削並びに切り株の抜根を行う。
- 11.14 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部の人力掘削並びに切り株の抜根を行う。
- 11.15 雨天のため重機での残土処理のみ行う。
- 11.16 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、平坦部の人力掘削並びに切り株の抜根を行う。午後、中村西中学校の生徒が現場見学に訪れる。
- 11.17 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、平坦部の人力掘削を行い、ST-1を検出する。
- 11.20 作業を行うが午前中に雨が降り出し、作業を中止する。重機での残土処理は引き続き行う。
- 11.21 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、平坦部の人力掘削を行う。
- 11.22 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、平坦部の人力掘削を行う。
- 11.23 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、平坦部の人力掘削を行う。
- 11.24 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部の人力掘削と平坦部の検出作業並びに杭打ちを行うとともに遺構略図を作成する。
- 11.27 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部の人力掘削と平坦部の検出作業並びに杭打ちを行うとともに遺構略図を作成する。
- 11.28 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部の人力掘削と平坦部の検出作業並びに杭打ちを行うとともに遺構略図を作成する。
- 11.29 職員研修並びに情報交換会のため現場作業は中止する。
- 11.30 職員研修並びに情報交換会のため現場作業は中止する。
- 12.1 雨天であったが、重機での機械掘削のみ行う。
- 12.4 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、南斜面部の人力掘削並びに平坦部、斜面部の検出作業を行う。
- 12.5 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、南斜面部の人力掘削並びに平坦部、斜面部の検出作業を行う。
- 12.6 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、南斜面部の人力掘削並びに平坦部、斜面部の検出作業を行う。
- 12.7 平坦部の機械掘削と併行して、東斜面部、南斜面部の人力掘削並びに平坦部、斜面部の検出作業を行う。
- 12.8 平坦部の機械掘削と併行して、南斜面部、

西斜面部の人力掘削と平坦部，斜面部の検出作業並びに杭打ちを行うとともに遺構略図を作成する。

12.11 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

12.12 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

12.13 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

12.14 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

12.15 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

12.18 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

12.19 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削と平坦部の検出作業並びに杭打ちを行うとともに遺構略図を作成する。

12.20 平坦部の機械掘削と併行して，南斜面部，西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

12.21 尾根部の機械掘削と併行して，南斜面部の人力掘削を行う。

12.22 尾根部の機械掘削と併行して，南斜面部の人力掘削を行う。

12.25 尾根部の機械掘削と併行して，南斜面部

の人力掘削並びに尾根部の検出作業を行う。

12.26 尾根部の機械掘削と併行して，南斜面部の人力掘削並びに尾根部の検出作業を行う。

1.5 西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

1.9 西斜面部の人力掘削並びにバンクの土層断面図を作成する。

1.10 調査区内の清掃作業並びに平板測量を行う。

1.11 調査区内の清掃作業並びに平板測量を行う。

1.12 遺構検出状態の写真撮影を行い，遺構掘削を開始する。

1.15 雪のため現場作業を中止する。

1.16 雪のため現場作業を中止する。

1.17 主にSS-6・7の調査を行う。

1.18 主にST-1，SS-7の調査とともに平面測量並びにレベル実測を行う。

1.22 主にSS-1~5の調査とともに平面測量並びにレベル実測を行う。

1.23 主にST-3の調査とともに平面測量並びにレベル実測を行う。

1.24 主にST-3の調査とともに平面測量並びにレベル実測を行う。

1.25 雨天のため現場作業は中止する。

1.26 雨天のため現場作業は中止する。

1.29 主にST-3の調査並びに調査区内の清掃作業とともに平面測量並びにレベル実測を行う。

1.30 主にST-3の調査並びに調査区内の清掃作業とともに平面測量並びにレベル実測を行う。

1.31 遺構完掘状態の写真撮影並びに航空写真撮影を行い，すべての現場作業を完了する。

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査では弥生時代中期後半にかけての遺構・遺物を確認した。遺構は平坦部で竪穴住居跡3軒，土坑3基，ピット28個が確認され，調査区の南側斜面部では計7ヵ所の段状遺構も検出されている。本調査区は後世の段畑の影響で斜面部を中心に掘削されており明確な遺物包含層は確認

されず、2次堆積とみられる斜面堆積層などから土器が出土しているが、全体的に遺物の出土量は少なかった。以下、本項では堆積土層とその出土遺物について記す。

(2) 層序

調査区で認められた基本層序(バンク1・2)は以下のとおりである。

バンク1

- 第I層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層(表土)
- 第II層 褐色(10YR4/6)シルト質砂層で0.1~0.5cm大の礫を多く含む。
- 第III層 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂層で0.1~0.5cm大の礫を含む。
- 第IV層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂層で0.1~1cm大の礫を含む。
- 第V層 黄褐色(10YR5/6)シルト質砂層で0.1~0.5cm大の礫と炭化物、弥生土器を含む。
- 第VI層 暗褐色(10YR3/3)礫質砂層で1~10cm大の礫を多く含む。
- 第VII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)礫質砂層で0.1~3cm大の礫を含む。
- 第VIII層 にぶい黄褐色(10YR5/4)礫質砂層で0.1~3cm大の礫を含む。
- 第IX層 暗褐色(10YR4/3)シルト質砂層で0.1~0.5cm大の礫を含む。
- 第X層 明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質砂層で0.1~1cm大の礫を含む。
- 第XI層 地山礫層

バンク2

- 第I層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層(表土)
- 第II層 褐色(10YR4/4)シルト質砂層で0.1~1cm大の礫を含む。
- 第III層 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂層で0.1~0.5cm大の礫を少量含む。
- 第IV層 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂層で0.1~1cm大の礫を含む。
- 第V層 黄褐色(10YR5/6)シルト質砂層で0.1~0.5cm大の礫と炭化物、弥生土器を含む。
- 第VI層 褐色(10YR4/6)礫質シルト層で0.1cm大の礫を少量含む。
- 第VII層 明黄褐色(10YR6/8)シルト質砂層で0.1~1cm大の礫を含む。
- 第VIII層 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト層で0.1~1cm大の礫を含む。

層位中遺構が検出されたのは第XI層上面であり、弥生土器が出土したのは2次堆積と考えられる第V層であった。

(3) 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

弥生土器(Fig.5-1)

1は底部破片で、底径6.0cmを測り、体部は殆ど残存していない。外面にヨコ方向のハケ調整が残るが全体的に摩耗が著しい。色調は、内面がにぶい赤褐色、外面が褐灰色を呈し、胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。

石製品(Fig.5-2)

2は砥石で、両端を欠損するが残存長13.0cm、全幅2.5cm、全厚2.0cmを測る。石材は泥岩と考え

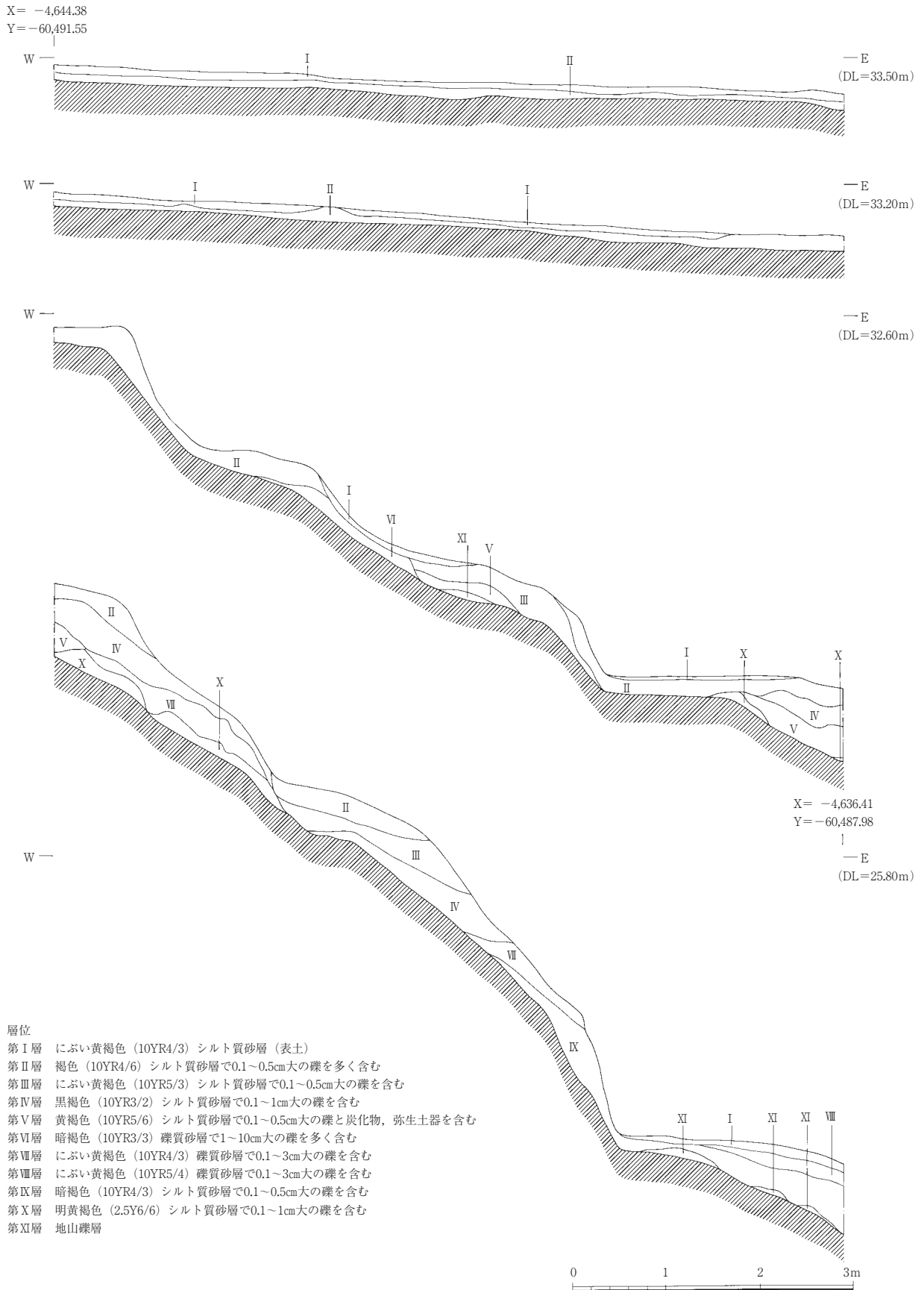


Fig.3 バンク1セクション図

X = -4,635.86
Y = -60,487.14

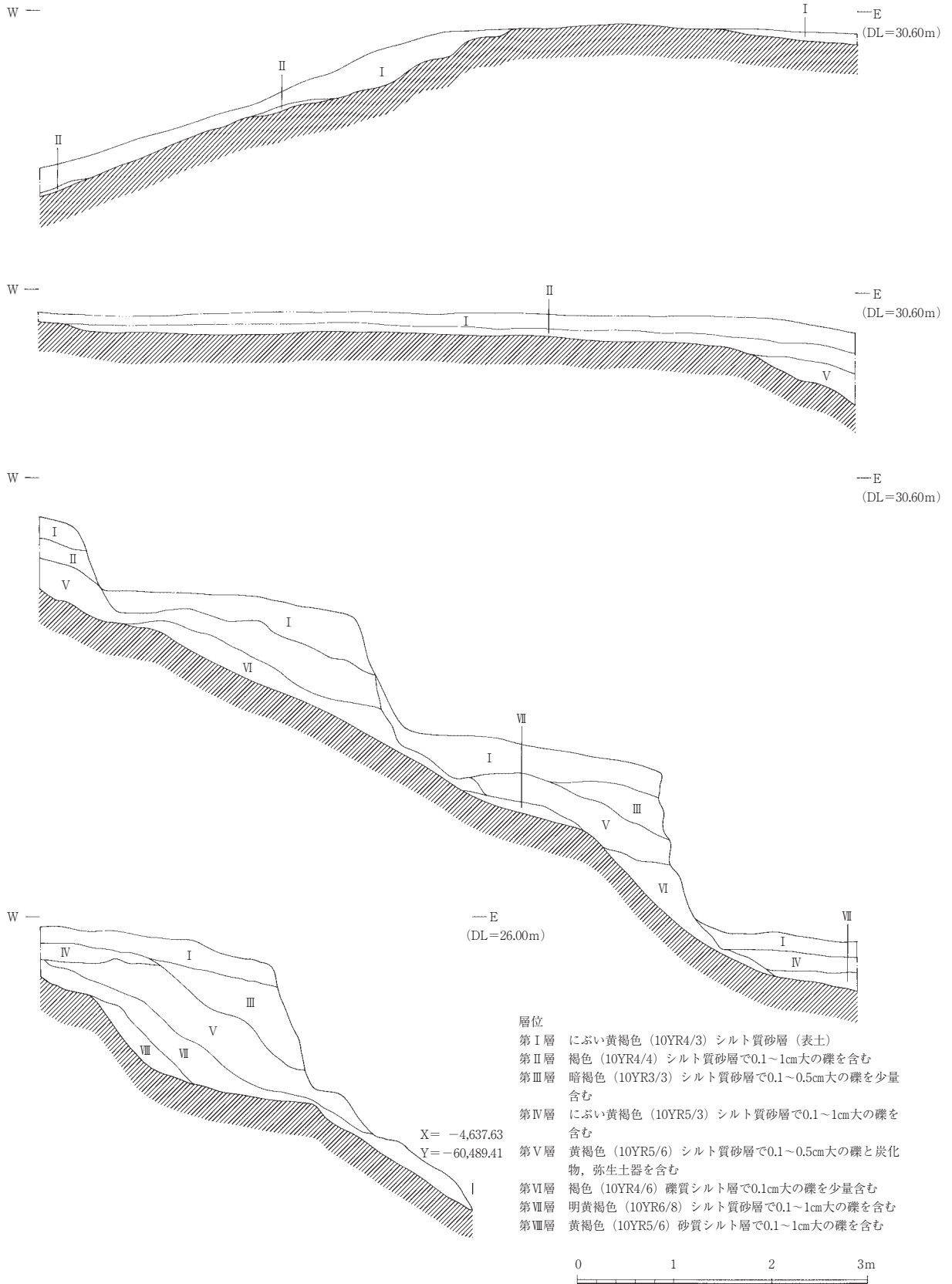


Fig.4 バンク2セクション図

られ、4面ともに使用痕が残る。

第Ⅳ層出土遺物

弥生土器 (Fig.5-3)

3は底部破片で、底径5.0cmを測り、胴部は殆ど残存していない。器面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色、灰黄褐色を呈し、胎土には1~2mm大の砂礫を多く含み、焼成は不良である。

第Ⅴ層出土遺物

弥生土器 (Fig.5-4~10)

4~6は壺である。4は口縁部から胴部までの破片で、口径7.2cm、胴径14.5cmを測る。球形に近い胴部から頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。上胴部から頸部にかけて断面三角形を呈する3条の突帯とその下部に円形浮文を貼付ける。内面には指ナデ調整を施し、口縁部外面にはヨコナデ調整が残るが、胴部外面は摩耗が著しく調整不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。5・6は口縁部破片である。5は口径18.0cmを測り、口縁部は大きく外反し、端部は内傾する面をなす。内面にはヨコ方向のハケ調整、外面はタテ方向のハケ調整を施す。色調は内外面とも

にぶい赤褐色を呈し、胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。6は口径14.6cmを測り、口縁部は大きく外反する。口縁端部外面には弱い刻目を施し、口縁端部下約1.5cm、2.3cmには断面三角形を呈する微隆起突帯を貼付ける。外面には突帯貼付け時のヨコナデが残るが、全体的に摩耗が著

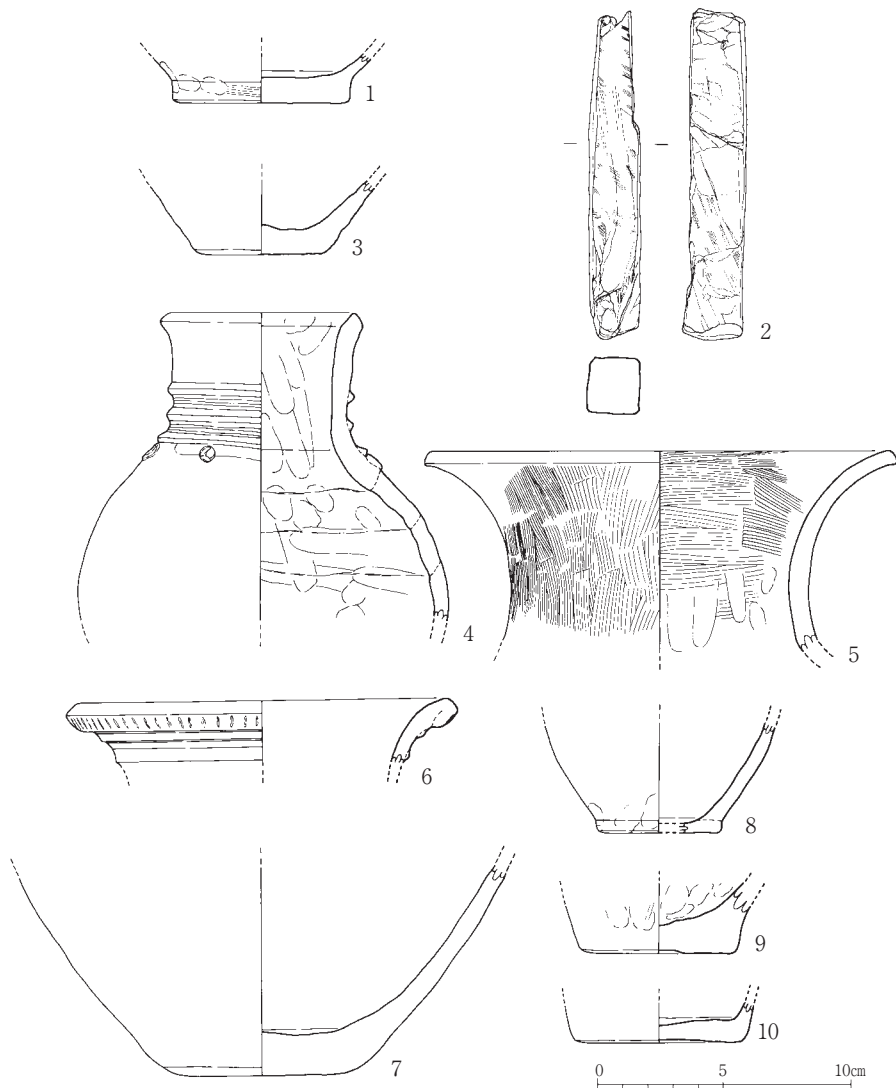


Fig.5 第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ層出土遺物 (弥生土器・石製品)

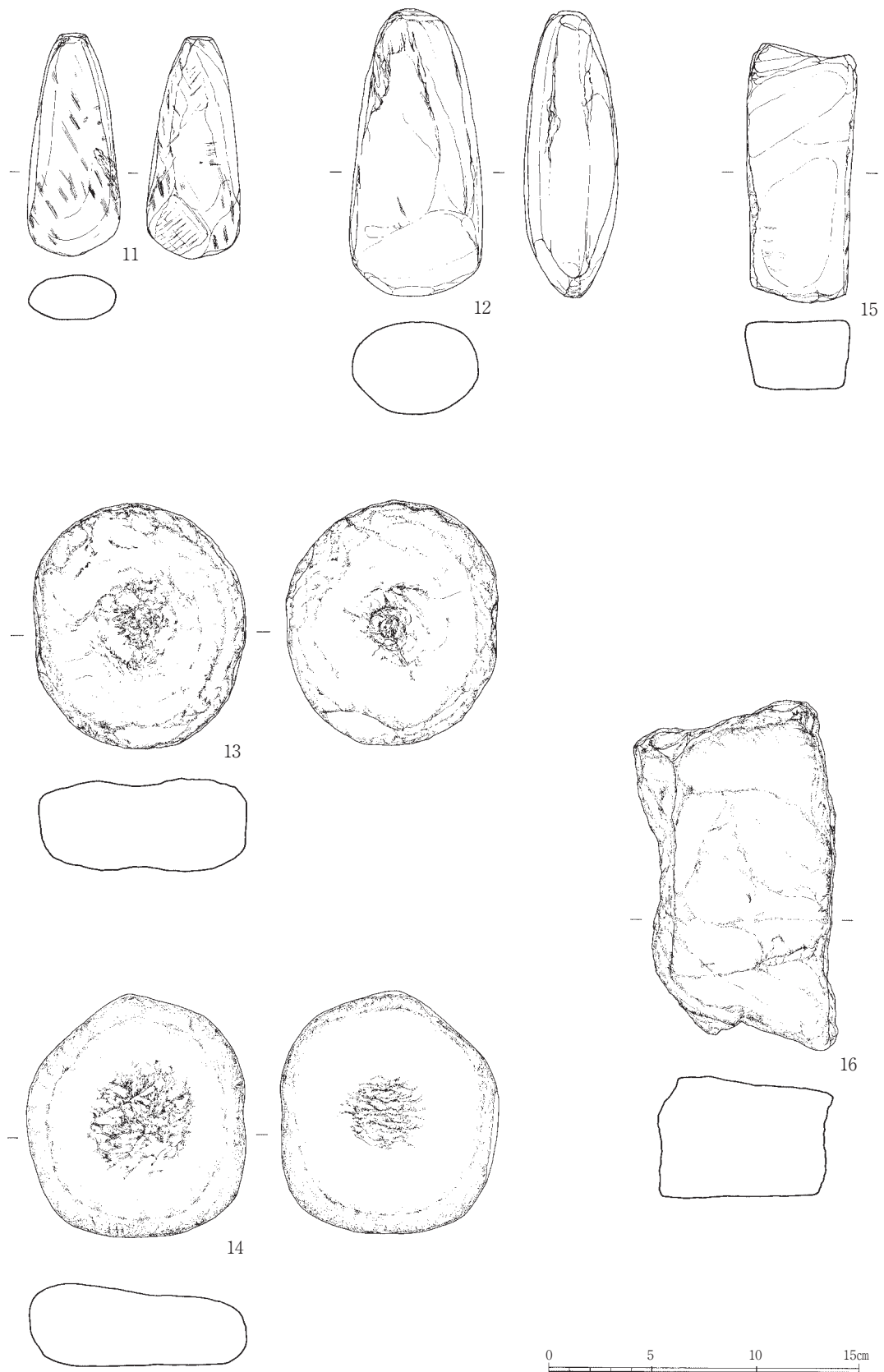


Fig.6 第V層出土遺物(石製品)

しく調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄色、外面が灰黄色、暗灰黄色を呈し、胎土には1~2mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。

7~10は底部破片である。7は底径5.0cmを測り、胴部は平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる。器面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が灰黄色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。8は底径4.4cmを測り、平底の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。外面には指頭圧痕が残るが、全体的に摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を含み、焼成はやや不良である。9は底径5.3cmを測り、胴部は残存しない。内面に指頭圧痕が残るが、全体的に摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面が暗灰黄色、外面が明赤褐色を呈し、胎土には1~5mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。10は底径5.6cmを測り、胴部は残存していない。器面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面が明赤褐色、外面が橙色を呈し、胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。

石製品 (Fig.6-11~16)

11・12は完存する磨製石斧である。11は全長10.7cm、全幅4.5cm、全厚2.1cm、重さ157.6gを測る。全体を丁寧に研磨して仕上げしており、刃部には使用に伴う摩耗がみられる。石材は緑色片岩である。12は全長13.7cm、全幅6.3cm、全厚4.5cm、重さ590.4gを測る。刃部は使用に伴って欠損、摩耗している。石材は蛇紋岩とみられる。

13・14は叩石である。13は全長11.8cm、全幅10.2cm、全厚4.4cm、重さ842.5gを測り、両面中央部に敲打痕が残る。石材は砂岩である。14は全長11.7cm、全幅15.0cm、全厚4.0cm、重さ757.7gを測り、両面と側面の一部に弱い敲打痕が残る。石材は砂岩である。

15は砥石で、全長12.4cm、全幅5.3cm、全厚3.3cm、重さ418.0gを測る。両面ともに使用痕がみられ、石材は泥岩である。

16は台石で、全長16.8cm、全幅9.9cm、全厚5.8cm、重さ1,464.8gを測る。両面ともに使用痕が残り、石材は砂岩である。

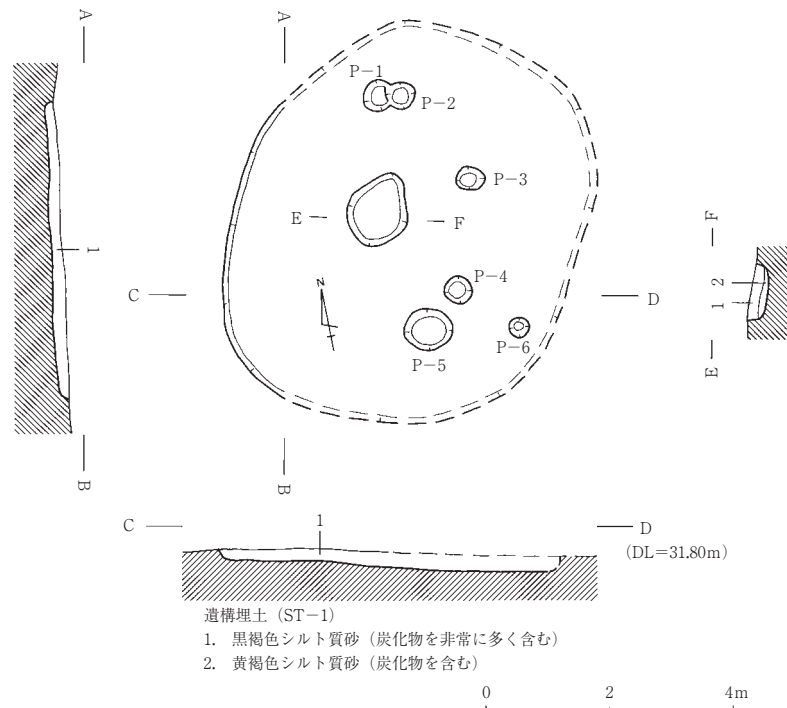


Fig.7 ST-1

3. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

ST-1 (Fig.7)

調査区南東部の平場で検出した竪穴住居跡である。平面形は楕円形を呈し、長径4.36

m, 短径3.72m, 検出面からの深さ12cm, 面積14.10m²を測る。長軸方向はN-30°-Eである。床面の標高は31.20~31.40mを測り, 東側がやや低くなっており, 付随遺構として土坑1基と6個の柱穴を検出した。土坑は長辺0.84m, 短辺0.68mを測る。埋土は2層に分層され, 1層は炭化物を非常に多く含む黒褐色シルト質砂, 2層は炭化物を含む黄褐色シルト質砂であり, 出土遺物には弥生土器片4点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。土坑は位置的に住居跡のほぼ中央に位置しており, 炭化物も多く含まれることから, 炉跡とみられる。P-1~6は径0.24~0.52m, 床面からの深さ11~22cmを測り, P-2・5は主柱穴であった可能性が考えられる。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で, P-3から14点, P-5から7点の弥生土器片が出土しているが, 復元図示できるものはなかった。遺構埋土は1層(にぶい黄褐色シルト質砂)で, 出土遺物には弥生土器片273点がみられ, 弥生土器1点(17)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.8-17)

17は高杯で, 杯部は残存しておらず, 脚柱部のみ残る。外面には指頭圧痕が残るが, 全体的に摩耗が著しく調整は不明である。色調は, 内外面ともににぶい黄橙色を呈し, 胎土には微砂粒を含み, 焼成はやや不良である。

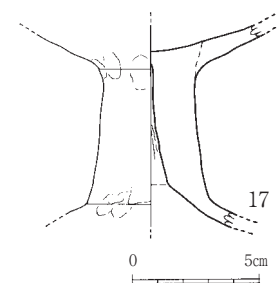


Fig.8 ST-1出土遺物

ST-2 (Fig.9)

調査区西部の尾根上で検出した竪穴住居跡である。平面形はほぼ円形を呈し, 長径8.70m, 短径8.10m, 検出面からの深さ18~27cm, 面積56.20m²を測る。また, この住居跡内の南東部には径約4.30m, 面積14.10m²の平面形がほぼ円形のST-3を検出している。床面は標高約29.85mを測り, ほぼ平坦で, 付随遺構として土坑1基と25個の柱穴を検出した。また, 住居内北西部と南西部に壁溝を検出している。土坑は長径0.84m, 短径0.56mを測る。埋土は1層(0.1~1cm大の礫と炭化物を多く含む暗褐色砂質シルト)で, 出土遺物には弥生土器片7点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。位置的に住居跡の中央ではないが, 炭化物が多く含まれることから炉跡の可能性が考えられる。P-1~25は径18~38cm, 床面からの深さ5~37cmを測る。このうちP-2・6・11・16・24は深さが0.23~0.34mと比較的深く主柱穴であった可能性が考えられる。埋土は0.1~0.5cm大の礫と炭化物を含む黄褐色砂質シルトで, P-1から2点, P-10から2点, P-12から2点, P-15から1点, P-18から1点, P-24から2点, P-25から2点の弥生土器片が出土しているが, 復元図示できるものはなかった。遺構埋土は3層に分層され, 1層が0.1~1cm大の砂礫, 炭化物を含む黒褐色砂質シルト, 2層が0.1~3cm大の砂礫, 炭化物を含む褐色砂質シルト, 3層が0.1~0.5cm大の砂礫を多く含む黄褐色砂質シルトであり, 1層から弥生土器片24点, 2層から弥生土器片159点, 石製品3点が出土しており, 弥生土器1点(18), 石製品3点(19~21)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.10-18)

18は壺の頸部から胴部にかけての破片で, 頸部と胴部の境に5条の微隆起突帯を施し, 頸部下端には楕円形浮文を貼付ける。調整は摩耗が著しく不明であり, 色調は, 内面が灰黄色, 外面がに

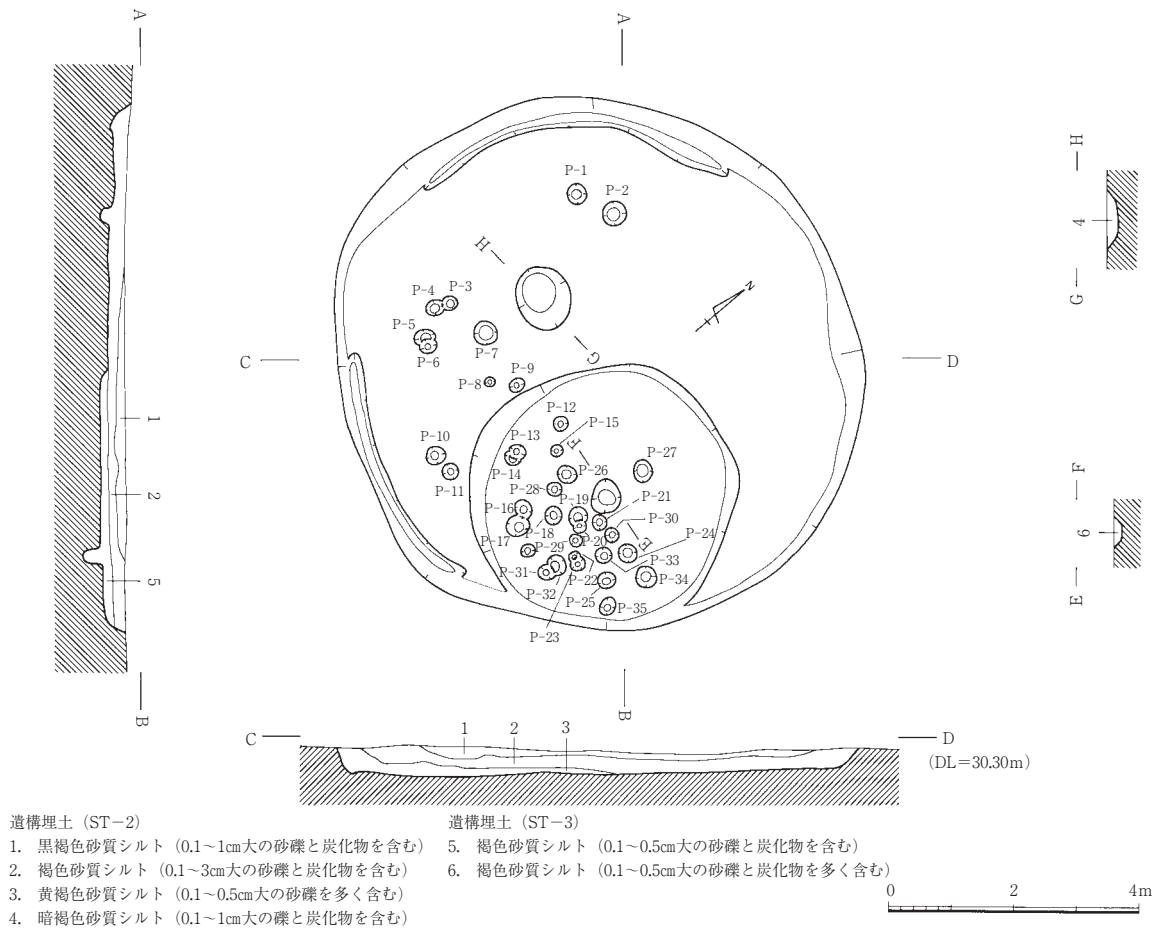


Fig.9 ST-2・3

ぶい黄橙色を呈し、胎土には1~2mm大の砂礫を含み、焼成は不良である。

石製品 (Fig.10-19~21)

19は磨製石鏃で、基部を若干欠損する。全長3.6cm, 全幅1.6cm, 全厚0.3cm, 重さ1.8gを測り、全体に研磨痕がみられ、両側縁部の刃部は丁寧に研磨して作り出している。凹基式であり、石材は粘板岩とみられる。

20は叩石で全長10.9cm, 全幅9.9cm,

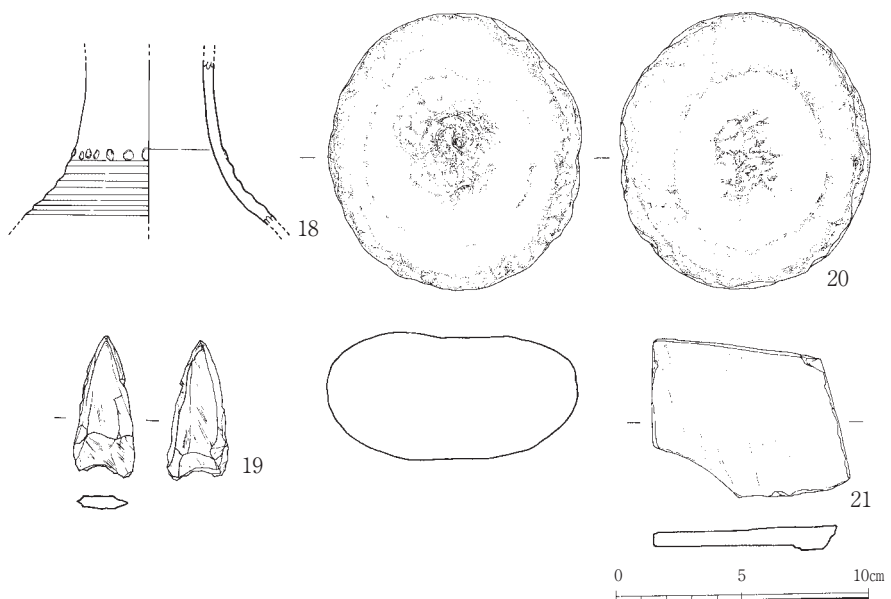


Fig.10 ST-2出土遺物 (19は1/2)

全厚5.0cm, 重さ771.3gを測り, 両面中央部と側面に強い敲打痕が残る。石材は砂岩である。

21は砥石で, 大部分は欠損しており, 残存長6.2cm, 残存幅7.8cm, 残存厚0.9cm, 重さ47.5gを測る。上面と下面の一部, 側面に使用痕が残る。石材は泥岩である。

ST-3 (Fig.9)

ST-2の床面で検出された竪穴住居跡である。平面形はほぼ円形を呈し, 径約4.30m前後, 面積14.10m²を測る。床面の標高は29.71~29.78mを測り, やや南東方向に傾斜しており, 付随遺構として土坑1基と10個の柱穴を検出した。土坑は長径0.54m, 短径0.47mを測り, 埋土は1層(0.1~0.5cmの砂礫, 炭化物を多く含む褐色砂質シルト)で, 位置的にはほぼ住居跡の中央に位置していることから, 炉跡の可能性が考えられる。P-26~35は径14~36cm, 床面からの深さ7~39cmを測る。このうちP-26・27・31・34は深さが0.20~0.39mと比較的深く支柱穴であった可能性が考えられる。埋土は0.1~0.5cmの砂礫, 炭化物を含む褐色砂質シルトで, P-33から3点の弥生土器片が出土しているが, 復元図示できるものはなかった。遺構埋土は1層で, 0.1~0.5cmの砂礫, 炭化物を含む褐色砂質シルトで, 弥生土器片68点が出土しているが, 復元図示できるものはなかった。

(2) 土坑

SK-1

調査区北東部で検出した土坑である。北側は調査区外にあるため長径, 短径は不明である。深さ4~6cmを測り, 断面は舟底状を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂に0.1~1cm大の礫と炭化物を含むものであった。出土遺物には弥生土器片14点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-2 (Fig.11)

調査区東部, ST-1の西側で検出した楕円形の土坑である。長径1.02m, 短径0.84m, 深さ12cmを測り, 断面は舟底状を呈する。長軸方向はN-26°-Wである。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂に0.1~1cm大の礫と炭化物を多く含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SK-3

調査区東部, ST-1の東側で検出した楕円形の土坑である。長径0.98m, 短径0.82m, 深さ8~22cmを測る。長軸方向はN-32°-Eである。埋土は1層が0.1~1cm大の礫と炭化物を含むにぶい黄褐色シルト質砂, 2層が0.1~1cm大の礫を含むにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器片2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

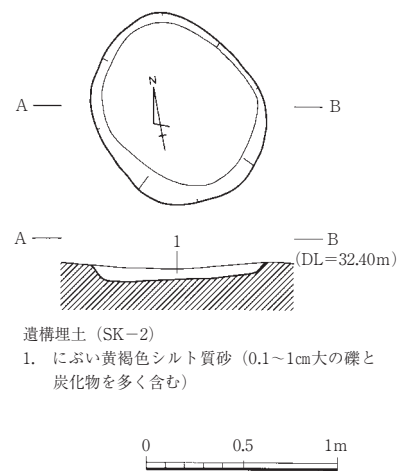


Fig.11 SK-2

(3) 段状遺構

SS-1

調査区南東斜面部で検出した段状遺構である。全長約9.50m, 最大幅約3.60m, 段を形成する平坦面の面積は約17.70m²を測る。基底面の標高は25.31~26.68mでやや谷側に向かって傾斜する。埋

土は9層に分層される。出土遺物には弥生土器片65点、石製品2点がみられ、弥生土器3点(22~24)、石製品2点(25・26)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.12-22~24)

22は壺と考えられる口縁部破片で口径16.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、口縁端部には粘土帯を貼付けていたとみられる。また、口縁端部外面に配される2条の微隆起突帯は摘み出しによるものと考えられ、調整は全体的に摩耗が著しく不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成はやや不良である。

23は鉢と考えられる口縁部破片で口径18.4cmを測り、口縁部は緩やかに開く胴部から大きく外反し、口縁端部はやや肥厚する。内面にはハケ調整を施すが、外面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面が赤褐色、明赤褐色、外面が明褐色、赤色を呈し、胎土には1~2mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。

24は底部破片で底径7.0cmを測り、胴部はほとんど残存しない。全体的に摩耗が著しいが、外面には不定方向のナデ調整がみられる。色調は内面が暗灰色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。

石製品 (Fig.12-25・26)

25は磨製石斧で基部は欠損しており、刃部のみ残存する。残存長6.3cm、残存幅3.9cm、残存厚0.7cm、重さ22.9gを測る。残存している刃部には使用に伴う摩耗がみられる。石材は粘板岩とみ

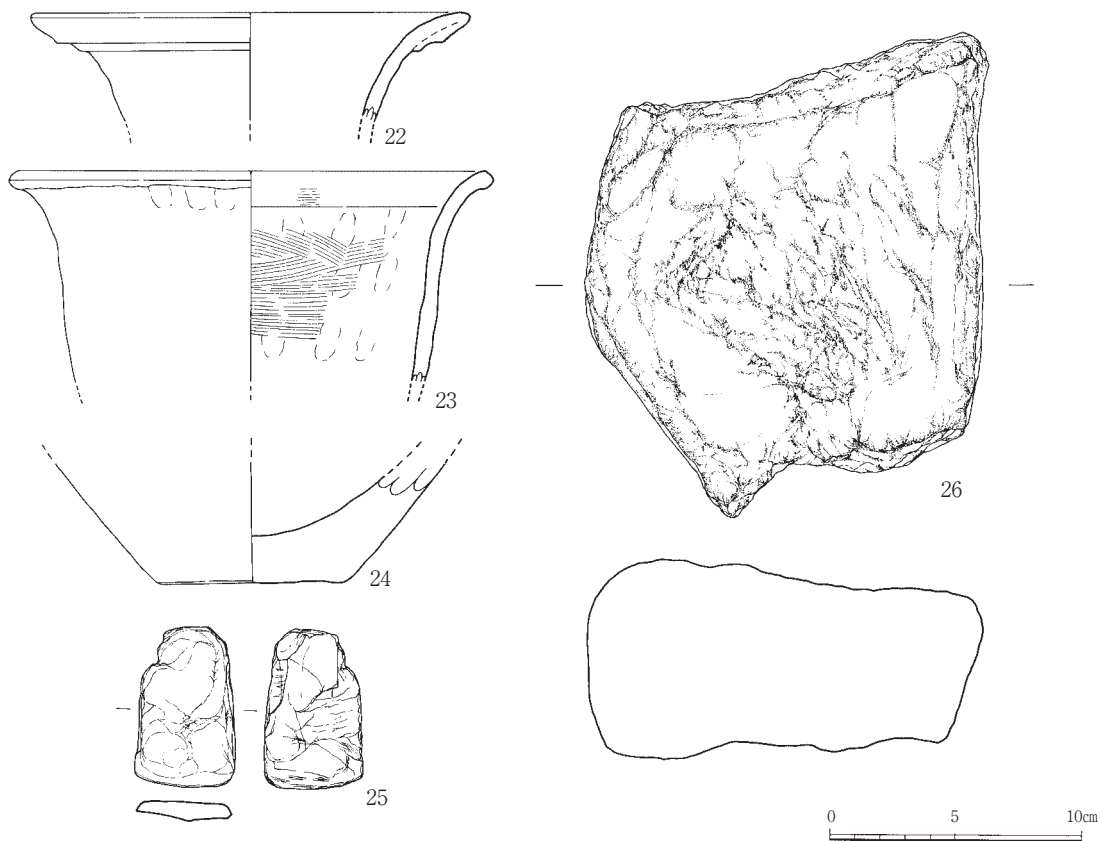


Fig.12 SS-1出土遺物

られる。

26は台石で，全長19.0cm，全幅15.7cm，全厚7.8cm，重さ3,200.0gを測る。片面と側面に使用痕が残り，石材は砂岩である。

SS-2

調査区南東斜面部で検出した段状遺構である。全長約5.70m，幅約3.40m，段を形成する平坦面の面積は約13.60m²を測る。基底面の標高は29.50~29.60mで，ほぼ平坦である。埋土は0.1~10cm大の礫と炭化物を含むにぶい黄褐色シルト質砂である。出土遺物には弥生土器片12点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SS-3

調査区南斜面部で検出された段状遺構である。全長約5.60m，幅約2.10m，段を形成する平坦面の面積は約8.20m²を測る。基底面の標高は29.50~29.60mを測り，ほぼ平坦である。埋土は0.1~3cm大の礫と炭化物を含むにぶい黄褐色砂質シルトである。出土遺物には弥生土器片56点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SS-4

調査区南斜面部で検出した段状遺構で，谷側は削平されているとみられる。全長6.70m，残存

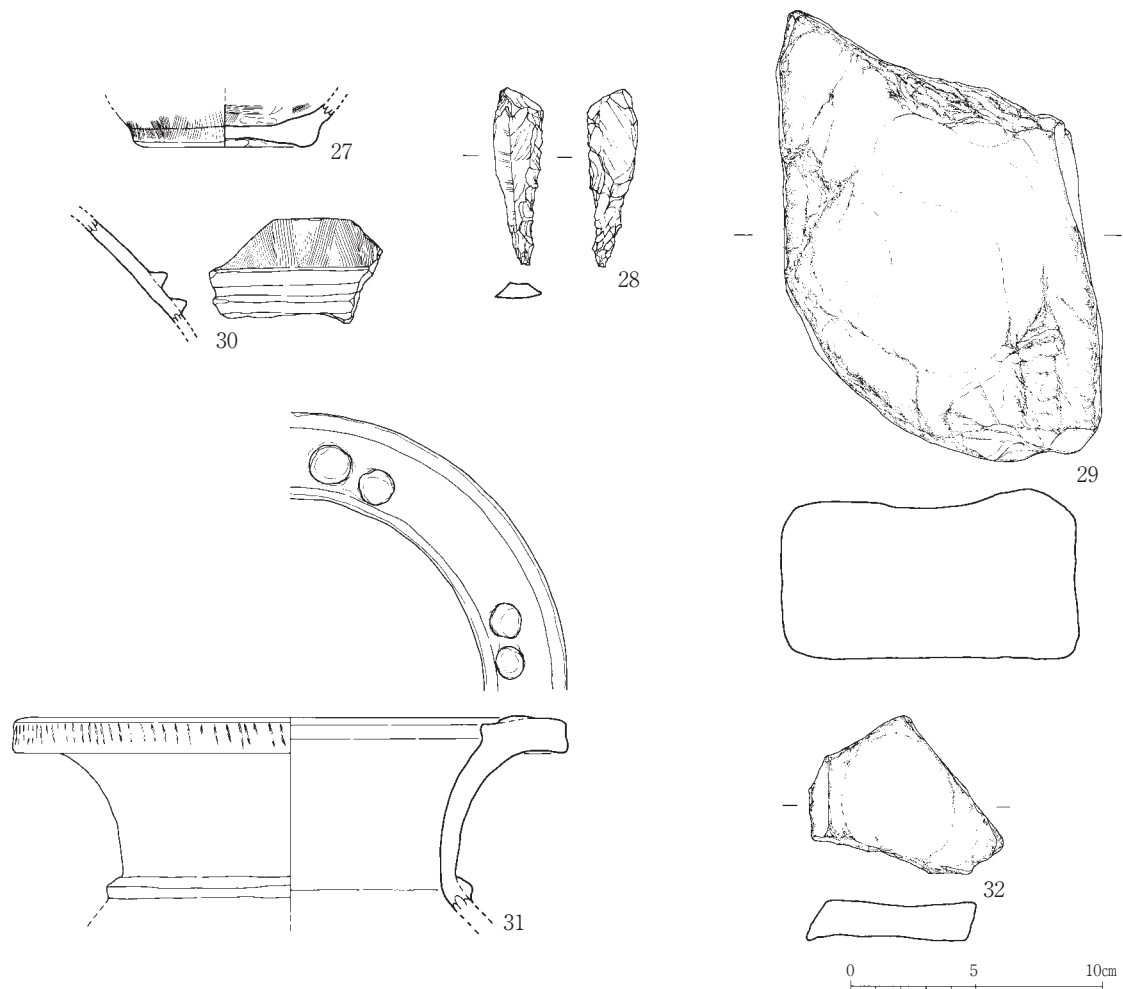


Fig.13 SS-4~6出土遺物 (28は1/2)

幅1.80mを測る。基底面の標高は29.20~29.50mを測り、大きく谷側に傾斜する。埋土は3層に分層される。出土遺物には弥生土器片86点、石製品2点がみられ、弥生土器1点(27)、石製品2点(28・29)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.13-27)

27は底部破片で底径6.2cmを測る。調整は内外面ともハケ調整で、色調は、内外面とも明赤褐色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成は不良である。

石製品 (Fig.13-28・29)

28は石錐で、全長4.7cm、全幅1.3cm、全厚0.4cm、重さ2.6gを測る。両側刃部には細かな剥離痕がみられる。石材は赤色頁岩である。

29は台石で、全長15.9cm、全幅13.0cm、全厚9.0cm、重さ2,173.8gを測る。4面ともに使用痕が残り、石材は砂岩である。

SS-5

調査区南部で検出した段状遺構で、谷側は削平されているとみられる。全長約4.00m、残存幅約2.00m、平坦面の面積は約2.00m²を測る。基底面の標高は29.50~29.60mを測り、やや谷側に傾斜する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトであり、出土遺物には弥生土器片14点がみられ、弥生土器1点(30)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.13-30)

30は壺の肩部と考えられる破片で、外面に断面三角形の突帯を貼付ける。内面は摩耗が著しく調整は不明であるが、外面にはハケ調整を施す。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい褐色を呈し、胎土には1~3mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。

SS-6

調査区南西部で検出した段状遺構で、全長約7.60m、幅約2.10m、平坦面の面積は約9.50m²を測る。基底面の標高は28.90m前後を測り、ほぼ平坦である。埋土は0.1~3cm大の砂礫と炭化物を含む褐色礫質砂であり、出土遺物には弥生土器片20点、石製品1点がみられ、弥生土器1点(31)、石製品1点(32)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.13-31)

31は壺の口縁部破片で口径20.6cmを測り、口縁部は大きく外反し、口縁端部はほぼ水平をなす。口縁端部内面には2個を単位とした径約1.5cmの円形浮文を貼付け、端部には弱い刻目を施す。また、頸部と肩部の境に断面三角形の突帯を貼付け、調整は摩耗が著しく不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成は不良である。

石製品 (Fig.13-32)

32は砥石で、大部分は欠損している。残存長6.3cm、残存幅7.8cm、残存厚1.7cm、重さ86.5gを測り、上面と側面に使用痕が残る。石材は砂岩である。

SS-7

調査区南西部で検出した段状遺構で、全長約8.80m、幅約1.80m、平坦面の面積は約12.50m²を測る。基底面の標高は24.80~25.10mで谷側に向かって傾斜している。埋土は1層が褐色砂質シルト、2層が明黄褐色砂質シルト、3層が黄褐色砂質シルトである。出土遺物には弥生土器片164点、石製品2点がみられ、弥生土器3点(33~35)、石製品2点(36・37)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.14-33~35)

33・34は甕である。33は口縁部から胴部にかけての破片で、口径16.6cm、胴径14.4cmを測る。胴部は長胴形を呈し、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部は内傾する面をなし、刻目を施す。頸部外面には櫛描直線文帯を施し、肩部には断面三角形の微隆起突帯を貼付け、その下部に円形浮文を配する。調整は口縁部にヨコナデ調整、上胴部にヨコ方向のハケ調整が残るが、全体的に摩耗が著しい。色調は、内面が灰黄褐色、外面が灰褐色、にぶい黄橙色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成は不良である。34は口縁部破片で、口径18.1cmを測り、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部は内傾する面をなし、斜め方向から入れる刻目を施す。調整は内面の一部にハケ調整、外面の一部にヨコナデ調整が残るが、全体的に摩耗が著しい。色調は、内面がにぶい褐色、外面が灰黄色、暗灰色を呈し、胎土には1~2mm大の砂礫を含み、焼成は良好である。

35は底部破片で、底径5.1cmを測る。内面の一部に指頭圧痕が残るが、全体的に摩耗が著しい。色調は、内面がにぶい黄褐色、外面が赤褐色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成はやや不良である。

石製品 (Fig.14-36・37)

36は磨石で、全長7.5cm、全幅6.9cm、全厚5.6cm、重さ356.9gを測る。ほぼ球形を呈し、周囲には使用痕が顕著に残る。石材は白色の泥岩である。

37は砥石で、全長9.3cm、全幅5.3cm、全厚1.9cm、重さ126.4gを測る。両面と側面の一部に使用痕が残り、石材は泥岩である。

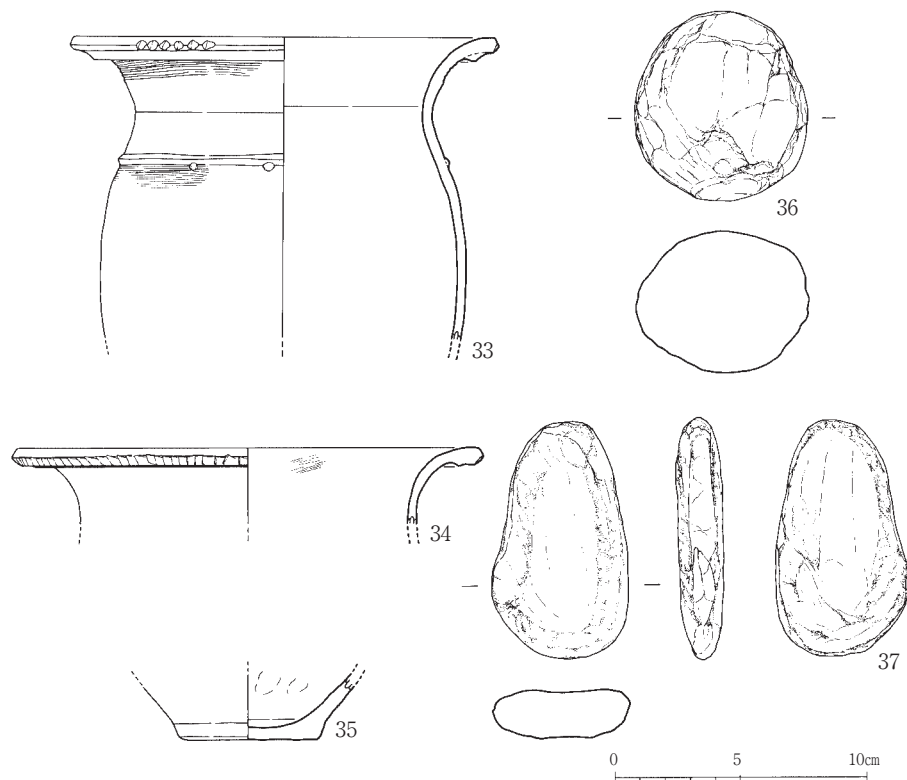


Fig.14 SS-7出土遺物

第Ⅲ章 古津賀遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

国道56号線の古津賀沿線は、東西の交通の要所であるため交通量が多く、交通渋滞の緩和策として道路拡幅工事が行われている。その中で古津賀遺跡の調査は、国土交通省の中村宿毛高規格道路建設に伴う緊急発掘調査として実施されることとなった。古津賀遺跡は古墳時代の祭祀遺跡として周知されており、近年の調査では弥生時代や古墳時代の遺構・遺物が確認され、調査範囲も広がりを見せている。今回の調査対象地区は国道56号線沿いで、調査面積は163m²（古代56m²，古墳時代50m²，弥生時代47m²，確認トレンチ10m²）で、調査期間は平成13年5月7日から6月13日までであった。

(2) 調査の方法

今回の調査区は国道56号線に沿っており、交通量が多いため、道路より1m後方に防護柵を設置し転落防止・追突防止対策を施し、北側は、木杭を立てロープで周りを囲った。また、調査を行

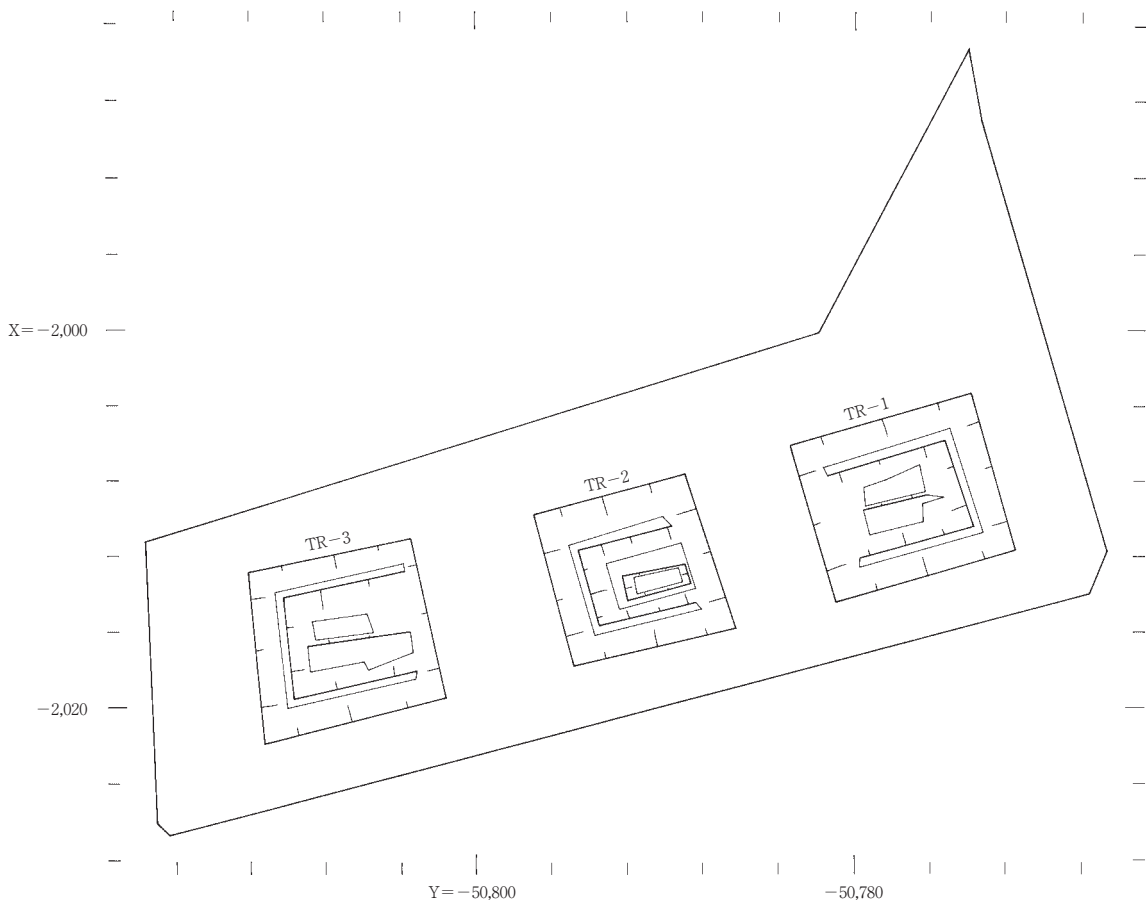


Fig.15 古津賀遺跡トレンチ設定図 (S=1/400)

う箇所にはTR-1(10×9m), TR-2(8×8m), TR-3(10×9m)の3つのトレンチを設定し、調査に先立って3級基準点を3点設置した。水準点は調査区近くの3等水準点(4.345m)から水準測量を行い、調査区の座標既設点の標高を設置した。報告書では、この結果に基づき、図面に公共座標(旧日本座標系)を記している。なお、グリッド設定については座標既設点から任意の座標を設置して、調査区内に必要な応じて杭を打ち、トレンチ内の遺構・遺物の測量等に使用した。

表土下約1.7mまでは、客土のため重機を用いて除去し、壁面の崩落を防ぐために軽量鋼矢板を重機掘削作業以外の三方に打ち込み、段を設けた。下層の掘削は遺物が確認されるまで勾配をつけながら重機掘削を行い、部分的に遺物が散見される場所では、人力掘削を併用した。

遺物包含層は層序確認の後、人力掘削を行った。出土遺物は必要に応じて写真撮影を行い、出土地点を光波測量した後取り上げた。また、遺構・遺物は、写真撮影の後、平面図・断面図を必要に応じて作成し、レベル測量を行った。最終確認のためにトレンチを掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。

(3) 調査日誌抄

2001.5.7~6.13

- | | | |
|------|---|--|
| 5.7 | 調査前の写真撮影と調査の準備作業を行う。 | 層から第Ⅲ層にかけて土器の集中が確認される。 |
| 5.8 | 調査対象地区の安全防護柵工事を行うとともに現場用掲示板を作成する。 | 5.18 祭祀遺構(SF-1)を確認し、東・北・南壁のセクションの土層断面図を作成する。 |
| 5.9 | 防護柵工事等、調査の準備作業を引き続き行う。 | 5.19 雨天であったが、遺物出土状態図の実測を行う。 |
| 5.10 | 調査の準備作業を行う。光波による調査区の測量を行い、全体の形状と公共座標に即した4mグリッド図を作成する。 | 5.22 雨のため現場作業を中止する。 |
| 5.11 | 調査の準備作業を引き続き行う。 | 5.23 雨のため現場作業を中止する。 |
| 5.14 | 油圧ブレーカー付きバックホーで、調査予定地周辺のコンクリート基礎部及びアスファルトの一部を掘削する。調査予定トレンチ3カ所の光波測量を行い、調査区北側に安全柵を設置する。 | 5.24 SF-1の精査を行う。午後から写真撮影、レベル測量を行ったあとで、遺物を取り上げる。 |
| 5.15 | 発掘調査を開始する。TR-1の掘削を開始し、客土を除去したところで軽量鋼矢板を法面に打ち込む。客土と旧耕作土の一部までの掘削を完了する。 | 5.25 前日の作業で取り上げるのでできなかった遺物の取り上げ作業を行う。セクションの土層断面図作成、TR-1平面図作成のため光波による測量及び完掘写真撮影を行う。 |
| 5.16 | 第Ⅸ層から土師器細片2点が出土したが、第Ⅹ層上面で遺構は検出されなかった。 | 5.26 下層確認トレンチの掘削を行い、下層セクションの土層断面図作成及び写真撮影を行う。埋め戻し作業を行い、周辺の清掃を行う。 |
| 5.17 | 第Ⅺ層まで機械掘削を行い、第Ⅻ層から土器が出土したため、人力掘削に切り替える。第Ⅻ | 5.28 TR-2の発掘作業を開始し、客土除去後、北・西・南側に軽量鋼矢板を設置する。 |
| | | 5.29 第Ⅺ層まで機械掘削を行い、第Ⅻ層の途中から人力掘削に切り替える。完掘写真の撮影並びに北・西壁セクションの土層断面図を作成する。下 |

層確認トレンチを掘削するが、遺構・遺物は検出されなかったため、TR-2の埋め戻し作業を行う。

5.30 情報交換会のため現場作業を中止する。

5.31 TR-3の発掘作業を開始し、客土の機械掘削を行う。法面に軽量鋼矢板を設置する。

6.1 重機で掘削した後、第X層上面で遺構を検出し、遺構検出状態の写真撮影を行う。

6.2 第X層上面遺構の調査を行う。完掘状態写真撮影並びに遺構平面図の作成後、レベル測量を行う。第XI層上面を重機掘削した後、人力掘削を行う。

6.5 雨天のため現場作業を中止する。

6.6 雨天のため現場作業を中止する。

6.7 第XI層から第XII層にかけて人力掘削を行う。第XI層と第XII層の境界から土器が出土し、第XII層上面で遺構を検出する。土器出土状態、遺構検出

状態の写真撮影を行い、遺構の調査と併行して西・北壁セクションの分層を行う。各セクションと第XII層上面遺構の完掘状態の写真撮影を行う。

6.8 第XIII層を遺物が確認されるまで機械掘削を行い、確認された段階で人力掘削を開始する。第XIV層まで調査した段階で、TR-3並びに西・北壁セクションの写真撮影を行う。

6.11 TR-3の平面図を作成するために光波による測量を行い、下層確認トレンチを掘削する。西・北壁セクションの追加測量並びに完掘状態の写真撮影を行い、TR-3の調査を終了する。

6.12 TR-3の埋め戻し作業を行い、客土を戻した状態で確認写真を撮影する。

6.13 TR-3の埋め戻し作業と調査区全体の清掃作業を行い、発掘調査を完了する。

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査では弥生時代、古墳時代、古代の3時期の遺構・遺物を確認することができたが、本調査地区の中心時期は古墳時代であり、TR-1から祭祀関連遺物である壺・甕・高杯・手づくね土器が出土している。TR-2では土器の細片が数点出土したのみで遺構は検出されず、TR-3では弥生土器細片や土師器甕が出土している。また、遺構は第X層上面と第XII層上面で検出し、各トレンチでは昭和初期からの粘土採掘坑跡が確認された。

(2) 層序

調査区の層序はTR-1が第XIII層、TR-2は第XX層、TR-3は第XIII層まで北壁で捉えた。土層の堆積は各トレンチともに地表下約1.7mまでは客土で、第II層は層厚0.26mを測る粘土質シルトで旧耕作土である。各トレンチの層位は第I層から第XIV層まで土色は異なるが、土質は粘土質シルトとシルト質粘土が交互に重なることから、ほぼ水平につながると考えられる。また、各トレンチの第X層が古代、第XII層が古墳時代、第XIV層が弥生時代の遺物包含層である。TR-1とTR-2は粘性の強い土層が堆積しており、洪水による氾濫の影響で土層の変化もみられるが、湿地状態で水が溜まって水簸に近い状態で堆積したことが考えられる。TR-1、TR-2の第I層から第X層までは層位がほぼ水平に堆積するが、第XI・XII層から調査区西側に位置するTR-3の層位が上がっている。また、TR-3の第IX層から第XII層まではマンガン粒を含んでおり、表面水型の水田耕作などの人為的な手が加わったものと考えられる。

古墳時代の検出面は深いところで地表面下約2.3mの地点で確認され、遺物包含層は標高約1.4~1.6mを測る。また、TR-3で第Ⅲs層にシルト質砂層がみられるが、近世における後川の洪水による影響と考えられる。第Ⅳ層から下層は粘土質の堆積物で、腐植土と砂の攪乱層がみられた。以下各トレンチの層序を記す。

層序

TR-1 (北壁セクション)

- 第Ⅰ層 客土層
- 第Ⅱ層 灰色(5Y4/1)粘土質シルト層
- 第Ⅲ層 暗オリーブ色(5Y4/4)粘土質シルト層
- 第Ⅳ層 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質シルト層
- 第Ⅴ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土層
- 第Ⅵ層 オリーブ色(5Y5/4)シルト質粘土層
- 第Ⅶ層 灰オリーブ色(5Y5/3)粘土質シルト層
- 第Ⅷ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層
- 第Ⅸ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト層
- 第Ⅹ層 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質シルト層
- 第Ⅺ層 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層

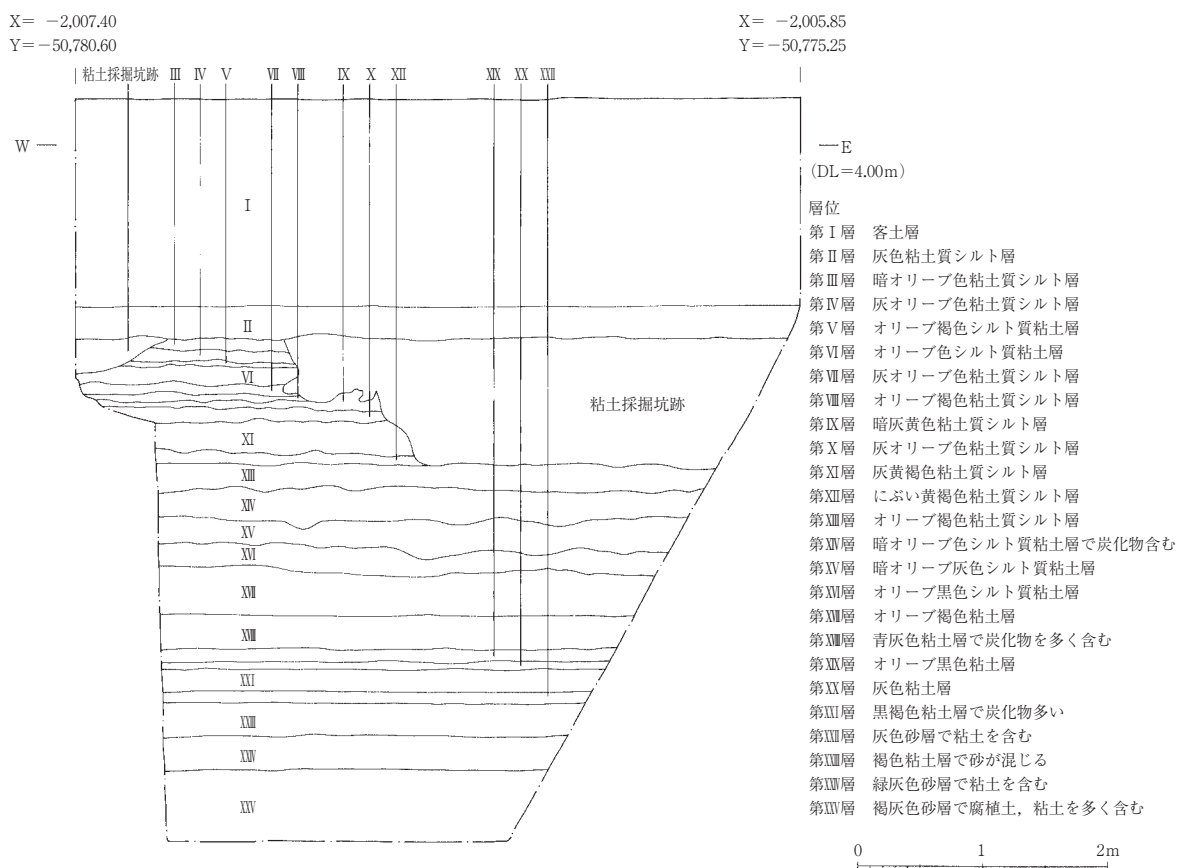


Fig.16 TR-1北壁セクション図

- 第Ⅻ層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト層
- 第Ⅼ層 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粘土質シルト層
- 第Ⅽ層 暗オリーブ色 (5Y4/4) シルト質粘土層で炭化物を含む。
- 第Ⅾ層 暗オリーブ灰色 (2.5G3/1) シルト質粘土層
- 第Ⅿ層 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト質粘土層
- 第ⅰ層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土層
- 第ⅱ層 青灰色 (5GB5/1) 粘土層で炭化物を多く含む。
- 第ⅲ層 オリーブ黒色 (5GY2/1) 粘土層
- 第ⅳ層 灰色 (7.5Y4/1) 粘土層
- 第ⅴ層 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘土層で炭化物を多く含む。
- 第ⅵ層 灰色 (7.5Y4/1) 砂層で粘土を含む。
- 第ⅶ層 褐色 (10YR4/4) 粘土層で砂が混じる。
- 第ⅷ層 緑灰色 (7.5GY5/1) 砂層で粘土を含む。
- 第ⅸ層 褐灰色 (7.5Y4/1) 砂層で腐植土, 粘土を多く含む。

TR-2 (北壁セクション)

- 第Ⅰ層 客土層
- 第Ⅱ層 オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘土質シルト層
- 第Ⅲ層 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土質シルト層
- 第Ⅳ層 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土質シルト層

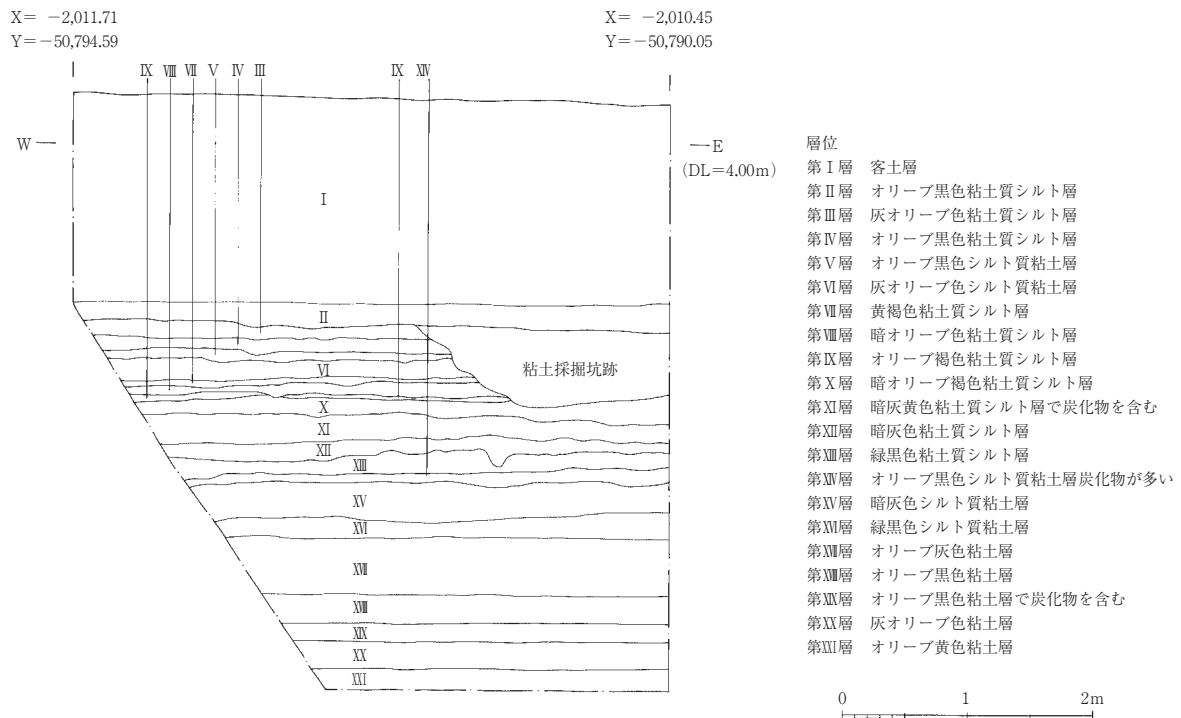


Fig.17 TR-2北壁セクション図

- 第V層 オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト質粘土層
- 第VI層 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質粘土層
- 第VII層 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土質シルト層
- 第VIII層 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘土質シルト層
- 第IX層 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘土質シルト層
- 第X層 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土質シルト層
- 第XI層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト層で炭化物を含む。
- 第XII層 暗灰色 (N3/) 粘土質シルト層
- 第XIII層 緑黒色 (10G2/1) 粘土質シルト層
- 第XIV層 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト質粘土層で炭化物が多い。
- 第XV層 暗灰色 (N3/) シルト質粘土層
- 第XVI層 緑黒色 (10GY1/2) シルト質粘土層
- 第XVII層 オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘土層
- 第XVIII層 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘土層
- 第XIX層 オリーブ黒色 (10GY2/1) 粘土層で炭化物を含む。
- 第XX層 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土層
- 第XXI層 オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘土層

TR-3 (北壁セクション)

- 第I層 客土層
- 第II層 オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘土質シルト層

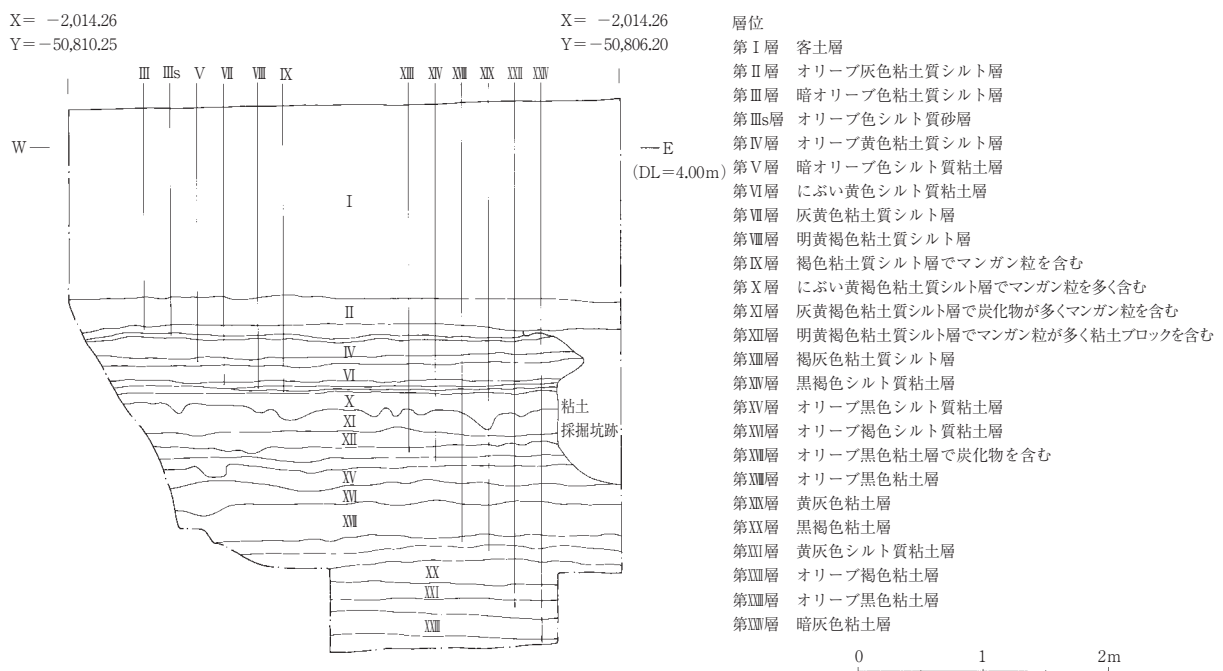


Fig.18 TR-3北壁セクション図

- 第Ⅲ層 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘土質シルト層
- 第Ⅲs層 オリーブ色 (5Y5/6) シルト質砂層
- 第Ⅳ層 オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘土質シルト層
- 第Ⅴ層 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) シルト質粘土層
- 第Ⅵ層 にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト質粘土層
- 第Ⅶ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト層
- 第Ⅷ層 明黄褐色 (2.5Y6/8) 粘土質シルト層
- 第Ⅸ層 褐色 (10Y4/1) 粘土質シルト層でマンガン粒を含む。
- 第Ⅹ層 にぶい黄褐色 (10Y5/4) 粘土質シルト層でマンガン粒を多く含む。
- 第Ⅺ層 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト層で炭化物が多くマンガン粒を含む。
- 第Ⅻ層 明黄褐色 (10YR6/8) 粘土質シルト層でマンガン粒が多く粘土ブロックを含む。
- 第Ⅼ層 褐灰色 (10YR5/1) 粘土質シルト層
- 第Ⅽ層 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土層
- 第Ⅾ層 オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト質粘土層
- 第Ⅿ層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土層
- 第ⅰ層 オリーブ黒色 (5Y2/2) 粘土層で炭化物を含む。
- 第ⅱ層 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘土層
- 第ⅲ層 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土層
- 第ⅳ層 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘土層
- 第ⅴ層 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質粘土層
- 第ⅵ層 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘土層
- 第ⅶ層 オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘土層
- 第ⅷ層 暗灰色 (N3/) 粘土層

(3) 堆積層出土遺物

堆積層出土遺物で図示できたものはTR-3出土の遺物のみで、TR-1ではSF-1以外の出土遺物は細片であり図示できるものはなく、TR-2でも第Ⅹ層から古代と考えられる土師器細片1点、第Ⅻ・Ⅼ層から古墳時代と考えられる土師器細片4点が出土しているが、復元図示できるものではなかった。また、古墳時代の土師器については、TR-1から高杯と手づくね土器が多く出土したため、高杯と手づくね土器について形態の分類を行った上で記述する。

高杯

杯部形態

A類 内湾気味に立ち上がる口縁部と体部に明瞭な稜を有するもので、口縁部が外反するものと直線状に伸びるものがある。

B類 内湾気味に立ち上がる口縁部と体部にわずかな稜を有するもので、口縁部が外反する

ものと直線状に伸びるものがある。

脚部形態

a類 脚柱部から屈曲して、直線状に伸び裾部端部へと続くもの。

b類 脚柱部から屈曲して、途中から水平に裾部端部へと続くもの。

接合法

①類 杯部の底部外面に玉状の粘土魁を貼付け、脚部に差し込んだもの。

②類 ①類と同様に粘土魁を貼付けるが、後で棒状のものか指頭で杯底部を調整するもの。

手づくね土器

A類 丸底のもの。

B類 平底のもの。

第XII層出土遺物 (TR-3)

土師器 (Fig.19-1~3)

1は甕の口縁で口径は13.4cmを測り、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し口縁端部は丸く収める。調整は内外面ともに摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部内面に指ナデ調整が残る。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は3mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。2は胴部から口縁部にかけての破片で、口径12.2cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、調整は内外面ともに摩耗が著しく不明瞭であるが、内面にヘラナデ調整が残る。色調は、内面が浅黄橙色、にぶい黄橙色、外面が浅黄橙色、橙色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。3は甕の底部から胴部にかけての破片である。ほぼ丸底状を呈し、調整は摩耗が著しく不明瞭であるが、底部内面にタタキ目、底部外面にヨコナデ調整が残る。色調は、内外面ともににぶい橙色と灰色を呈し、内外面の一部に黒斑が残る。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

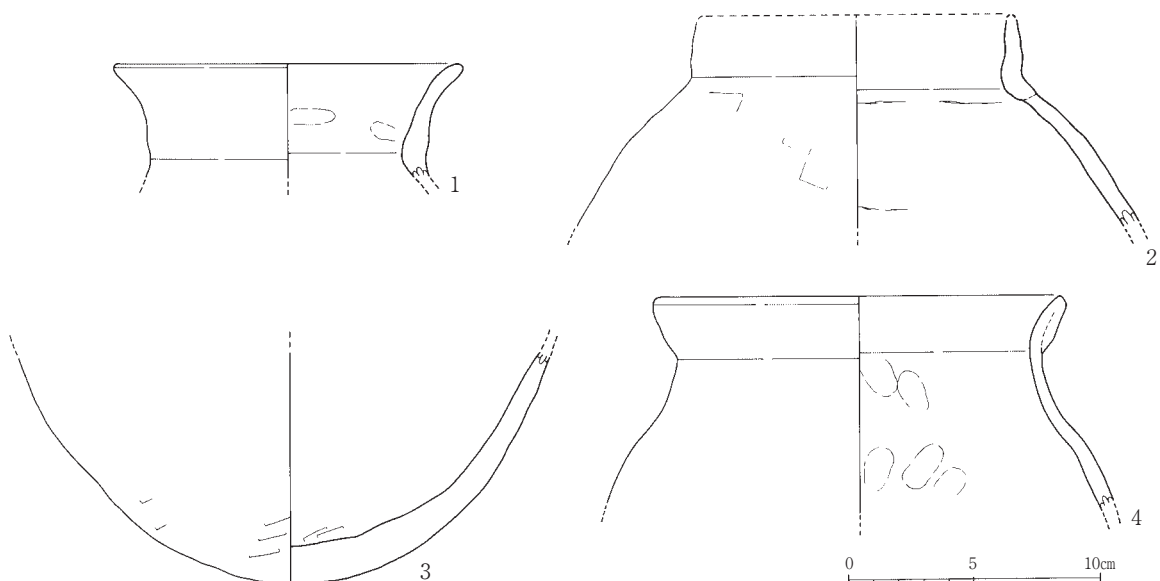


Fig.19 第XII・XIV・XV層出土遺物 (弥生土器・土師器)

第XIV・XV層出土遺物 (TR-3)

弥生土器 (Fig.19-4)

4は甕の肩部から口縁部にかけての破片で、口径15.8cmを測る。口縁部は肩部から緩やかに屈曲し、口縁部外面に粘土帯を貼付する。調整は摩耗が著しく不明瞭であるが、内面の一部には指頭圧痕が残る。色調は、内面がにぶい橙色、外面が明赤褐色、灰色を呈し、肩部の一部に黒斑が残る。胎土は1~3mmの砂粒を含み、焼成は不良である。

3. 遺構と遺物

(1) 祭祀関連遺構

TR-1の第XII層中で、土師器の甕、壺、高杯、手づくね土器がまとまって出土したため、祭祀関連遺構として捉えた。遺構検出面の標高は、ほぼ水平であり、遺存状態はよくない。

SF-1 (Fig.20)

調査区の東から西に広がる祭祀関連遺構で、標高1.40~1.60mで検出された。東西約3m、南北約2.5mの範囲から遺物がまとまって出土したが、さらに調査区外に広がる可能性も考えられる。遺物は主に第XII層から出土しているが、中には第XIII層まで埋没しているものもあった。出土総点数は約500点で、出土遺物には土師器、土製模造品がみられ、壺1点(5)、甕2点(6・7)、高杯6点(8~13)、手づくね土器7点(14~20)が図示できた。

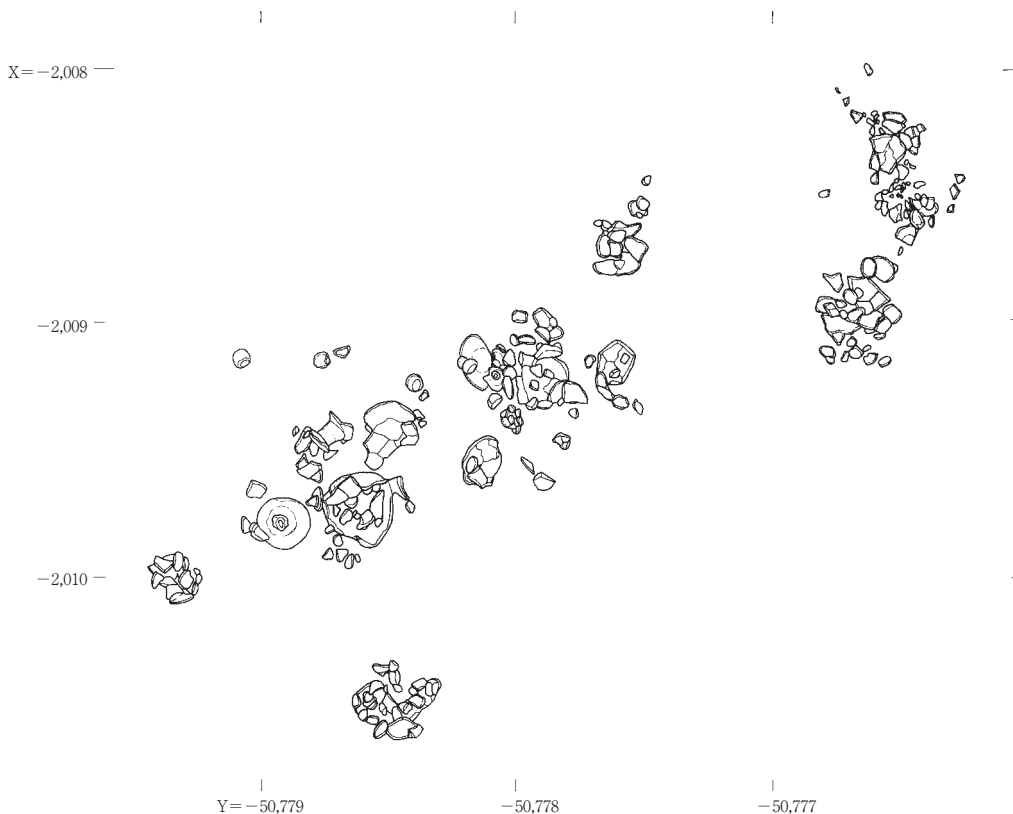


Fig.20 SF-1遺物出土状態

土師器 (Fig.21・22-5~13)

5は壺で、口縁部を欠損する。胴径9.4cmを測り、胴部中央に最大径をもち扁球形をなす。外面はヘラ削りの後ナデ調整、内面は指ナデ調整を施す。色調は、内面が浅黄色、外面が橙色を呈し、胎土は1~3mmの砂粒を含み、焼成は良好である。

6は甕の口縁部破片で約3/4が残存し、口径17cmを測る。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し端部を丸く仕上げる。外面はヨコナデ調整、ハケ調整で、内面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には5mm以下の砂粒を含み、焼成はやや不良である。7は甕で2/3が残存し、口径13.8cm、器高28.0

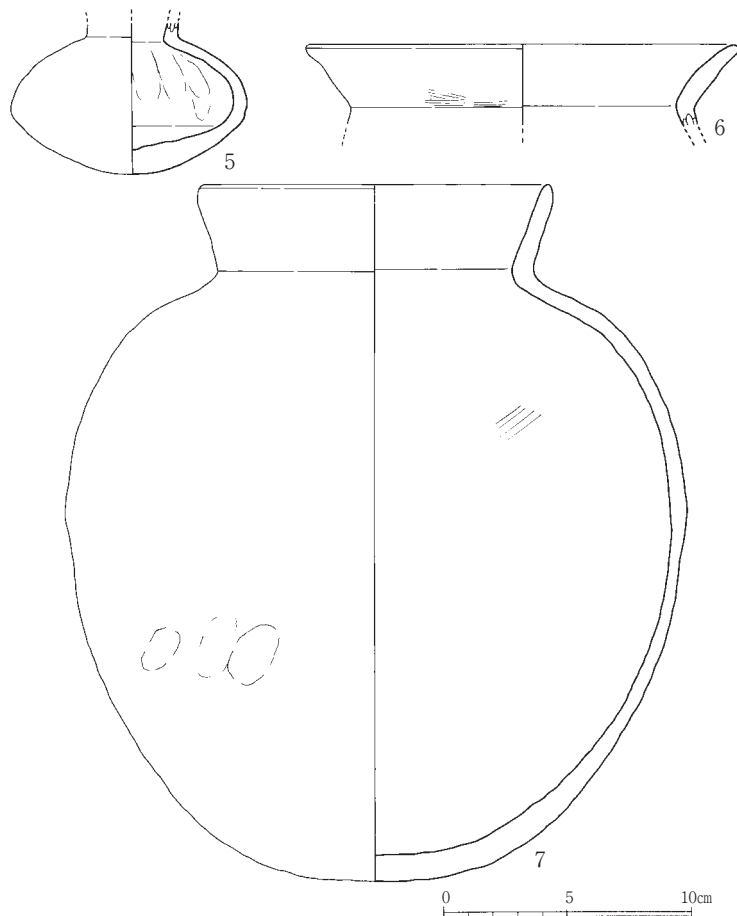


Fig.21 SF-1出土遺物1

cm、胴径25.0cmを測る。胴部中央に最大径をもち口頸部が「く」の字状に屈曲する。色調は、内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は1~5mmの砂粒を含み、焼成はやや不良である。

8~13は高杯で、8はAa①類である。ほぼ完形で、口径18.0cm、器高12.6cm、底径11.6cmを測り、口縁部内外面は摩耗が著しく調整不明であるが、杯底部から裾部の外面はナデ調整、脚台部内面にはヘラ削りの後にナデ調整を施す。色調は、内外面とも橙色を呈し、胎土は1~6mmの砂粒を含み、焼成は良好である。9はAb①類で、ほぼ完形である。口径16.0cm、器高13.2cm、底径10.4cmを測り、口縁部内外面はナデ調整で、脚部内面はヘラ削りの後ナデ調整、外面にはナデ調整を施す。色調は、内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は1~5mmの砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。10はBa①類で、約2/3が残存する。口径14.0cm、器高12.5cm、底径11.0cmを測り、全体的に摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部と裾部内外面、脚台部内面にはナデ調整が残る。色調は、内面が橙色、灰褐色、外面が橙色、灰黄褐色、灰色を呈し、裾部の一部に黒斑がみられる。胎土は1~5mmの砂粒を含み、焼成はやや不良である。11はBa①類である。口縁部の1/4が欠損するのみで、口径17.6cm、器高13.3cm、底径11.4cmを測る。脚柱部が中膨らみのエンタシス状を呈し、内外面ともに摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、脚部内面にはヘラ削りの痕が残る。色調は、内外面ともに橙色を呈し、胎土は1~8mmの砂粒を多く含み、焼成は良好である。12はBa②類で、ほぼ完形である。口径18.0cm、器高12.7cm、底径11.0cmを測り、脚台部は中位で少し膨らみを持つ。

口縁部内外面はヨコナデ調整，脚部内外面はナデ調整である。色調は，内外面とも橙色を呈し，胎土は1~5mmの砂粒を含み，焼成は良好である。13はBa②類である。完形で，口径18.2cm，器高14.5cm，底径13.0cmを測る。脚柱部が中膨らみのエンタシス状を呈し，調整は口縁部内外面がヨコナデ調整，脚部内外面がナデ調整である。色調は，内面が橙色，外面がにぶい橙色，にぶい黄橙色を呈し，胎土は1~5mmの砂粒を多く含み，焼成はやや不良である。

手づくね土器 (Fig.23-14~20)

14~17はA類である。14は完存し，口径6.0cm，器高4.9cmを測る。口縁部は摘み出され，外反する。器面に指頭圧痕が残り，調整は内面に指ナデ調整，外面にナデ調整を施す。色調は，内面が灰色，外面が浅黄色を呈し，全体的に黒斑が残る。胎土は1~3mmの砂粒を含み，焼成は不良である。15は口縁の一部が欠損するがほぼ完存し，口径4.5cm，器高3.9cmを測る。口縁部は直立し，内外面ともナデ調整を施す。色調は，内外面ともに灰黄色と暗灰色を呈し，一部に黒斑が残る。胎

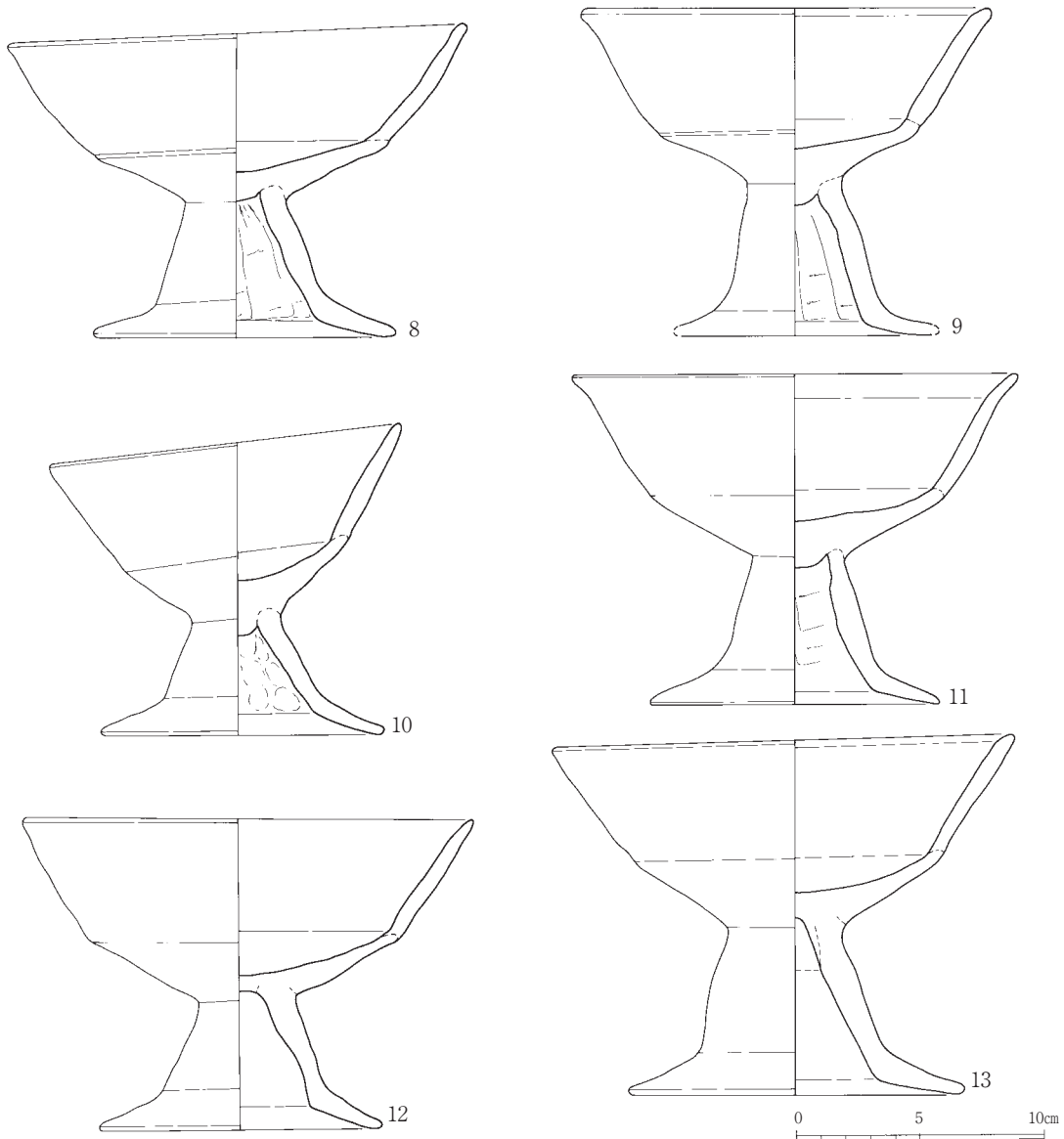


Fig.22 SF-1出土遺物2

土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は不良である。16も口縁部が一部欠損するがほぼ完存し、口径4.7cm、器高3.7cm、胴径5.3cmを測る。口縁部は直立し、調整は内面が指ナデ調整、外面がナデ調整である。色調は、内面が暗灰色、外面が暗灰色、黒色、浅黄橙色を呈し、一部黒斑が残る。胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は不良である。17は壺形で口縁部を欠損する。口径3.6cm、器高約5.6cm、胴径6.6cmを測り、内外面に指ナデ調整を施す。色調は、内面が浅黄橙色、外面が浅黄色、浅黄橙色を呈し、胎土は1~2mmの砂粒を含み、焼成はやや不良である。

18~20はB類である。18は壺形で、底部の一部が剥落する。口径2.5cm、器高3.5cm、胴径4.5cm、底径4.0cmを測る。調整は、胴部内面が指ナデ調整、口縁部内面がヨコナデ調整

で、胴部外面は摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、一部にナデ調整が残る。色調は、内面が灰白色、外面が浅黄橙色、褐灰色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は不良である。19も壺形で、口縁部は欠損し、底部が剥落する。胴径6.6cmを測り、胴部内面は指ナデ調整で、頸部内面にはヨコナデ調整を施し、外面は摩耗が著しいが一部にナデ調整が残る。色調は、内外面ともに灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は不良である。20は底部破片で、底径3.0cmを測る。内面はタテ方向の指ナデ調整で、外面は摩耗が著しく調整不明である。色調は、内面が黄褐色、灰色、外面が暗灰色、黄褐色、橙色を呈し、外面の一部に黒斑が残る。胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は不良である。

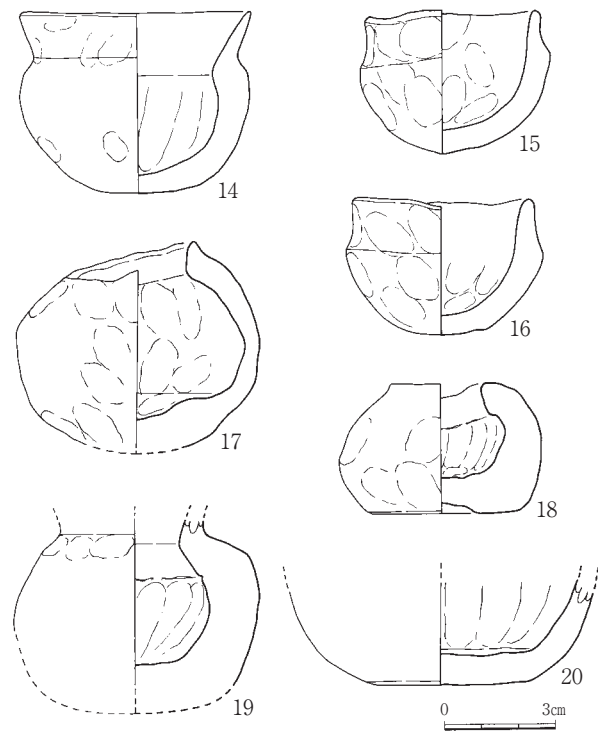


Fig.23 SF-1出土遺物3

(2) ピット

TR-3の第X層上面で古代のものとみられるピットが72個検出された。埋土はオリーブ黒色シルト質粘土で、4個のピットから土師器細片が出土している。ピットの多くはトレンチの南半分にあり、更に広がる可能性も考えられるが、掘立柱建物等を復元することはできなかった。また、第XII層上面でも古墳時代のものとみられるピットが20個検出され、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。

第Ⅳ章 神ヶ谷2号窯跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

本遺跡は中筋川中流域の右岸，宿毛市平田町黒川字神ヶ谷に位置し，中村宿毛高規格道路の建設中に地元の方が発見した遺跡である。本調査区の東約125mには神ヶ谷1号窯跡が所在し，平成10年度に本発掘調査が行われている。本遺跡が発見されたのは中村宿毛高規格道路の建設中であったため，神ヶ谷2号窯跡の記録保存を目的とする緊急発掘調査が実施されることとなった。調査は高知県教育委員会が受託し，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は平成13年7月2日から7月25日までであり，発掘調査面積は181m²であった。

(2) 調査の方法

本調査区は丘陵斜面部であったため，表土及び堆積層の掘削は人力で行い，丘陵裾部に設定した確認トレンチの掘削は重機を用いたが，本調査区は工事途中であったこともあり，調査区内の表土は殆ど掘削されていた。検出された窯跡と灰原は堆積状況を確認するために窯跡の長軸に沿う縦バンクと平行する横バンクを設定し掘削を行った。窯跡は掘削の後床面を検出し，床面に残る遺物の写真撮影，出土状態図の作成，レベル測量を行った。灰原から出土した遺物は必要に応じて写真撮影を行った。また，調査と併行して土層観察を行い，写真撮影の後，土層断面図を作成し，調査終了時には航空写真撮影及び航空測量を実施した。



Fig.24 神ヶ谷2号窯跡調査区全体図及び基準点配置図 (S=1/2,000)

測量については、3級基準点・3等水準点を設置して行い、報告書ではこの結果に基づき、図面には公共座標(旧日本座標系)を記している。

(3) 調査日誌抄

2001.7.2~7.25

- 7.2 神ヶ谷2号窯跡の発掘調査を開始する。調査前全景の写真撮影、ユニットハウス・簡易シューターなどの設置、表土掘削並びに平板測量を行う。
- 7.3 表土掘削並びに窯跡・灰原の検出作業を行う。
- 7.4 表土掘削並びに窯跡・灰原の検出作業を行う。
- 7.5 検出作業並びに調査区東壁の土層断面図を作成する。また、調査区が位置する丘陵部の南斜面の試掘を行う。
- 7.6 重機での廃土処理並びにバンクの土層断面図を作成する。
- 7.9 雨天のため現場作業は中止する。
- 7.10 表土掘削並びにグリッド杭を打設する。
- 7.11 バンクを設定し、窯跡並びに灰原の掘削を行う。
- 7.12 雨天のため現場作業は中止する。
- 7.16 午前は雨天のため午後から現場作業を行う。引き続き窯跡並びに灰原の掘削、バンクの土層断面図を作成する。
- 7.17 午前は雨天のため午後から現場作業を行う。引き続き窯跡並びに灰原の掘削、バンクの土層断面図を作成する。
- 7.18 バンクの土層断面図作成を行う。
- 7.19 バンクの掘削、床面遺物出土状態の写真撮影並びに平面測量を行う。
- 7.23 遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。その後、断ち割りトレンチの掘削並びに土層断面図を作成する。
- 7.24 断ち割りトレンチの土層断面図並びに床面及び壁面の掘削を行う。その後、遺構完掘状態の写真撮影並びに平面測量を行う。
- 7.25 航空写真撮影及びレベル実測を行い、すべての現場作業は完了する。

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査では古代の須恵器窯跡1基とそれに伴う灰原1ヵ所を確認し、当該期の遺物が出土している。本調査区は後世の段畑や工事の影響で掘削されており、明確な遺物包含層は確認されなかったが、2次堆積とみられる斜面堆積などから土器が出土している。また、窯跡は後世の段畑の影響で二つに分断され、灰原は工事によって大部分は削られていた。本遺跡周辺の地形は西南中核工業団地や中村宿毛道路の建設によって大きく変貌しているが、旧地形は北西方向に開く小規模な谷であったとみられ、本遺跡はその谷間の開口部付近に位置していたと考えられる。以下、本項では堆積土層とその出土遺物について記す。

(2) 層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第I層 にぶい黄褐色(10YR5/4)礫質砂層(客土)

- 第II層 明黄褐色 (10YR6/6) シルト質砂層で大小礫を多く含む。
- 第III層 暗褐色 (10YR3/4) シルト質砂層
- 第IV層 明黄褐色 (10YR6/8) 砂質シルト層で小礫を多く含む。
- 第V層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質砂層で小礫を多く含む。
- 第VI層 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト層で小礫を多く含む。
- 第VII層 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト層

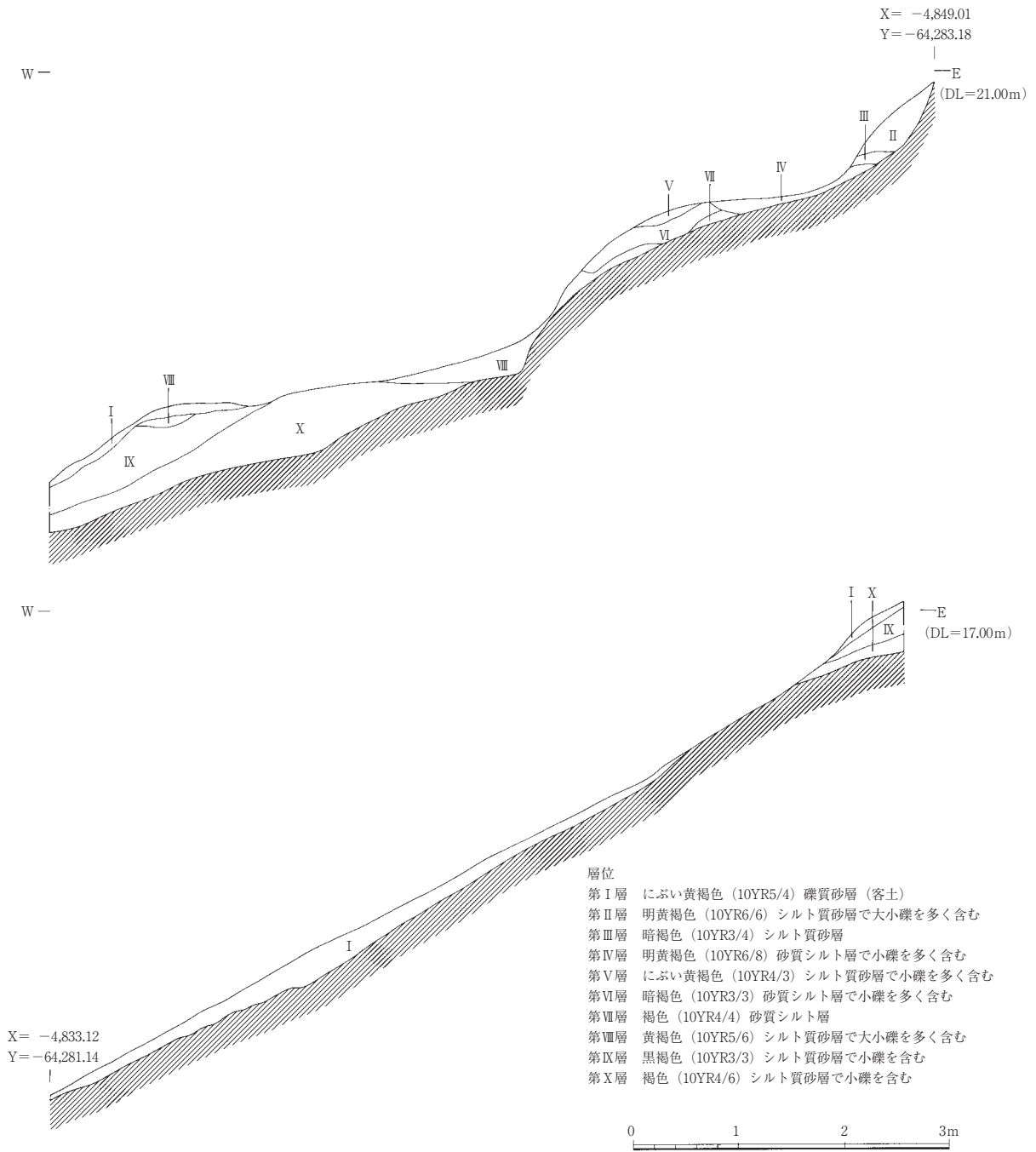


Fig.25 東壁セクション図

第Ⅷ層 黄褐色(10YR5/6)シルト質砂層で大小礫を多く含む。

第Ⅸ層 黒褐色(10YR3/3)シルト質砂層で小礫を含む。

第Ⅹ層 褐色(10YR4/6)シルト質砂層で小礫を含む。

第Ⅺ層 地山礫層

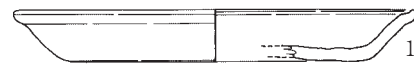
層位中遺構が検出されたのは第Ⅺ層上面であり、須恵器が多く出土したのは2次堆積と考えられる第Ⅹ層であった。

(3) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

須恵器 (Fig.26-1)

1は皿で約1/3残存し、口径15.6cm、器高2.1cm、底径11.0cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部を上方へ折り曲げ、端部内面は屈曲に伴い沈線状を呈する。調整は、体部内外面が回転ナデ調整、底部内面がナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しの後ナデ調整を施し、底部内面には火襻痕が残る。色調は、内面が灰黄色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。



磁器 (Fig.26-2)

2は染付の皿である。口径26.8cm、器高6.1cm、底径17.0cmを測り、口縁端部はやや外反する。見込中央に松、その周囲には山水画、口縁部内外面には菊を中心とした文様を描く。全体的に透明釉を薄く施し、暈付は釉ハギを行い、微砂が付着する。高台内には「有田25」と記されており、第二次世界大戦中に有田で生産されたものと考えられる。

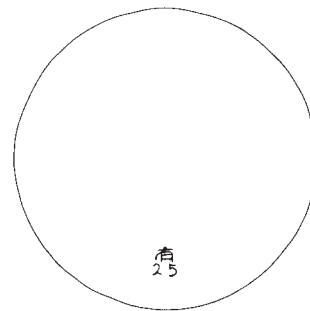
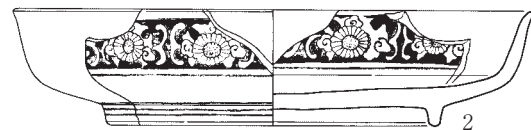


Fig.26 第Ⅰ層出土遺物(須恵器・磁器 1は1/3)

第Ⅷ層出土遺物

須恵器 (Fig.27-3・4)

3は平底の杯である。約1/4残存し、口径12.2cm、器高3.8cm、底径8.0cmを測る。調整は、回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内外面には火襻痕が残る。色調は、内外面とも暗緑灰色、褐灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

4は高台を有する杯で、約1/6残存する。口径13.2cm、器高4.8cm、底径9.2cmを測り、調整は、体部内外面がナデ調整、底部内面がナデ調整で、高台内には爪形状圧痕が残る。色調は、内面が灰色、外面が褐灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

第IX層出土遺物

須恵器 (Fig.28-5~8)

5・6は高台を有する杯である。5は約1/4残存し、やや焼け歪む。口径11.4cm, 器高3.7cm, 底径7.4cmを測り, 調整は体部内外面とも回転ナデ調整, 底部内外面はナデ調整で, 高台内には爪形状圧痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。6は底部破片で約1/4残存し, 底径9.0cmを測る。底部外面には「ハ」の字状に開く高台を貼付ける。調整は, 体部内外面が回転ナデ調整, 底部内外面がナデ調整で, 高台内には爪形状圧痕が残る。色調は, 内面が黄灰色, 外面が黒色, 浅黄色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

7は高杯の脚部で約1/2残存し, 底径9.8cmを測る。脚台部はラッパ状に開き, 裾端部は下方に摘み出す。器面には回転ナデ調整を施し, 色調は, 内面が黒色, 外面が灰黄色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

8は壺の底部破片と考えられ約1/6残存し, 底径10.8cmを測る。胴部には粘土紐の接合痕が明瞭に残り, 底部外面には「ハ」の字状に開く高台を貼付ける。調整は体部内外面は回転ナデ調整, 底部内面はナデ調整である。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。

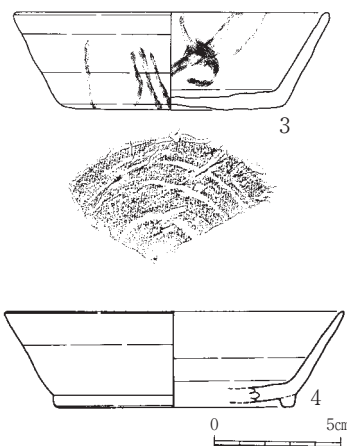


Fig.27 第VIII層出土遺物 (須恵器)

第X層出土遺物

須恵器 (Fig.29-9~30)

9~14は杯蓋で, 9~11は口縁端部を下方に屈曲させるものである。9は口縁部破片で約1/6残存し, 口径12.5cmを測る。調整は内外面とも回転ナデ調整で, 色調は, 内面が暗灰色, 外面が暗灰色, 灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。10は天井部から口縁部にかけての破片で, 約1/3残存する。つまみは欠損し, 口径12.4cmを測る。調整は,

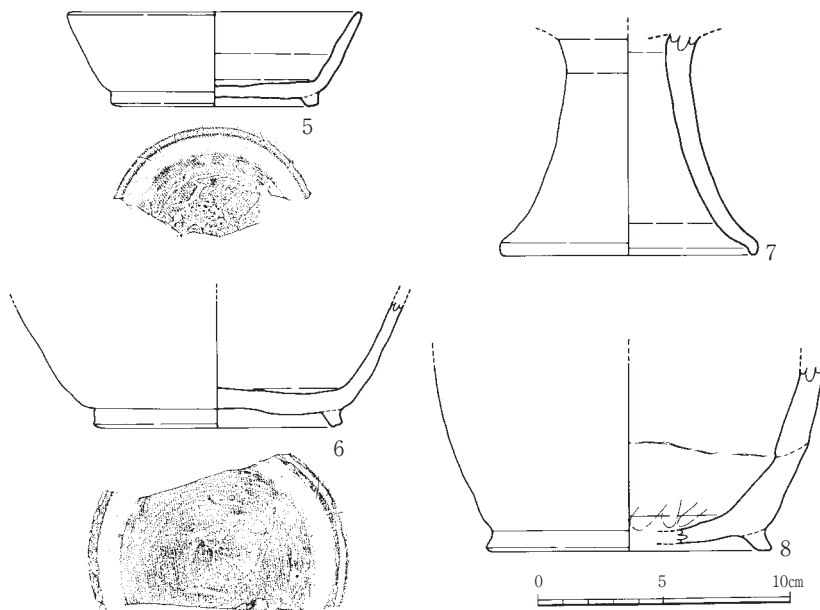


Fig.28 第IX層出土遺物 (須恵器)

天井部内面がナデ調整, 口縁部内外面が回転ナデ調整で, 外面には自然釉が付着し天井部外面の

調整は不明である。色調は、内面が灰色、灰オリーブ色、外面が灰オリーブ色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。11は約1/2残存し、口径12.8cmを測る。調整は、天井部内面がナデ調整、口縁部内面が回転ナデ調整で、外面は自然釉が付着しており、調整は不明瞭である。12~14は口縁部内面が屈曲に伴い沈線状を呈するものである。12は口縁部破片で約1/6残存し、15.4cmを測る。調整は口縁部内外面とも回転ナデ調整、天井部内面はナデ調整で、天井部外面の一部に回転ヘラ削り調整を施す。色調は、内面が暗灰色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。13・14は天井部から口縁部にかけての破片で、つまみは欠損する。調整は口縁部内外面が回転ナデ調整、天井部内外面はナデ調整である。13は約1/2残存し、口径12.9cmを測る。大きく焼け歪み、口縁部外面には自然釉が付着する。色調は内外面とも暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。14は約1/4残存し、口径13.4cmを測る。口縁部内面には自然釉が付着し、色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

15~18は平底の杯である。15・16は調整が体部内外面とも回転ナデ調整、底部内面にはナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、16の外底面にはナデ調整を加える。15は約1/6残存し、口径13.8cm、器高3.3cm、底径7.4cmを測り、内面には火襷痕が残る。色調は、内面が灰色、黄灰色、外面が灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。16は約1/4残存し、口径14.6

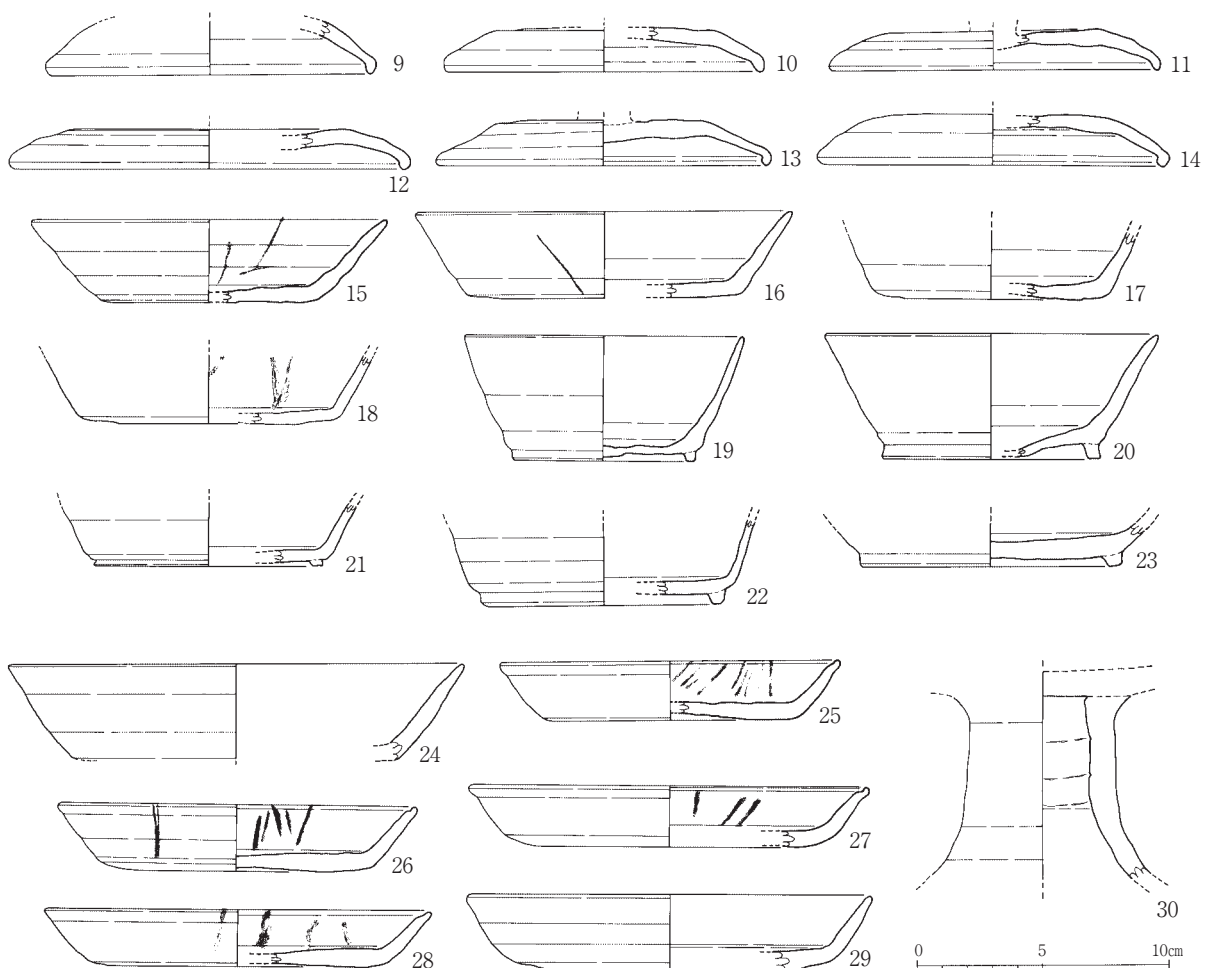


Fig.29 第X層出土遺物(須恵器)

cm, 器高3.4cm, 底径8.4cmを測る。内面全体と口縁部外面には自然釉が付着し, 体部外面には火襍痕が残る。色調は, 内面が褐灰色, 外面が灰色, 褐灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。17・18は口縁部が欠損するもので, 調整は, 体部外面が回転ナデ調整, 底部内面がナデ調整で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 18はナデ調整を加える。17は約1/6残存し, 底径9.2cmを測る。色調は内外面とも灰黄色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。18は約1/3残存し, 底径9.6cmを測り, 内面には火襍痕が残る。色調は, 内外面とも灰オリーブ色を呈し, 胎土は精良で, 焼成は不良である。

19~23は高台を有する杯である。19・20は調整が体部内外面とも回転ナデ調整, 底部内面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 切り離した後ナデ調整を施す。19は約1/3残存し, 口径10.8cm, 器高4.9cm, 底径7.0cmを測る。体部外面には自然釉が付着し, 色調は, 内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で焼成も良好である。20は約1/2残存し, 焼け歪みのため底部は下方に落ち込む。口径13.0cm, 器高4.9cm, 底径8.4cmを測る。体部外面には自然釉が付着し, 口縁部外面には2次焼成痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。21~23は底部破片である。21・22は調整が体部内外面, 底部内面とも回転ナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 切り離したあとナデ調整を施す。21は約1/6残存し, 底径8.8cmを測る。高台内には爪形状圧痕が残り, 色調は, 内面が褐灰色, 外面が黒褐色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。22は約1/6残存し, 底径9.0cmを測る。底部外面には爪形状圧痕が残り, 色調は, 内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。23は約1/3残存し, 底径10.0cmを測る。底部外面にはやや「ハ」の字状に開く高台を貼付け, 調整は全体的に摩耗が著しく不明である。色調は, 内外面ともいぶき黄色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。

24は杯の口縁部破片で, 約1/4残存する。器面には回転ナデ調整を施し, 内外面には2次焼成痕がみられる。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

25~29は皿である。25~27は口縁端部内面が屈曲に伴い沈線状を呈するもので, 調整は口縁部内外面が回転ナデ調整, 底部内面はナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りであるが, 26は回転ヘラ切りのあとナデ調整を施し, 27は底部の残りが悪く不明である。25は約1/4残存し, 口径13.2cm, 器高2.3cm, 底径9.2cmを測る。内面には火襍痕が残り, 色調は, 内面が浅黄色, 外面が浅黄色, 灰白色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。26は約1/3残存し, 口径14.0cm, 器高2.6cm, 底径7.8cmを測る。内外面には火襍痕が残り, 色調は, 内外面とも浅黄色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。27は口縁部破片で約1/6残存し, 口径15.5cm, 器高2.4cm, 底径10.0cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し, 内面には火襍痕が残る。色調は, 内面が浅黄色, 灰色, 外面が灰色, にぶき黄色を呈し, 胎土は精良で, 焼成はやや不良である。28は口縁端部内面が屈曲に伴い凹線状を呈するものである。28は約1/6残存し, 口径15.0cm, 器高2.2cm, 底径10.0cmを測る。調整は口縁部内外面が回転ナデ調整, 底部内面がナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 切り離しの後ナデ調整を施す。内面には火襍痕が残り, 色調は内面が黄灰色, 外面が灰黄褐色を呈し, 胎土は精良で, 焼成はやや不良である。29は口縁端部を丸く収めるもので, 約1/8残存する。口径15.8cm, 器高2.9cm, 底径9.6cmを測り, 調整と底部の切り離しは全体的

に摩耗が著しく不明瞭であるが、体部外面の一部に回転ナデ調整が残る。色調は内面が灰白色、外面が灰白色、灰黄色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。

30は高杯の脚部破片で、杯部と裾部は欠損する。脚柱部内面には接合痕が明瞭に残り、全体的に摩耗が著しいが、器面には回転ナデ調整が残る。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。

3. 遺構と遺物

(1) 窯体

窯体 (Fig.31・32)

本調査区で検出された窯体は地山を掘り込んだ半地下式の登窯と考えられるが、後世の段畑の影響を受け途中で分断されている。また、窯体上部ほど削平の影響を受け、遺存状態は良くない。検出された窯体は水平長5.46m、斜面長6.04m、最大幅1.03m、検出面からの深さ11~44cmを測る。窯体の平面形は、「ハ」の字状に開き、燃烧部・焼成部は焚口からほぼ直線的に延び、焼成部上方でやや左に向きを変える。煙道部は削平されており、残存していない。長軸方向はN-21°-Eで、窯体下端より水平長0.62m付近が傾斜変換点であると考えられる。天井部は崩落し、天井部の一部は窯体内の床面に落ち込み、その他大部分は流失している。埋土は大きく6層に分層されるが、埋土2~4層は天井部流失後に地山層が流入したものと考えられ、5・6層は窯体片や酸化土片を多く含むため、天井部崩壊時に堆

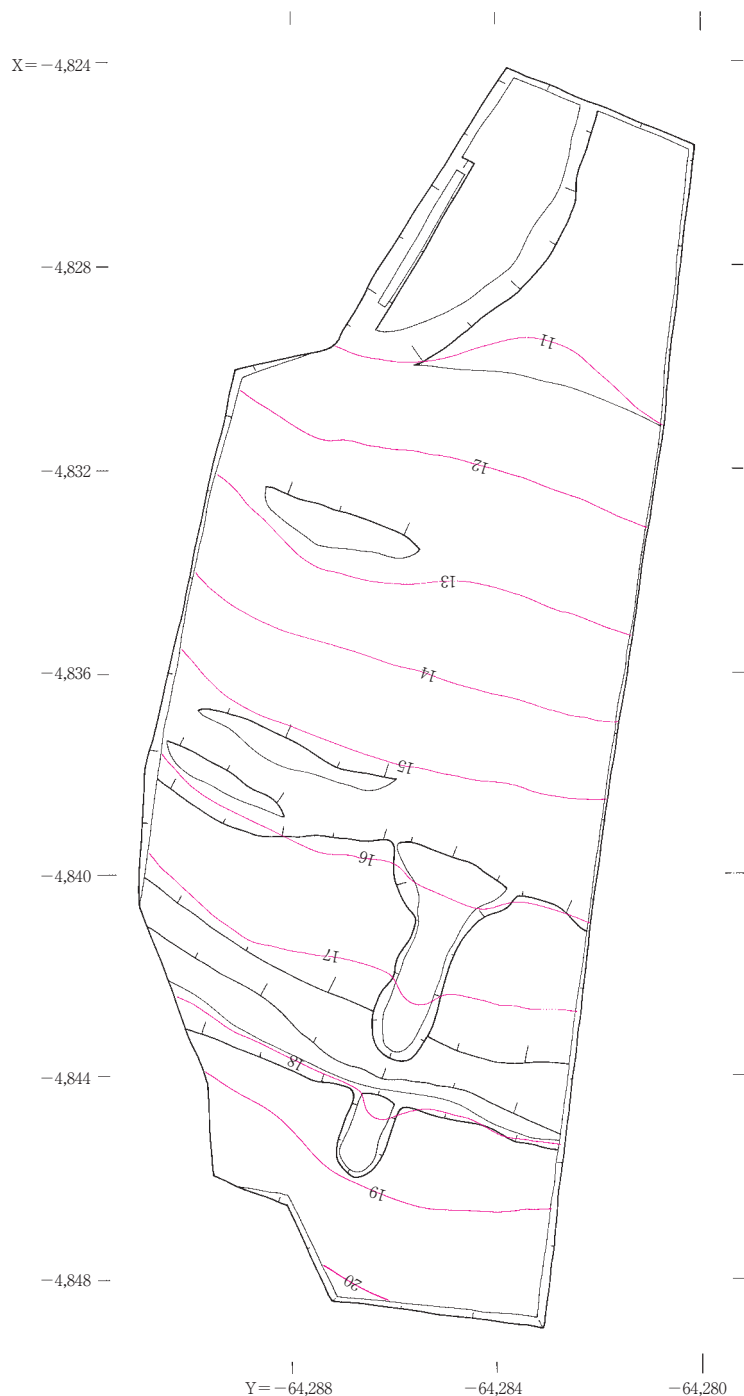


Fig.30 調査区平面図

積したものとみられる。

焚口・前庭部は比較的遺存状態が良く、前庭部は長さ約0.64m、幅1.24~1.88mの不整形の台形状を呈し、地山を削り出して造られている。この前庭部からは焼成後に窯から掻き出されたとみられる多量の炭化物・灰を含む黒色(10YR2/1)シルト層が確認されている。焚口・燃焼部は水平長約0.50m、最大幅0.78mを測り、床面の傾斜角度は約14°である。この燃焼部から焚口にかけては「ハ」の字状に広がるが、特に西側が大きく膨れる。これは本窯跡が北西方向に開く小規模な谷の北斜面に位置していた

と考えられており、谷が開く西方向をより大きく広げて風を多く取り込み、燃焼効率をよくするための工夫とみられる。焼成部は下半は比較的遺存状態は良いが、上端は大部分が削平されており、床面と側壁がかろうじて残存するのみで、水平長約4.84m、最大幅1.03mを測る。焼成部中央がやや膨れ、床面の傾斜角度は約25°である。床面は焼き締まって非常に硬い層厚2~4cmを測る還元層に覆われており、その下部に層厚5~8cmを測る酸化層が広がる。燃焼部・焼成部とも床面は1面しか確認されず、比較的短い期間のみ操業したものとみられる。また、煙道は削平されて残存していない。遺物は窯体内の埋土や床面から最終操業時とみられる

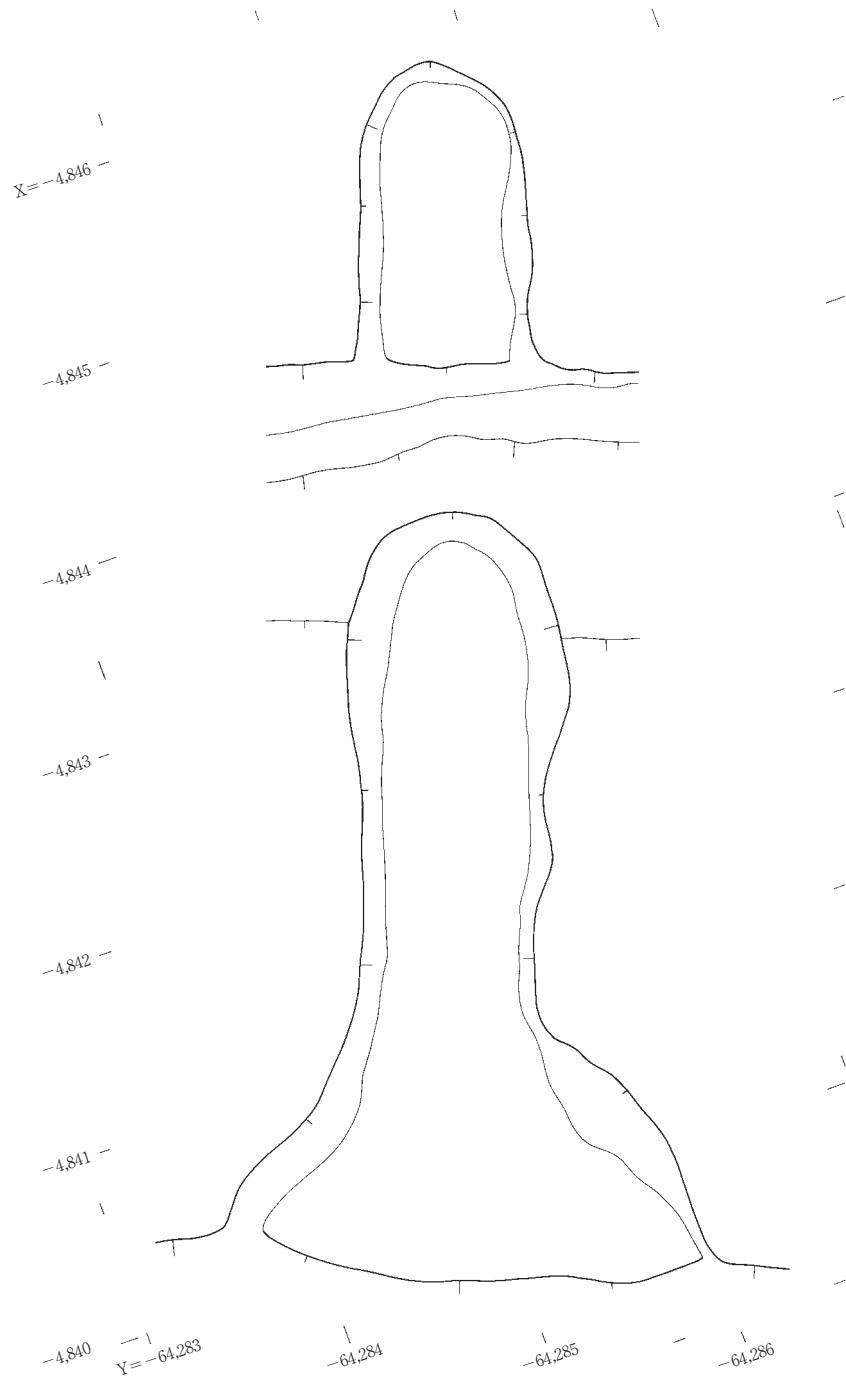
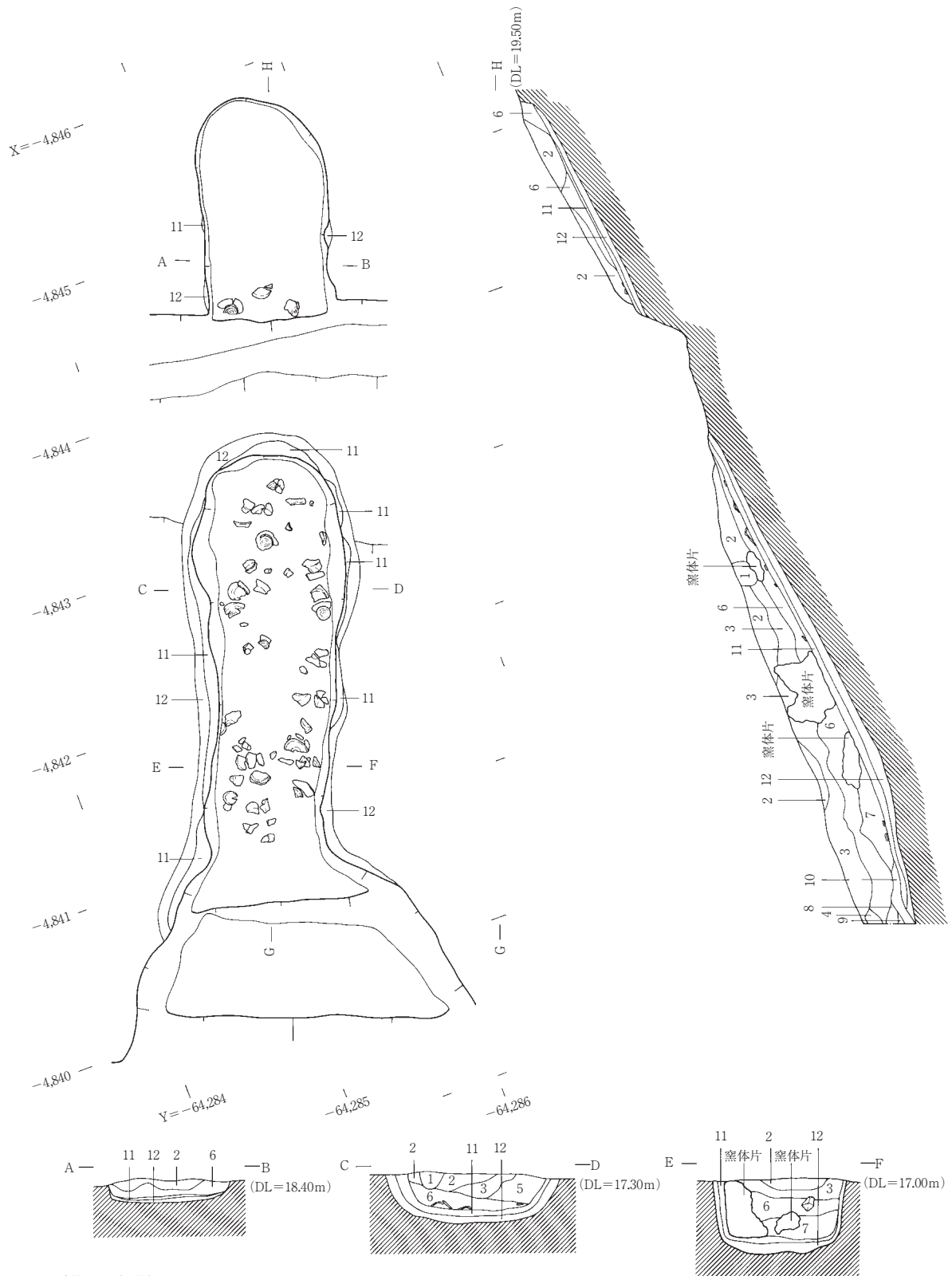


Fig.31 窯体完掘平面図



遺構埋土（窯体）

- | | |
|---|---|
| <p>1. におい黄褐色シルト質砂（0.1~0.5cm大の砂礫と炭化物を含む）</p> <p>2. 黄褐色シルト質砂（0.1~1cm大の砂礫と炭化物を含む）</p> <p>3. 黄褐色砂質シルト（0.1~0.5cm大の砂礫と炭化物を含む）</p> <p>4. オリブ褐色シルト質砂（0.1~1cm大の砂礫と炭化物を含む）</p> <p>5. 褐色砂質シルト（窯体片、酸化土片、0.1~0.5cm大の砂礫や炭化物を含む）</p> <p>6. 暗褐色砂質シルト（窯体片、酸化土片、0.1~1cm大の砂礫や炭化物を含む）</p> | <p>7. 黒褐色砂質シルト（窯体片、0.1~2cm大の砂礫、炭化物を多く含む）</p> <p>8. 黄褐色シルト質砂（0.1~0.5cm大の砂礫を多く含む）</p> <p>9. 黒色シルト（炭化物と砂礫を非常に多く含む）</p> <p>10. におい黄褐色砂質シルト（0.1~1cm大の砂礫と炭化物を多く含む）</p> <p>11. 灰オリブ色を呈する還元層</p> <p>12. におい赤褐色を呈する酸化層</p> |
|---|---|

Fig.32 窯体内遺物出土状態

ものが検出されたが、天井部崩落の影響か焼成時の原位置を保っていると考えられるものはなかった。窯体埋土から152点、床面直上から58点の遺物が出土しており、須恵器33点(31~63)が図示できた。

出土遺物(窯体埋土)

須恵器 (Fig.33-31~39)

31~33は平底の杯である。31は約1/2残存し、口径13.2cm、器高3.9cm、底径8.2cmを測る。調整は、体部内外面が回転ナデ調整、底部内面がナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、切り離したあとナデ調整を施す。内面には火襷痕が残り、色調は内面が灰白色、外面が灰オリーブ色、灰色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。32・33は大きく焼け歪むもので、32は約1/3残存し、口径14.0cm、器高3.5cm、底径8.2cmを測る。調整は体部内外面、底部内面とも回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は、内面が灰白色、灰色、外面が灰色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。33は約1/6残存し、焼け歪みのため体部が大きく開く。調整は、体部内外面が回転ナデ調整、底部内面がナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面には火襷痕が残り、色調は内面が灰色、外面が灰白色、灰色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。

34・35は高台を有する杯で、調整は体部内外面が回転ナデ調整、底部内面はナデ調整である。34は約1/6残存する。口径11.8cm、器高4.4cm、底径8.8cmを測り、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は、内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。35は約1/4残存し、やや焼け歪む。口径11.8cm、器高5.0cm、底径8.3cmを測り、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しのあとナデ調整を施す。外面には自然釉が付着しており、高台内には爪形状圧痕が残る。色調は、内面が灰色、外面が灰色、浅黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

36は杯とみられる口縁部破片で、約1/3残存する。口径12.4cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

37・38は皿で、やや焼け歪む。口縁端部はやや外反し、口縁端部内面が屈曲に伴い凹線状を呈するものである。37は口縁部破片で、約1/8残存する。口径14.4cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。

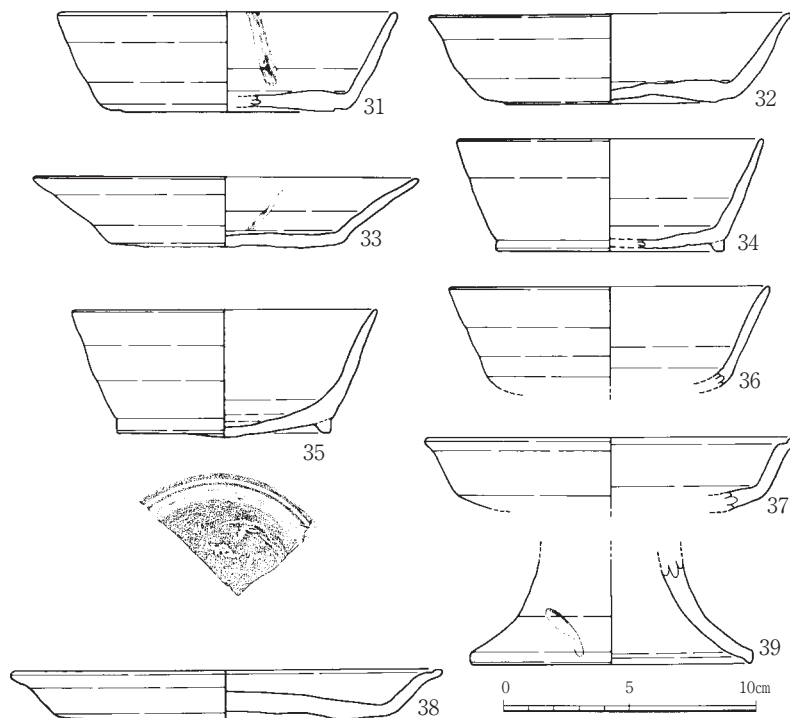


Fig.33 窯体埋土出土遺物

色調は、内外面とも灰オリーブ色，灰色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。38は約1/3残存し，口径16.8cm，器高1.9cm，底径9.8cmを測る。調整は，口縁部内外面が回転ナデ調整，底部内面はナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで，切り離しの後ナデ調整を施す。色調は，内面が浅黄色，灰色，外面が灰色を呈し，胎土は精良であるが，焼成は不良である。

39は高杯の脚部破片で，約1/3残存する。底径10.3cmを測り，器面には回転ナデ調整を施す。外面には火襻痕と他の須恵器が付着した痕跡が残る。色調は内外面とも褐灰色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。

出土遺物(床面)

須恵器 (Fig.34～36-40～63)

40～42は杯蓋である。40は口縁端部を下方に屈曲させるもので約1/6残存し，つまみは欠損する。口径20.2cm，器高2.0cmを測り，調整は口縁部内外面が回転ナデ調整，天井部内外面はナデ調整である。口縁部内面には自然釉が付着し，色調は内外面とも灰色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。41は口縁端部内面が屈曲に伴い沈線状を呈するもので，約1/4残存し，つまみは欠損する。口径12.2cm，器高1.9cmを測り，調整は口縁部内外面とも回転ナデ調整，天井部内外面ともナデ調整である。色調は内外面とも灰色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。42は口縁端部を丸く収めるもので約1/2残存し，やや焼け歪む。口径15.4cm，器高2.9cmを測り，調整は口縁部内外面が回転ナデ調整，天井部内外面はナデ調整である。また，つまみの周囲には貼付け時のナデ調整が残る。口縁部外面には2次焼成痕がみられ，色調は内外面とも灰色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。

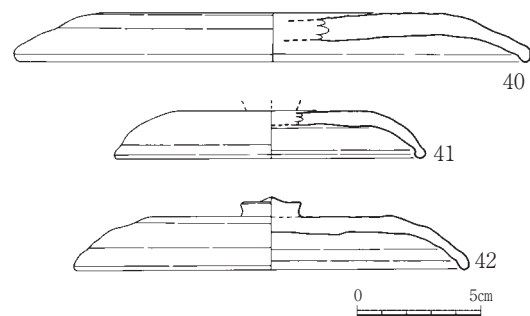


Fig.34 床面出土遺物1

43～51は平底の杯である。43～45は調整が体部内外面とも回転ナデ調整，底部内面はナデ調整，底部の切り離しは回転ヘラ切りで，43のみ底部を回転ヘラ切りで切り離した後ナデ調整を施す。43はほぼ完存するがやや焼け歪み，口縁端部は部分的に内側へ折れ曲がる。体部外面には2次焼成痕がみられ，色調は，内面が灰色，外面が灰色，灰白色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。44は約1/3残存し，やや焼け歪む。口径13.4cm，器高3.8cm，底径9.0cmを測る。底部内面には火襻痕が残り，色調は，内面が灰オリーブ色，浅黄色，外面が灰色，浅黄色を呈し，胎土は精良であるが，焼成はやや不良である。45は約1/3残存し，やや焼け歪む。口径13.8cm，器高3.2cm，底径7.4cmを測る。色調は，内外面とも灰色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。46～49は調整が体部内外面，底部内面が回転ナデ調整，底部の切り離しは回転ヘラ切りで，48・49は底部を回転ヘラ切りで切り離した後ナデ調整を施す。46は約1/3残存し，大きく焼け歪んでおり，体部から口縁部にかけて大きく開く。色調は，内面が灰色，灰白色，浅黄色，外面が暗灰色，浅黄色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。47は約1/2残存し，やや焼け歪む。口径14.4cm，器高3.6

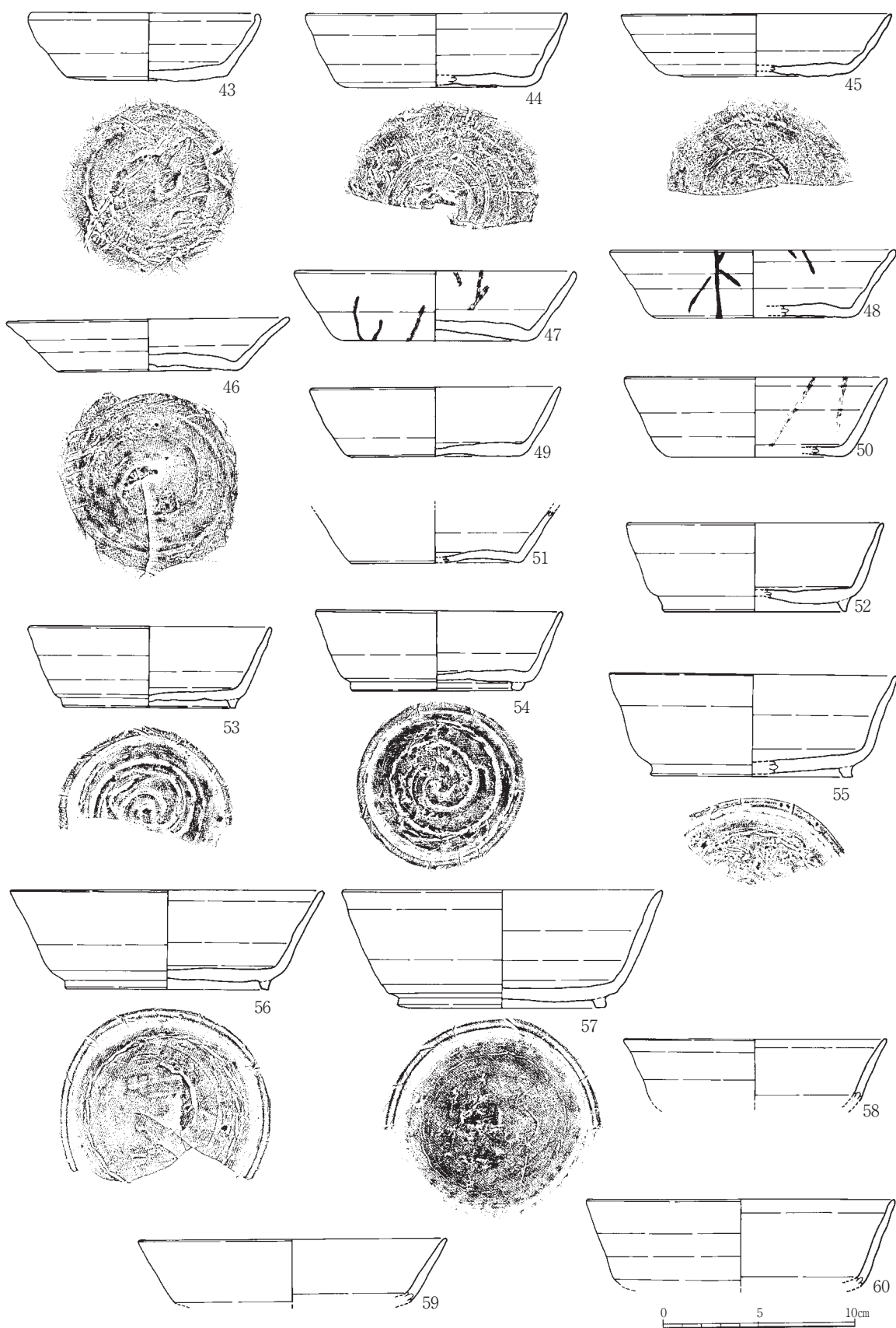


Fig.35 床面出土遺物2

cm, 底径9.4cmを測り, 体部内外面には火襷痕が残る。色調は, 内面が灰黄色, 灰黄褐色, 外面が灰黄色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。48は約1/4残存し, 口径14.6cm, 器高3.5cm, 底径10.0cmを測る。内外面には火襷痕が残り, 色調は, 内面が灰白色, 灰オリーブ色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。49は約1/3残存し, 大きく焼け歪む。口径12.8cm, 器高3.6cm, 底径8.6cmを測り, 色調は, 内外面とも灰色, 灰白色, 浅黄色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。50は約1/3残存し, 口径13.4cm, 器高4.1cm, 底径9.0cmを測る。調整は体部内外面ともナデ調整で, 底部内外面は摩耗が著しく, 調整, 底部切り離しは不明である。内面には火襷痕が残り, 色調は内外面とも浅黄色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。51は底部破片で, やや焼け歪む。底径8.8cmを測り, 調整は体部内外面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 切り離した後ナデ調整を施す。底部内面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は, 内面が浅黄色, 外面が灰色, 浅黄色, 暗灰褐色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。

52~57は高台を有する杯で, 52~55は調整が体部内外面とも回転ナデ調整, 底部内面はナデ調整で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りによるもので, 55のみ底部を回転ヘラ切りで切り離した後ナデ調整を施す。52は底部外面に断面三角形の高台を貼付けるもので, 約1/2残存し, 大きく焼け歪む。口径13.2cm, 器高4.6cm, 底径9.4cmを測り, 口縁部内面には2次焼成痕がみられる。色調は, 内面が灰色, 灰白色, 外面が灰色, 灰白色, 灰オリーブ色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。53~55は底部外面に断面四角形状の高台を貼付けるものである。53は約1/2残存し, 口径12.4cm, 器高4.2cm, 底径8.8cmを測る。高台内に爪形状圧痕が残る。色調は内外面とも暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。54はほぼ完存し, やや焼け歪む。口径12.6cm, 器高4.3cm, 底径8.6cmを測り, 高台内には爪形状圧痕が残る。色調は, 内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。55は約1/4残存し, 口径14.6cm, 器高5.3cm, 底径10.0cmを測る。体部外面に2次焼成痕, 高台内には爪形状圧痕と2次焼成痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。56・57は体部内外面, 底部内面は回転ナデ調整で, 体部外面下端にヘラ削り調整がみられる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 切り離しの後ナデ調整を施す。56は約1/2残存し, やや焼け歪む。口径16.0cm, 器高5.1cm, 底径10.4cmを測り, 高台内には爪形状圧痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成は良好である。57は1/2ほど残存し, やや焼け歪む。口径16.4cm, 器高6.1cm, 底径9.8cmを測り, 高台内には爪形状圧痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

58~60は杯の口縁部破片で, 調整は体部内外面とも回転ナデ調整である。58は約1/4残存し, 口径13.4cmを測る。体部外面には2次焼成痕が残り, 色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。59は約1/4残存し, やや焼け歪む。口径15.8cmを測り, 色調は内外面とも暗灰

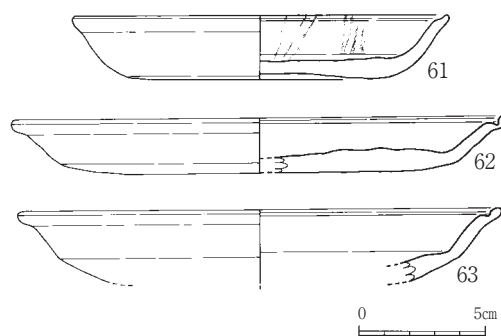


Fig.36 床面出土遺物3

色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。60は約1/6残存し、口径15.8cmを測る。色調は内外面とも灰色、浅黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

61~63は皿である。61は口縁端部内面が屈曲に伴い凹線状を呈するもので、約1/2残存する。口径14.6cm、器高2.5cm、底径9.0cmを測る。調整は口縁部内外面が回転ナデ調整、底部内面がナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面には火襷痕が残り、色調は内面が灰白色、外面が灰オリーブ色、浅黄色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。62・63は口縁端部内面が屈曲に伴い沈線状を呈するものである。62は約1/3残存し、口径19.1cm、器高2.2cm、底径10.6cmを測る。調整は口縁部内外面には回転ナデ調整、底部内面にはナデ調整が残るが、全体的に摩耗が著しい。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。63は口縁部破片で、やや焼け歪む。約1/6残存し、口径18.6cmを測る。調整は回転ナデ調整である。色調は、内面が灰白色、外面が灰白色、灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

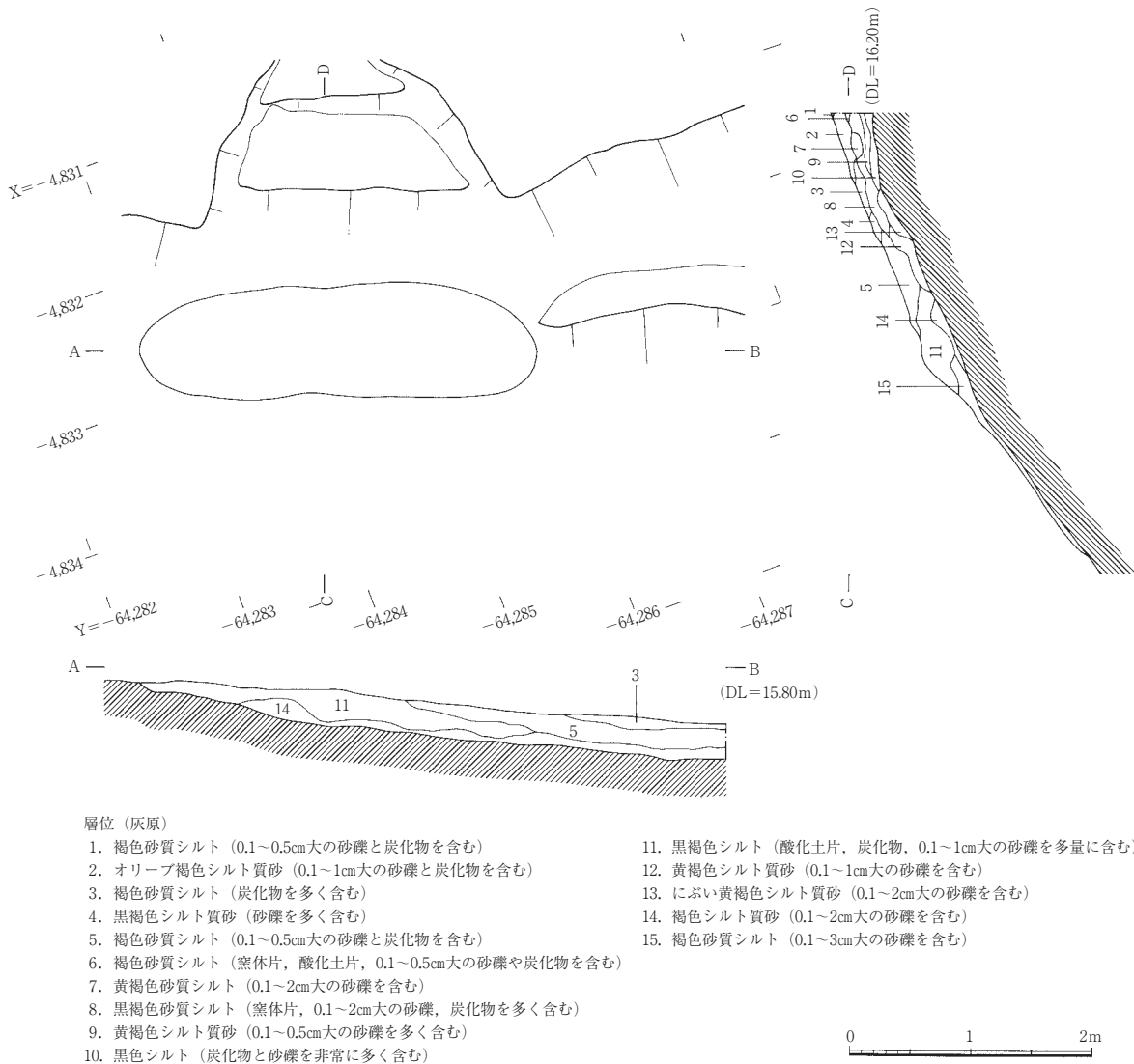


Fig.37 灰原範囲図

(2) 灰原

灰原 (Fig.37)

灰原は窯体の前庭部下方に東西約3.3m、南北約1mの範囲に広がる。灰原下方は削平されているため、遺存状態は良くない。灰原の中央部に窯体の主軸に沿った縦バンクと直交する横バンクを設定し、土層観察を行った。灰原層である11層は黒褐色(10YR3/2)シルトで、須恵器片、窯体片、炭化物などを多く含むもので、層厚は薄い。また、3~5層には炭化物や窯体片が含まれるが、これは上方の窯体から流出したものとみられ、二次的な堆積層と考えられる。灰原からは551点の遺物が出土しており、須恵器15点(64~78)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.38-64~78)

64~68は杯蓋である。64・65は口縁端部を下方に屈曲させるものである。64は約1/2残存し、つまみは欠損する。口径13.4cmを測り、調整は口縁部内外面が回転ナデ調整、天井部内外面がナデ調整で、天井部外面には回転ヘラ削り調整がみられる。口縁部内外面には自然釉が付着し、色調は、内面がオリブ黄色、灰色、外面が暗オリブ色、灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好であ

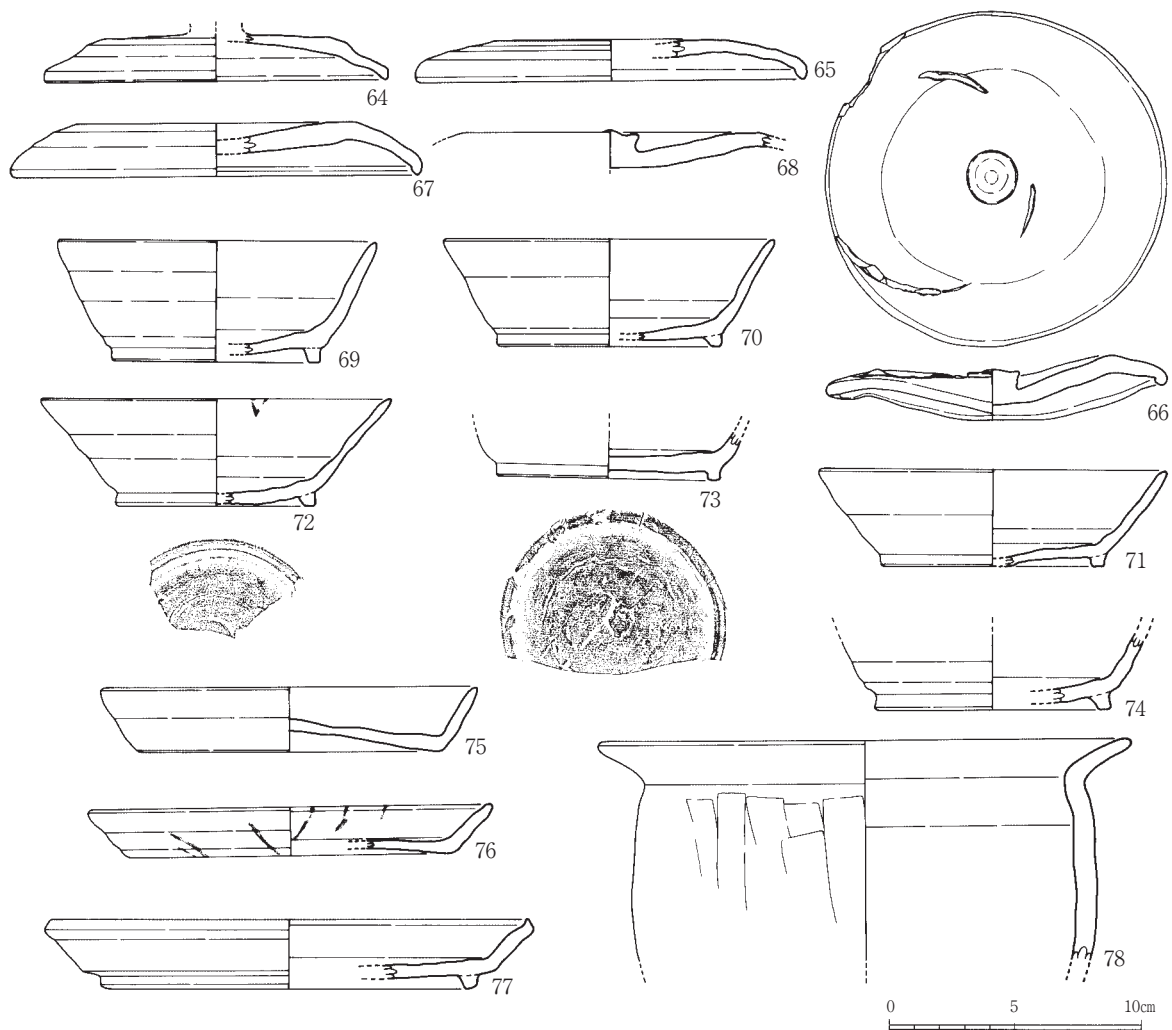


Fig.38 灰原出土遺物

る。65は約1/6残存し、つまみは欠損する。口径15.6cmを測り、調整は口縁部内外面が回転ナデ調整、天井部内面はナデ調整で、天井部外面には回転ヘラ削り調整を施す。色調は、内面が灰色、灰褐色、外面が灰色、にぶい褐色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。66・67は口縁端部内面が屈曲に伴い沈線状を呈するものである。66はほぼ完存し、大きく焼け歪む。調整は、口縁部内外面が回転ナデ調整、天井部内面はナデ調整で、天井部外面は自然釉が付着しており、調整不明瞭である。また、外面には重ね焼きの痕跡が残る。色調は、内面が褐灰色、外面が黄灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。67は約1/6残存し、つまみは欠損する。口径15.8cmを測り、調整は口縁部内外面、天井部内面が回転ナデ調整、天井部外面はナデ調整である。また、天井部外面の一部には回転ヘラ削りを施す。口縁部外面には二次焼成痕がみられ、色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。68は天井部破片で、約1/6残存する。大きく焼け歪み、全体的に摩耗が著しいが、天井部外面に回転ヘラ削り調整がみられる。色調は、内面が灰白色、外面が灰黄色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。

69～74は高台を有する杯である。調整は摩耗が著しく不明なものもあるが、体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、69・72・73は底部を切り離した後ナデ調整を施す。69は約1/3残存し、やや焼け歪む。口径12.4cm、器高4.8cm、底径8.0cmを測り、底部の切り離しは摩耗が著しく不明である。体部外面には自然釉が付着し、色調は内面が灰色、外面がオリーブ黄色、灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。70は約1/5残存し、口径12.8cm、器高4.2cm、底径8.6cmを測る。全体的に摩耗が著しいが底部外面には回転ナデ調整が残る。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。71は約1/6残存し、やや焼け歪む。口径13.4cm、器高3.8cm、底径8.6cmを測り、底部の切り離しは摩耗が著しく不明である。色調は、内面が灰黄色、外面が黄灰色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。72は約1/6残存し、やや焼け歪む。口径13.6cm、器高4.2cm、底径7.6cmを測り、高台内には爪形状圧痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。73・74は底部である。73は約1/2残存し、底径8.6cmを測る。高台内には爪形状圧痕が残り、色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。74は約1/4残存し、やや焼け歪む。底径9.0cmを測る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。

75・76は皿である。75は約1/2残存し、大きく焼け歪む。口径14.6cm、器高2.6cm、底径11.8cmを測り、調整は口縁部内外面とも回転ナデ調整、底部内面はナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、底部を切り離した後ナデ調整を施す。色調は、内面が暗灰色、灰色、外面が暗灰色、灰黄色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。76は約1/4残存し、口径15.6cm、器高1.9cm、底径12.6cmを測る。調整は口縁部内外面とも回転ナデ調整で、底部内面の調整と底部の切り離しは摩耗が著しく不明である。内外面には火襷痕が残り、色調は、内面が灰黄色、外面が灰オリーブ色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。

77は高台を有する皿で、一部が残存する。口径18.6cm、器高2.7cm、底径14.0cmを測り、口縁端部を上方に屈曲させる。調整は全体的に摩耗が著しく不明瞭であるが、口縁部内外面に回転ナデ調整が残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、底部を切り離した後ナデ調整を施す。色調は、

内面が灰色，灰白色，外面が灰色を呈し，胎土は精良であるが，焼成はやや不良である。

78は鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，約1/4残存する。口径20.6cmを測り，口縁部は「く」の字状に大きく外反する。調整は全体的に摩耗が著しいが，胴部外面にタテ方向のヘラ削り調整が残る。色調は，内面が灰黄色，灰白色，外面が暗灰黄色，浅黄色を呈し，胎土は精良であるが，焼成は不良である。

第V章 具同中山遺跡群Ⅱ-2

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

本遺跡は中筋川の下流域の左岸、中村市具同字中山に位置し、中筋川の河川改修工事や国土交通省が計画している中村宿毛高規格道路の建設に伴って昭和61年から断続的に発掘調査が行われてきた。本年度の調査地区は平成11年度に発掘調査が実施された中村宿毛道路関連と県道中村下ノ加江線関連の調査区に挟まれた部分であり、調査は高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は平成13年8月16日から11月16日までであり、発掘調査面積は1,926㎡であった。

(2) 調査の方法

平成11年度に発掘調査が実施された中村宿毛道路関連と県道中村下ノ加江線関連の調査区に挟まれた部分の全面発掘調査をすることとし、調査区中央部で土層観察を行うために西側を1区、東側を2区として調査を実施したが、本報告書では合わせて報告する。

本調査区は遺物包含層の深度が約2mと深いことから、県道中村下ノ加江線及び市道側には鋼矢板、法面については軽量鋼矢板をそれぞれ設置した。また、排水についてはろ過施設を設け、ろ

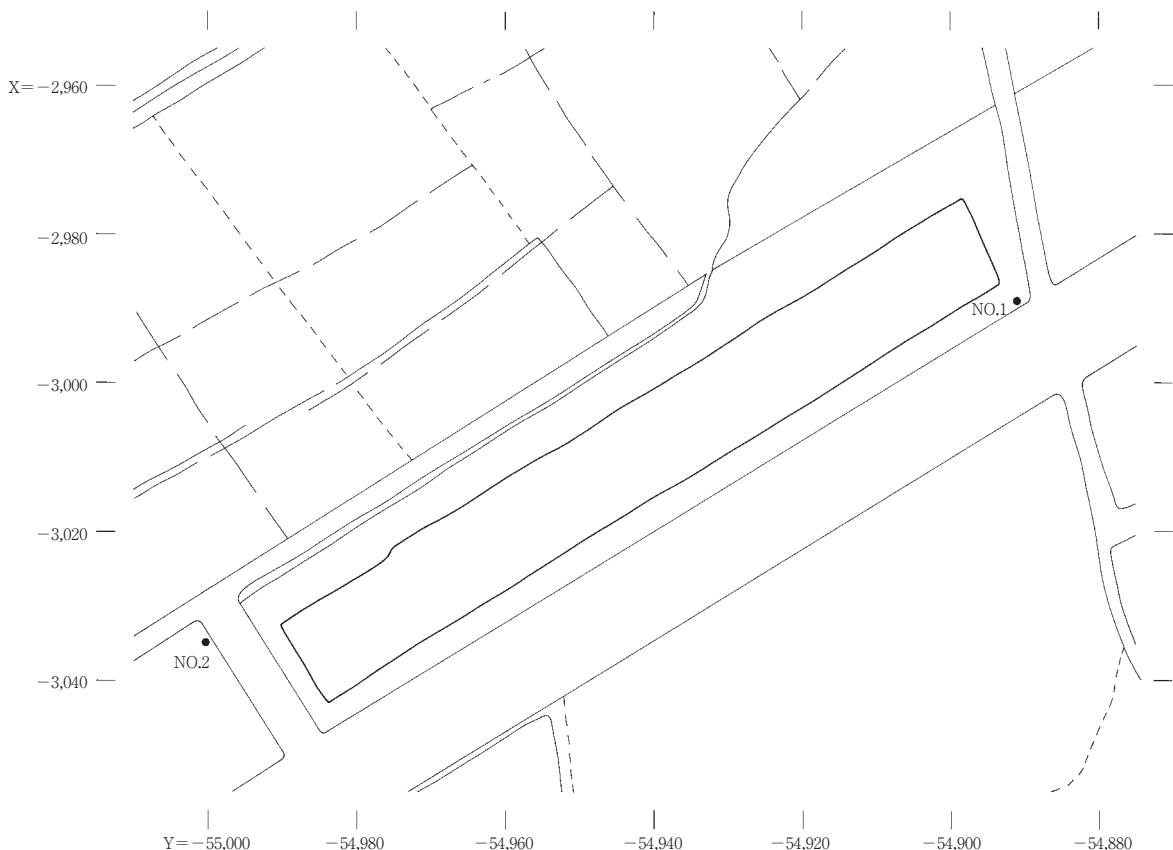


Fig.39 具同中山遺跡群Ⅱ-2調査区全体図及び基準点配置図(S=1/1,000)

過したうえで水路に排水した。

調査は遺物包含層に影響のない層位まで重機で掘削した後はすべて人力で行った。検出された遺構は掘削の後、完掘写真撮影、遺構平面図の作成、レベル測量を行い、遺物は必要に応じて写真撮影、出土状態図の作成、レベル測量を行った。また、調査と併行して土層観察を行い、写真撮影の後、土層断面図を作成した。なお、調査終了時には調査区中央部に幅約2mの下層確認トレンチを設定し、調査を行った。

測量については、3級基準点・3等水準点を設置して行い、報告書ではこの結果に基づき、図面には公共座標(旧日本座標系)を記している。

(3) 調査日誌抄

2001.8.16~11.16

- 8.16 具同中山遺跡群Ⅱ-2の発掘調査を開始する。まず1区から調査を開始し、重機で地表下約2.3mの古墳時代の遺物包含層直上まで掘削を行う。
- 8.17 排水ポンプ用の穴の掘削並びに重機で古墳時代の遺物包含層直上まで掘削を行う。
- 8.20 雨のため現場作業は中止する。
- 8.21 雨のため現場作業は中止する。
- 8.22 古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削を行う。
- 8.23 古墳時代の遺物包含層直上までの重機掘削並びに遺物包含層の人力掘削を行う。
- 8.27 古墳時代の遺物包含層直上までの重機掘削並びに遺物包含層の人力掘削を行う。
- 8.28 古墳時代の遺物包含層の人力掘削、2カ所の遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。
- 8.29 古墳時代の遺物包含層の人力掘削、2カ所の遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。
- 8.30 古墳時代の遺物包含層の人力掘削を行うが、午後は雨のため現場作業は中止する。
- 9.4 調査区内の検出作業、清掃作業、遺構検出状態の写真撮影並びに遺構掘削を行う。
- 9.5 遺構掘削並びに遺構完掘状態の写真撮影を行うが、雨が降り出し現場作業は中止する。
- 9.6 雨のため現場作業は中止する。
- 9.7 雨のため現場作業は中止する。
- 9.10 調査区内の清掃作業並びに遺構完掘状態
- の写真撮影、遺構の平面測量並びにレベル実測及び弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。
- 9.11 弥生時代の遺物包含層を人力掘削、西壁の土層断面図を作成するとともに平面測量並びにレベル実測を行う。
- 9.12 弥生時代の遺物包含層を人力掘削、西壁の土層断面図の作成とともに平面測量並びにレベル実測を行う。
- 9.13 弥生時代の遺物包含層を人力掘削、遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。
- 9.17 弥生時代の遺物包含層を人力掘削する。
- 9.18 弥生時代の遺物包含層を人力掘削、遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。
- 9.19 弥生時代の遺物包含層を人力掘削、遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。
- 9.20 弥生時代の遺物包含層を人力掘削、遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。
- 9.21 弥生時代の遺物包含層を人力掘削する。
- 9.25 1区完掘写真の撮影並びに下層確認トレンチの掘削を行う。
- 9.26 下層確認トレンチの掘削を行う。
- 9.27 下層確認トレンチの完掘写真撮影並びに北壁の土層断面図を作成する。
- 10.1 2区の調査を開始する。古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削を行う。
- 10.2 古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削

を行う。

10.3 古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削を行う。

10.4 古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削を行う。

10.5 古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削を行う。

10.9 古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削を行う。

10.10 古墳時代の遺物包含層直上まで重機掘削を行う。

10.11 遺物包含層直上までの重機掘削並びに遺物包含層の人力掘削を行う。

10.12 遺物包含層の人力掘削を行う。

10.15 遺物包含層の人力掘削を行う。

10.16 雨のため現場作業は中止する。

10.17 雨のため現場作業は中止する。

10.18 雨のため現場作業は中止する。

10.19 遺物包含層の人力掘削を行う。

10.22 雨のため現場作業は中止する。

10.23 遺物包含層の人力掘削を行う。

10.24 遺構検出状態の写真撮影並びに遺構掘削を行う。

10.25 遺構掘削、遺構完掘状態の写真撮影並びに平面測量及びレベル実測を行う。

10.26 弥生時代の遺物包含層までの間層を人力掘削する。

10.29 弥生時代の遺物包含層までの間層を人力掘削する。

10.30 弥生時代の遺物包含層までの間層を人力掘削する。

10.31 弥生時代の遺物包含層までの間層を人力掘削する。

11.1 弥生時代の遺物包含層までの間層を人力掘削する。

11.5 弥生時代の遺物包含層の人力掘削、遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。

11.6 弥生時代の遺物包含層の人力掘削、遺物出土状態の平面測量並びにレベル実測を行う。

11.7 弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。

11.8 弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。

11.9 弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。

11.12 弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。

11.13 2区完掘写真の撮影並びに下層確認トレンチの掘削を行う。

11.14 下層確認トレンチの掘削を行う。

11.15 下層確認トレンチの掘削を行う。

11.16 下層確認トレンチの完掘写真撮影並びに北壁の土層断面図を作成し、すべての現場作業を完了する。

2. 調査の概要

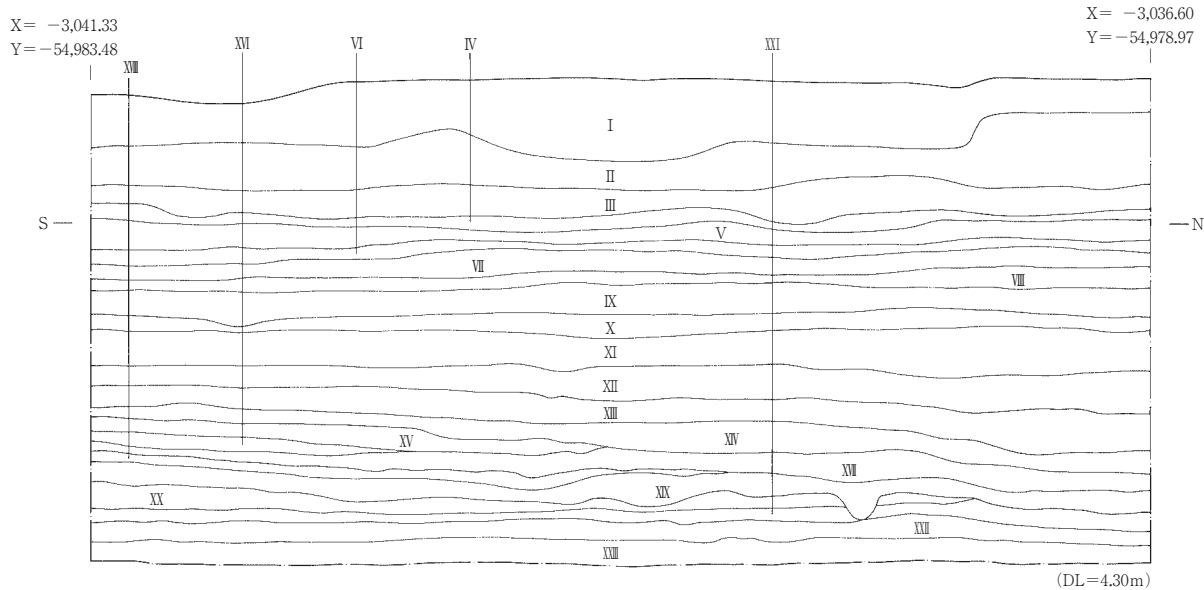
(1) 調査の概要

今回の調査では弥生時代と古墳時代の遺物包含層が確認され、当該期の遺物が出土している。しかし、本調査区付近の地勢は調査区東側から西側に向けて緩やかに傾斜し、自然堤防から後背湿地に向けて緩やかに下る部分であるため、全体的に遺物量は少ない。また、古墳時代の遺構検出面でピットを検出したが、柵列や建物跡を構成すると判断できるものはなかった。以下、本項では堆積土層とその出土遺物について記す。

(2) 層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第I層 客土



層位			
第I層	客土		
第II層	暗灰黄色 (2.5Y4/6) 粘土質シルト層	第XIII層	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む
第III層	暗オリーブ色 (2.5Y4/6) 粘土質シルト層で酸化鉄を少量含む	第XIV層	灰色 (N4/) 粘土質シルト層
第IV層	オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む	第XV層	黄褐色 (10YR5/8) シルト質粘土層
第V層	オリーブ黒色 (2.5Y4/3) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を多く含む	第XVI層	灰色 (N4/) 粘土層で炭化物を多く含む
第VI層	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土層でマンガン粒, 酸化鉄を含む	第XVII層	灰色 (N5/) 粘土層で炭化物を多く含む
第VII層	灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質粘土層でマンガン粒, 酸化鉄を多く含む	第XVIII層	灰色 (N5/) 粘土層
第VIII層	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土層でマンガン粒, 酸化鉄を含む	第XIX層	灰色 (10Y4/1) 粘土層で炭化物を多く含む
第IX層	暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土層	第XX層	灰色 (N4/) 粘土層
第X層	黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質粘土層で酸化鉄を含む	第XXI層	暗灰色 (N3/) 粘土層
第XI層	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む	第XXII層	灰色 (5Y4/1) 粘土層で炭化物を多く含む
第XII層	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む	第XXIII層	灰色 (7.5Y4/1) 粘土層



Fig.40 西壁セクション図

- 第II層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土質シルト層
- 第III層 暗オリーブ色 (2.5Y4/6) 粘土質シルト層で酸化鉄を少量含む。
- 第IV層 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む。
- 第V層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む。
- 第VI層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土層でマンガン粒, 酸化鉄を多く含む。
- 第VII層 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質粘土層でマンガン粒, 酸化鉄を多く含む。
- 第VIII層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土層でマンガン粒, 酸化鉄を含む。
- 第IX層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土層
- 第X層 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質粘土層で酸化鉄を含む。
- 第XI層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む。
- 第XII層 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む。
- 第XIII層 黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト層でマンガン粒, 酸化鉄を含む。
- 第XIV層 灰色 (N4/) 粘土質シルト層
- 第XV層 黄褐色 (10YR5/8) シルト質粘土層
- 第XVI層 灰色 (N4/) 粘土層で炭化物を含む。
- 第XVII層 灰色 (N5/) 粘土層で炭化物を含む。

第XXVIII層 灰色(N5/)粘土層

第XXIX層 灰色(10Y4/1)粘土層で炭化物を多く含む。

第XXX層 灰色(N4/)粘土層

第XXXI層 暗灰色(N3/)粘土層

第XXXII層 灰色(5Y4/1)粘土層で炭化物を多く含む。

第XXXIII層 灰色(7.5Y4/1)粘土層

層位中遺物包含層は第XXIX層、第XXXII層であり、遺構が検出されたのは第XX層上面であった。

(3) 堆積層出土遺物

第XX層出土遺物

弥生土器 (Fig.42-1~3)

1は甕である。約1/3残存し、口径15.2cmを測る。口縁部外面にはハケ調整、胴部外面にはタタキを施し、胴部上半にはタタキの後ハケ調整を施す。内面は摩耗が著しく調整不明である。色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土には1~5mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。2は底部破片で、底径2.4cmを測り、全体的に摩耗が著しいが外面にタタキ目が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には1~5mm大の砂礫を含み、焼成は不良である。

3は鉢である。約1/3残存し、口径13.6cm、器高7.3cmを測る。底部は尖底気味で、体部は内湾気味に立ち上がり、調整は内面が粗いハケ調整、外面がタタキの後ナデ調整を施す。色調は、内面が灰褐色、外面が灰褐色、暗灰色、にぶい橙色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成は良好である。

土師器 (Fig.43・44-4~19)

4は脚付壺で、口縁部と脚台部を欠損する。全体的に摩耗が著しく調整は不明であるが、胴部内面に指ナデ調整、脚部内面にヘラナデ調整の痕跡が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には1~5mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。

5~8は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。5は約1/3残存し、口径12.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に屈曲し、調整は摩耗が著しく不明である。色調は、内面が褐灰色、外面がにぶい褐色を呈し、胎土には1~2mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。6は約1/6残存し、口径15.6cmを測る。口縁部は短く直線的に立ち上がり、調整は摩耗が著しく不明である。色調は、内面が褐灰色、橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土

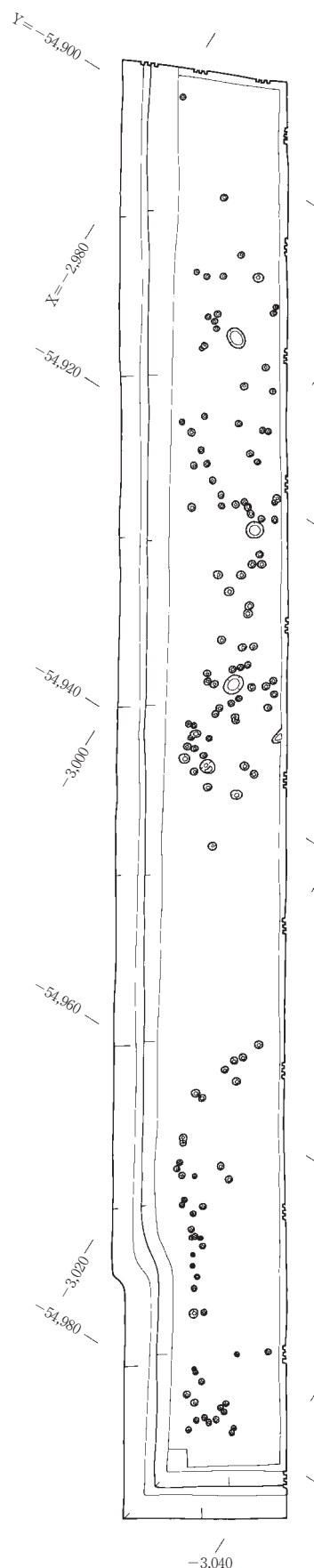


Fig.41 古墳時代遺構平面図

には1~2mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。7は約1/2残存し、口径15.8cmを測る。口縁部はやや外反して立ち上がり、端部は内傾する面をなす。調整は内面がナデ調整、外面がハケ調整であり、外面の一部には煤が付着する。色調は、内面にぶい橙色、にぶい赤褐色、外面が灰褐色、黒色を呈し、胎

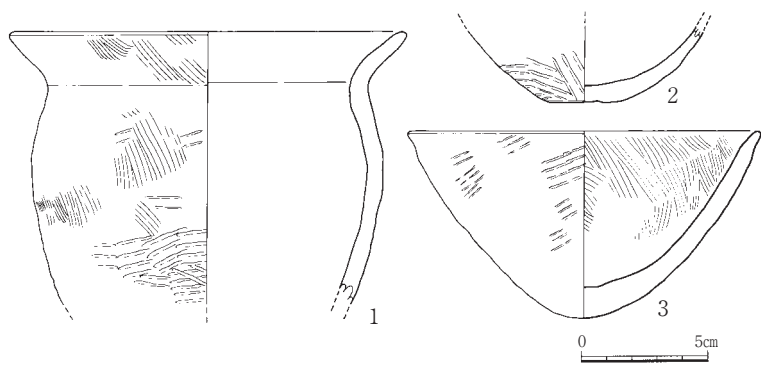


Fig.42 第Ⅷ層出土遺物1(弥生土器)

土には1mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。8は約1/2残存し、口径18.2cmを測る。口縁部がやや外反して立ち上がり、調整は胴部内面がハケ調整、外面がハケ調整であるが、口縁部内面は摩耗が著しく不明である。色調は内面が橙色、外面が橙色、黒褐色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成は不良である。9は甕の口縁部破片で、約1/6残存し、口径21.0cmを測る。口縁部はやや外反して立ち上がり、調整は全体的に摩耗が著しいが内面の一部にハケ調整が残る。また、外面には煤が付着する。色調は、内面が橙色、外面が橙色、灰褐色、黒色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。

10~13は底部破片である。10は底径1.6cmを測り、調整は全体的に摩耗が著しいが内外面にハケ目が残る。色調は内外面とも灰黄色、灰色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成は良好である。11は約1/3残存し、底径3.4cmを測る。内外面にはヘラナデ調整を施し、色調は、内面にぶい橙色、外面がにぶい橙色、黒褐色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成は良好である。12は約1/2残存し、内面にハケ調整、外面にタタキを施す。色調は、内面にぶい橙色、外面が橙色、褐灰色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成はやや不良である。13は底部が丸みを有し、調整は摩耗が著しく不明である。色調は、内面が灰白色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には1~3mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。

14は鉢である。約1/4残存し、底径9.0cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、調整は摩耗が著しく不明である。色調は内外面とも暗灰色、にぶい橙色を呈し、胎土には1~5mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。

15は台付鉢の脚部と考えられるもので、裾部は欠損する。調整は全体的に摩耗が著しいが、内面にはヘラナデの痕跡が残る。色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土には1~2mm大の砂礫を含み、焼成はやや不良である。

16~19は高杯で、すべて杯部は残存していない。16は底径11.0cmを測り、裾部は僅かに屈曲し、ラッパ状に開く。脚台部内面にはしぼり目残り、全体的に摩耗が著しいが、脚柱部内面にナデ調整、屈曲部外面にハケ目が残る。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成はやや不良である。17は約2/3残存し、底径11.4cmを測る。裾部は明瞭に屈曲し、調整は全体的に摩耗が著しいが、脚柱部内面には指ナデの痕が残る。色調は、内面が橙色、外面が橙色、暗灰色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成は不良である。18は約2/3残存し、底径14.8cmを

測る。裾部は明瞭に屈曲し、やや内湾気味に開く。調整は全体的に摩耗が著しいが、外面にはハケ目が残る。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成はやや不良である。19は裾部も欠損しており、脚柱部のみ残存する。内面にはしぼり目が残り、外面にはハケ調整を施す。色調は、内面が明赤褐色、外面が橙色を呈し、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。

手づくね土器 (Fig.45-20~25)

20は口径4.5cm, 器高3.6cm, 底径3.6cmを測り, 内外面には指頭圧痕が残る。色調は、内面がに

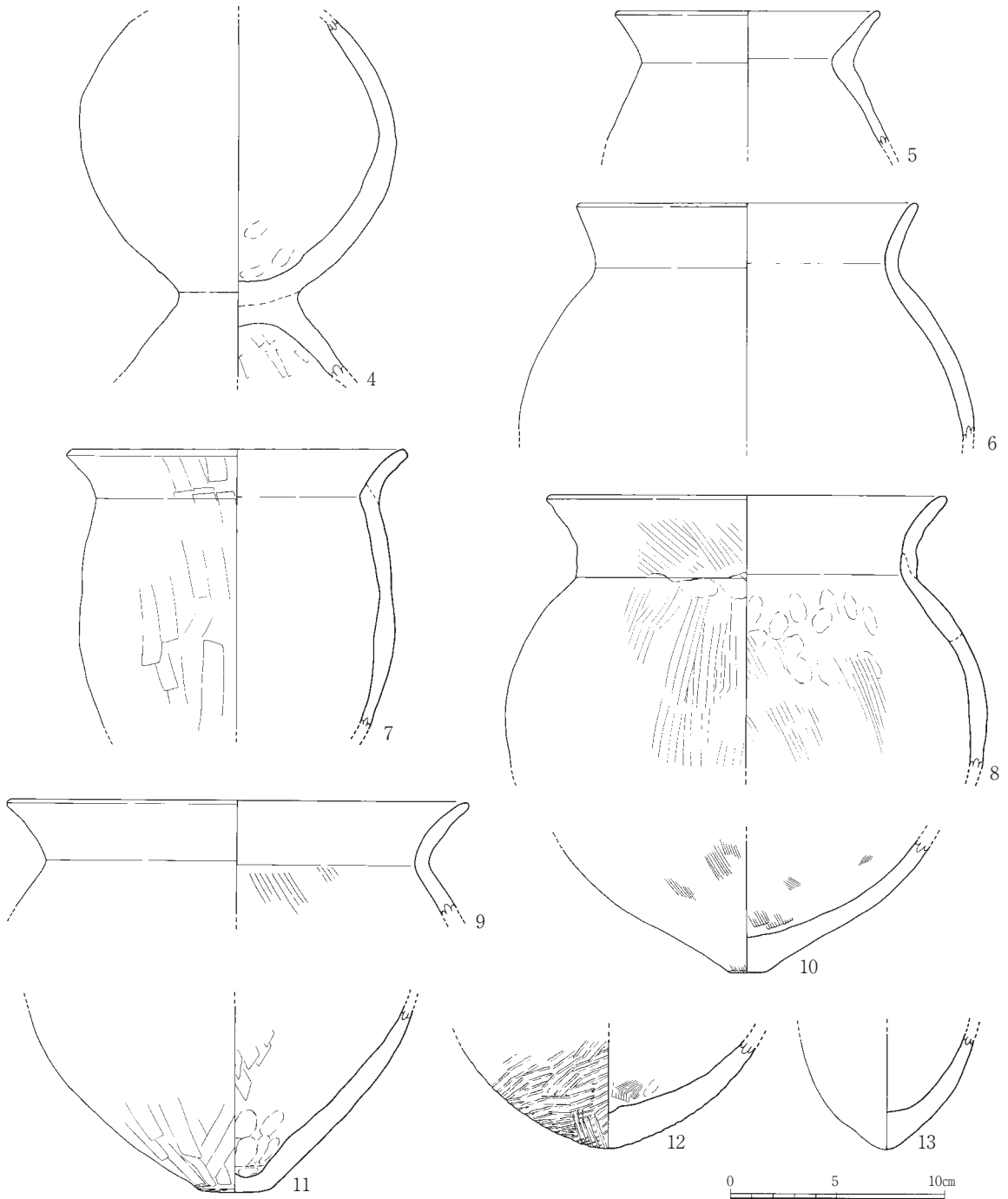


Fig.43 第Ⅷ層出土遺物2(土師器)

ぶい黄橙色，外面がにぶい黄橙色，黄灰色を呈し，胎土には微砂粒を含み，焼成は良好である。21はほぼ完存し，口径4.0cm，器高4.4cm，底径2.7cmを測る。全体的に摩耗が著しいが，内面には指ナデ，外面には指頭圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し，胎土には1mm大の砂粒を含み，焼成は不良である。22は口径7.7cm，器高3.9cmを測り，調整は全体的に摩耗が著しいが，内外面ともに指頭圧痕が残る。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土には1~5mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。23は約1/2残存し，口径4.2cm，器高5.2cm，底径4.0cmを測る。内面には指ナデ調整を施し，外面には指頭圧痕が残る。色調は，内面が橙色，外面が明黄褐色，褐灰色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。24は約1/2残存し，口径7.4cm，器高5.8cm，底径3.5cmを測る。摩耗が著しく調整は不明で，色調は内面が橙色，外面がにぶい黄橙色，暗灰色を呈し，胎土には1~5mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。25はほぼ完存し，口径7.0cm，

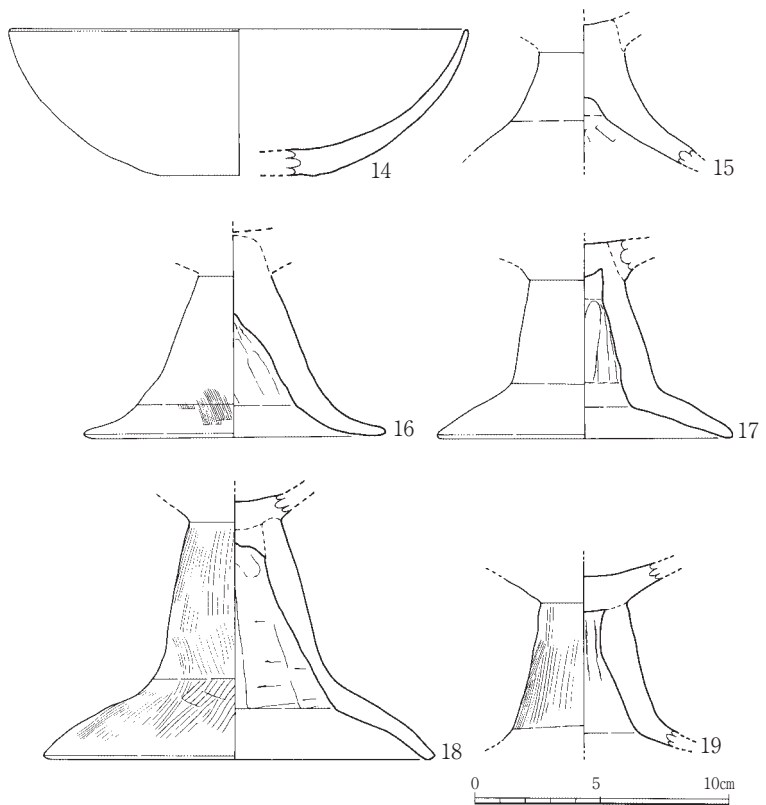


Fig.44 第Ⅸ層出土遺物3 (土師器)

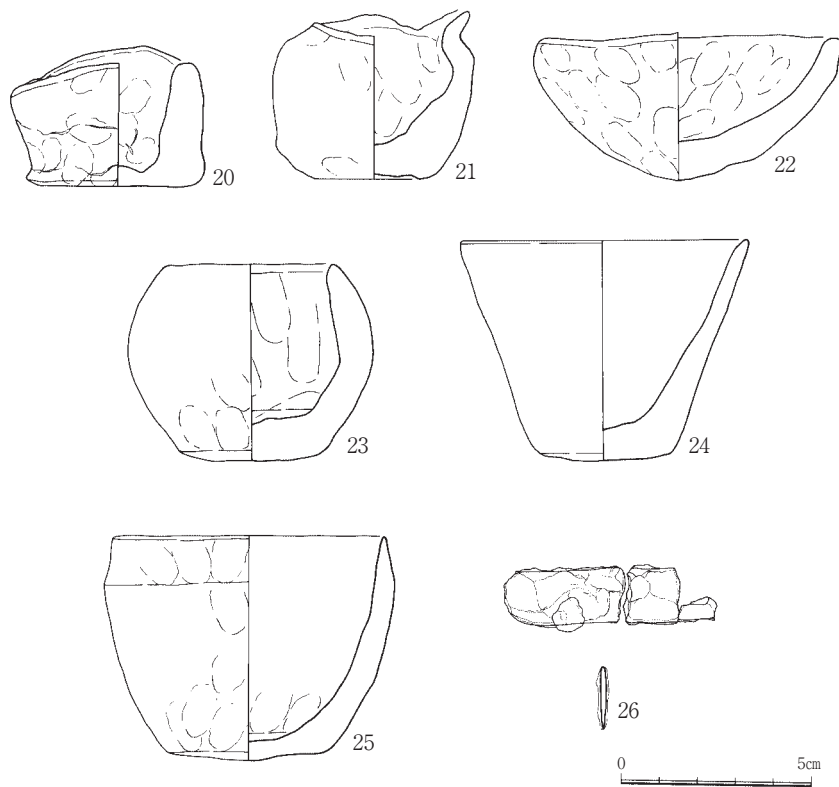


Fig.45 第Ⅸ層出土遺物4 (手づくね土器・鉄製品 26は1/3)

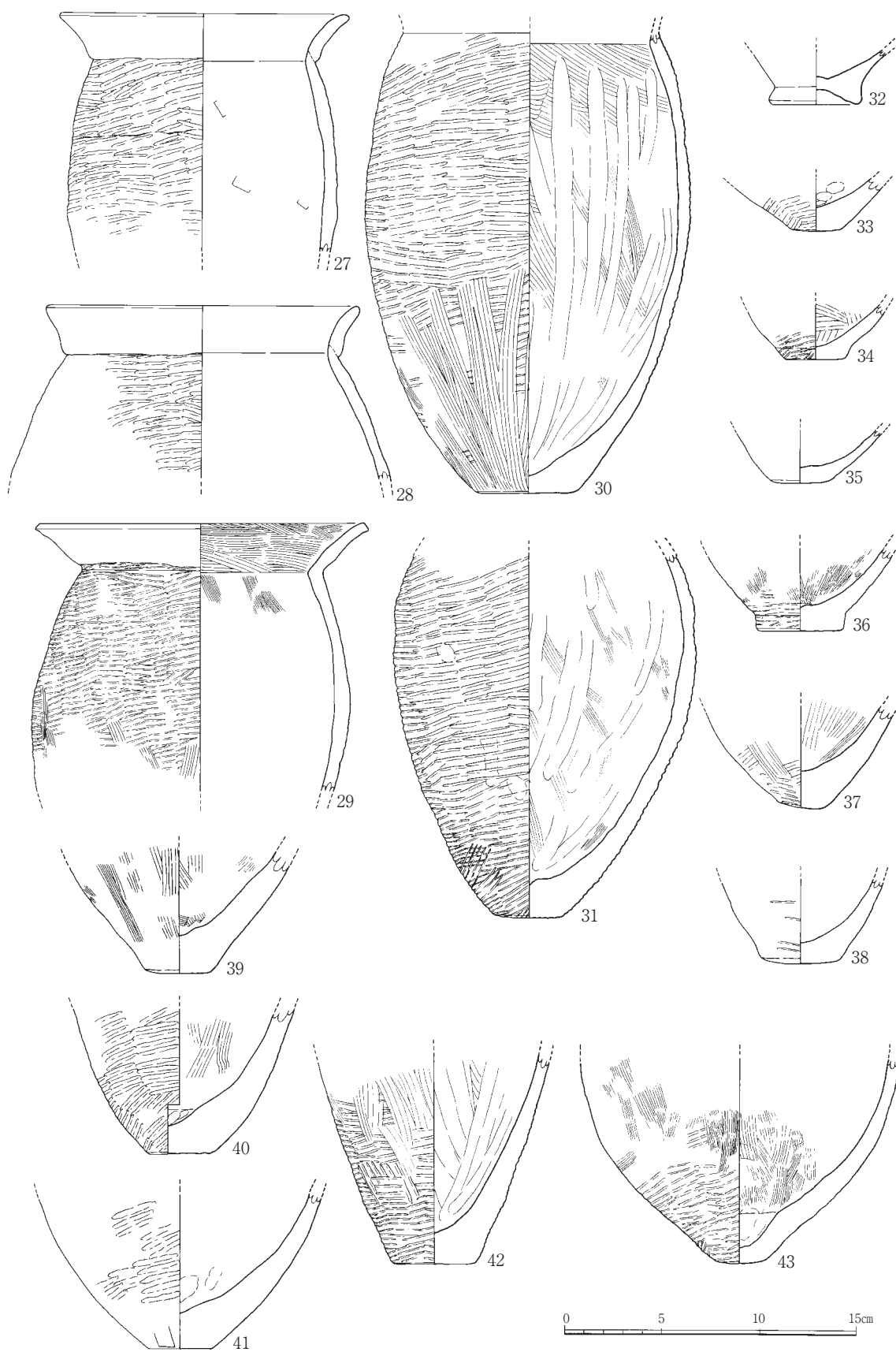


Fig.46 第Ⅳ層出土遺物(弥生土器)

器高5.9cm，底径4.2cmを測る。内外面には指頭圧痕が残り，色調は，内面がにぶい黄橙色，外面がにぶい黄橙色，黒色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。

鉄製品 (Fig.45-26)

26は刀子と考えられるもので，先端部のみ残存する。残存長は8.4cmを測り，断面形は扁平である。大きく3個体に割れており，銹化が進んでいる。

第Ⅷ層出土遺物

弥生土器 (Fig.46-27~43)

27~43は甕で，27~29は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。27は約1/6残存し，口径14.4cmを測る。口縁部下端外面には接合痕が明瞭に残る。内面にはヘラナデ調整，胴部外面にはタタキを施す。また，外面には煤が付着する。色調は，内面がにぶい橙色，黄灰色，外面が橙色，褐灰色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。28は約1/4残存し，口径15.8cmを測る。口縁部下端外面には接合痕が明瞭に残り，胴部外面にはタタキを施す。色調は，内面が橙色，外面が橙色，褐灰色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。29は約1/2残存し，口径16.4cmを測る。口縁部下端外面には接合痕が明瞭に残る。口縁部内面にはハケ調整，胴部外面上半はタタキ，下半はタタキのあとハケ調整を施す。色調は内面が灰黄色，外面がにぶい黄橙色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。

30・31は胴部から底部にかけての破片である。30は約1/2残存し，底径4.6cmを測る。調整は内面にはハケ調整の後ナデ調整，外面には胴部上半にタタキ，下半にタタキの後ハケ調整を施し，外面には煤が付着する。色調は，内面が暗灰色，にぶい黄橙色，外面がにぶい黄橙色，灰色を呈し，胎土には1mm大の砂粒を含み，焼成は良好である。31は約2/3残存し，底径3.4cmを測る。内面

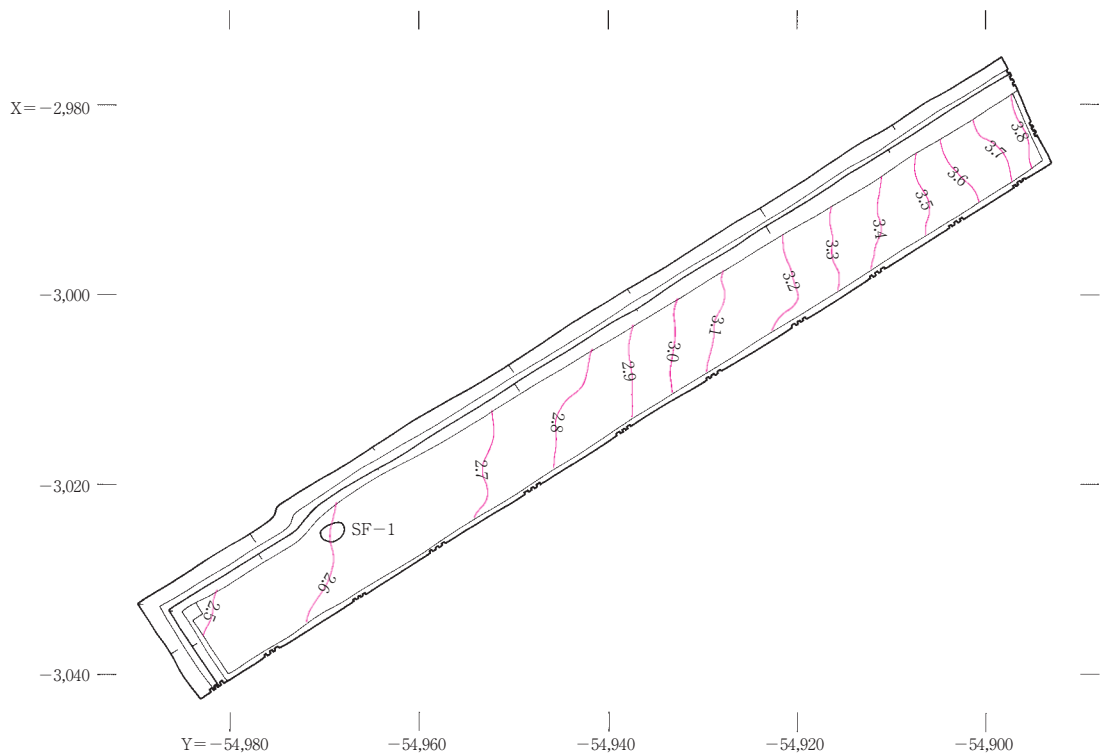


Fig.47 SF-1遺構配置図

にはハケ調整の後指ナデ調整，外面にはタタキを施し，外面には煤が付着する。色調は，内面が灰色，外面がにぶい黄橙色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。

32~43は底部破片である。32は約2/3残存し，底径4.4cmを測る。底部外面は凹み，調整は摩耗が著しく不明である。色調は，内面が暗灰色，外面が橙色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。33は約1/2残存し，底径2.3cmを測る。全体的に摩耗が著しいが，内面には指頭圧痕が残り，外面にはタタキを施す。色調は，内面がにぶい黄橙色，外面が橙色，灰白色を呈し，胎土には1mm大の砂粒を含み，焼成は良好である。34は底径3.0cmを測り，内面には粗いハケ調整，外面にはタタキを施す。色調は，内面がにぶい橙色，外面がにぶい橙色，灰色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。35は底径3.3cmを測り，調整は摩耗が著しく不明である。色調は，内面が橙色，外面が黄橙色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成は不良である。36は約1/3残存し，底径4.0cmを測る。調整は全体的に摩耗が著しいが内面にはハケ目，外面にはハケ目とタタキ目が残る。色調は，内面が橙色，外面がにぶい黄橙色，暗灰色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。37は約1/2残存し，底径2.4cmを測る。外面にはタタキの後ハケ調整，内面にはハケ調整を施す。色調は，内面が灰色，外面がにぶい橙色を呈し，胎土には1~5mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。38は約1/2残存し，底径4.1cmを測る。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが，外面にはタタキ目が残る。色調は，内面がに

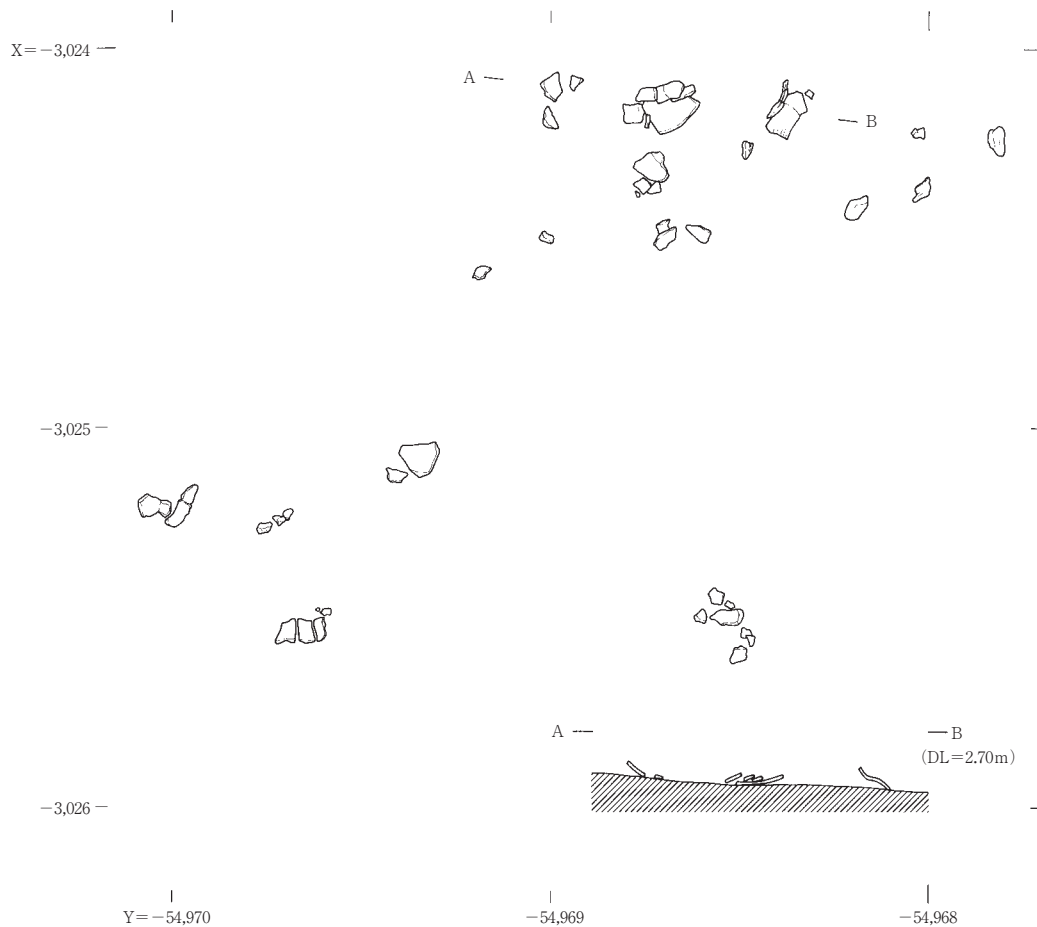


Fig.48 SF-1遺物出土状態

ぶい橙色，黒色，外面が橙色，にぶい黄橙色，黒色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。39は約1/2残存し，底径3.4cmを測る。全体的に摩耗が著しいが内外面にハケ目が残る。色調は，内面が橙色，外面がにぶい橙色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。40は約1/2残存し，底径3.0cmを測る。内面にはハケ調整，外面にはタタキを施す。色調は，内面がにぶい褐色，暗灰色，外面がにぶい橙色，橙色を呈し，胎土には1~3mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。41は約1/2残存し，底径3.2cmを測る。全体的に摩耗が著しいが，外面にはタタキ目が残る。色調は，内面が暗灰色，外面がにぶい褐色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。42は底径4.2cmを測り，内面にハケ調整とナデ調整，外面にタタキとハケ調整を施す。色調は，内面がにぶい黄橙色，暗灰色，外面がにぶい橙色，褐灰色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。43は約1/3残存し，底径2.6cmを測る。胴部内外面にはハケ調整，底部外面にはタタキを施し，底部から胴部上半にかけては赤く被熱し，下半には煤が付着する。色調は，内面がにぶい橙色，灰色，外面が橙色，灰色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成はやや不良である。

3. 遺構と遺物

(1) 祭祀関連遺構

SF-1 (Fig.47・48)

調査区の北西部に位置し，標高2.60m前後で検出された祭祀関連遺構で，東西約2m，南北約2mの範囲から遺物が出土した。この祭祀関連遺構は，平成11年度に発掘調査が行われた具同中山遺跡群Ⅱ-2のSF-1と同じもので，一連の祭祀関連遺構と考えられる。遺物は第Ⅷ層から出土しており，図示できたものは弥生土器の甕2点(44・45)であった。

出土遺物

弥生土器 (Fig.49-44・45)

44はほぼ完存し，口径17.0cm，器高24.0cm，底径2.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に屈曲し，やや外反しながら立ち上がる。調整は，内面が口縁部から胴部上半にかけてハケ調整，胴部下半から底部にかけてハケ調整とナデ調整を施す。外面は口縁部から胴部上半にかけてはタタキ，胴部下半から底部にかけてはタタキの後ハケ調整を施す。色調は，内面が黒色，灰白色，外面がにぶい黄橙色，橙色，黒色を呈し，胎土には1~2mm大の砂礫を含み，焼成は良好である。45は約2/3残存し，底径2.2cmを測る。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが，内外面にハケ目が残る。色調は内面が褐灰色，外面がにぶい褐色を呈し，胎土には1mm大の砂粒を含み，焼成は良好である。

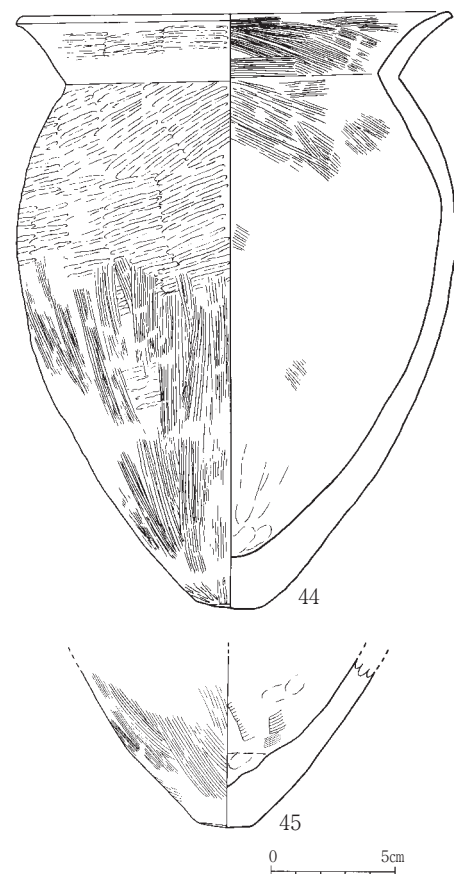


Fig.49 SF-1出土遺物

第Ⅵ章 考察

1. 久木ノ城跡・遺跡

(1) 遺構について

本調査区は中村市と三原村の境をなす貝ヶ森山系から北東方向に延びた標高30～33m、比高差約25mを測る尾根上に位置し、調査区の位置する尾根の先端部には1条の堀切を伴う単郭式山城である久木ノ城跡が存在している。調査区内の地勢は、標高約33m、面積約384m²を測る平場1を中心に、その東側に標高約32m、面積約47m²（平場2）、標高約31m、面積約76m²（平場3）、標高約30m、面積約66m²（平場4）を測る3カ所の平場、西側には標高約30m、面積約216m²の平場5が存在している。また、南斜面部には近世以降に成形されたと考えられる段部が数多く存在し、杉などが植林されていた。このうち平場1と平場2・3、平場2と平場3の間には近世以降のものと思われる石垣が築かれており、この平場が近世以降なんらかの形で使用されていたことを窺わせる。また、平場1の南西部では地山直上で地山礫を主体とする人為的な盛土がみられ、平坦部を形成するために削りだされた地山礫を盛り上げ、平坦面を造成しており、これらの平場は削平を受けていると考えられるが、時期を特定する遺物は出土していない。これらの平場が造成された時期は不明であるが、ST-1～3が検出された平場3・5は弥生時代に一定造成されていた可能性は考えられ、平坦部や斜面部で当該期の遺構を検出した。

検出された遺構は竪穴住居跡3軒、土坑3基、段状遺構7カ所である。確認された3軒の竪穴住居跡のうち調査区西側の平場で確認されたST-2は径約8mの大型住居跡である。この大型竪穴住居跡は住居内に径約4.3mを測る入れ子状を呈するST-3を伴っている。建替えに伴うものとみられるが、平面形をみると完全に大型住居内に取り込まれた形を呈しており、これは入れ子状を呈する一段低い床面の可能性も考えられる。高知県西部で当該期の竪穴住居跡が検出されたのは本遺跡を除き、大月町ムクリ山遺跡と中村市古津賀遺跡東ナルザキ地区の2例のみと調査例が少なく、入れ子状を呈する床面の存在は推測の域を出ない。

また、調査区の南側斜面部では段状遺構が計7カ所確認されており、これらの中には比較的多くの土器や焼土を伴うものもあり、生産活動に伴う遺構とみられる。このような段状遺構はバーガ森遺跡のような高地性集落で検出される遺構であり、独立施設と住居跡の付随施設になる場合がみられるようである⁽¹⁾。兵庫県三田市カリ与遺跡では住居跡から若干離れて上方に段状遺構が存在し、傾斜面を流れ落ちてくる雨水を住居外方の左右へ分散させていたと考えられている⁽²⁾。本遺跡で検出された段状遺構は住居跡の下方に位置しているため、前述したカリ与遺跡とは異なるようであるが、本遺跡の段状遺構は二つの様相を呈している。7カ所の段状遺構のうち、比較的土器が出土したのはSS-1・4・7である。SS-1では床面に焼土面が検出されており、生活の痕跡がみられる。これら段状遺構の配置をみると、SS-1の上方にはSS-2・3、SS-7の上方にはSS-6が存在しており、前述した兵庫県三田市カリ与遺跡の例と類似してくる。本遺跡では生活痕跡がみられる段状遺構の上方に段状遺構を配しており、カリ与遺跡と同様に傾斜面を流れ落ちてくる雨水

を分散させていたのではなかろうか。

本遺跡のような高地性集落は広義的には「比高差からみて、低地性集落より高い場所に営まれた集落」と解され、狭義的には「時期的に限定され、現在の農村と重複しておらず、見張り・通報・防塞に相応しい位置と地形、防備施設と武器的遺物の存在が確認される高地に営まれた集落」と考えられている³⁾。本遺跡は比高差25m前後に立地しており、当然低地性集落ではなく、高地性集落である。ただ、狭義的にみると本遺跡で防備施設は確認されていない。武器的遺物はST-2から粘板岩製の磨製石鏃が1点出土しているのみで、いわゆる「狭義の高地性集落」には当てはまらないことから、本遺跡は低地性集落と変わらず、ただ丘陵上の高地に営まれた集落であったと考えられるが、どのような原因で丘陵上に集落を営んだのか判然としない。

(2) 遺物について

本遺跡では平場や尾根上で明確な遺物包含層は確認されなかったが、2次堆積とみられる斜面堆積層などから弥生土器片が1,924点出土している。しかし、細片が多く全体の形状が把握できるものは少ないため、実測点数も少なく形態分類できるほどの資料数は存在しない。本報告書で図示されている甕、壺のうち、口縁部形態や文様構成などが明らかであるものは8点で(4~6・18・22・31・33・34)、そのうち壺が6点(4~6・18・22・31)、甕が2点(33・34)である。この中で、33は甕において胴部から口縁部まで残存する唯一のもので、口縁部は水平近くまで大きく外反し、最大径を口縁部に有する形態的特徴がみられ、施文構成は刻目、櫛描直線文、微隆起突帯、円形浮文である。また、34も口縁部が水平近くまで外反し、33と同様の形態を有する可能性が考えられ、明確な接合痕は確認されないが、粘土帯を貼付していたものとみられる。このような形態的特徴は平成7年度に発掘調査が実施された具同中山遺跡群Ⅱ-1調査地区⁴⁾で検出されたSR2や遺物包含層からの出土資料に散見される。この出土資料は概ね弥生時代中期中葉から中期後半の範囲に含まれるとされており⁵⁾、形態的な特徴から本遺跡の資料も概ね同時期に収まるものと考えられる。高知県西部では弥生時代中期後半の良好な資料を欠き、当該期の資料数も少ないため不明な点が多い。このため本遺跡出土の資料を高知県西部において明確に位置付けることは現時点では難しく、今後当該期資料の増加を待って、再検討しなければならない。

また、ST-2からは九州からの搬入品と考えられる磨製石鏃が出土している。このような磨製石鏃は古津賀遺跡東ナルザキ地区からも出土しており⁶⁾、本遺跡が営まれた当該期には九州地方との交流が幅広く展開されたことを窺わせる。

(3) まとめ

本遺跡では竪穴住居跡3軒、土坑3基、段状遺構7ヵ所が検出された。前述したように時期的には出土遺物から弥生時代中期後半に比定されるが、当該期の資料が少なく不明な点が多い。弥生時代の大規模集落である田村遺跡群に代表される高知県中央部に対して、高知県西部では当該期の遺跡の発掘調査例は数例のみである。本遺跡では高地性集落の存在を確認したが、検出遺構や出土遺物も少なく、これからの資料の増加に伴って具体的な高知県西部における当該期の様相が明

らかになっていくとみられる。

2. 古津賀遺跡

(1) 弥生時代について

古津賀遺跡周辺では、吹越遺跡・久山遺跡・岩崎山遺跡等の高地性集落が多くみられ、低地では遺跡がみられなかった。しかし、中村市の調査からナルザキ地区では、弥生時代中期の竪穴住居跡を含む集落跡が確認されており⁷⁾、低地の西中野地区からも弥生時代中期に九州で隆盛する須玖式土器が出土している⁸⁾。今回調査したTR-3の第Ⅻ層から器形、調整は不明であるが粘土帯貼付口縁を有する弥生時代中期の土器細片が3点出土しており、湿地帯周辺でも洪水などの自然災害を避けながら低地で居住していたことが考えられる。

(2) 古墳時代について

古墳時代の祭祀は、具同中山遺跡群の中で多く調査され数々の成果が出されている。古津賀遺跡については、『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』⁹⁾と、中村市が調査した『古津賀遺跡群－ホウシボウ地区1・2次調査－』¹⁰⁾などがあり、古津賀遺跡群の遺跡範囲は広がっている。ホウシボウ2次調査では、祭祀関連遺構と土師器の甕・高杯・鉢、須恵器、手づくね土器などの遺物が出土し、竪穴住居跡も祭祀遺構と近接して検出されており、須恵器の型式から5世紀後半から6世紀初頭のものとして位置付けられている。

今回の調査では、狭い調査範囲にもかかわらず土師器の壺・甕・高杯・手づくね土器がまとめて検出されており、遺物は第Ⅻ層から第Ⅷ層にかけて沈み込むように出土している。遺物が出土した層は、湿地堆積にみられるような泥土沈澱層で、遺物はなんら遺構を伴わず沈澱土上に廃棄されたような状態であった。本調査区は、遺跡周辺小字図からみると、「クボノ前」地区で、窪地であり周辺より低い場所の湿地帯と考えられる。また、その南側も「岸ノ下」という地名で川の支流と想定される。出土した遺物は、摩耗が著しく器面調整が不明瞭なものが多く、壺や甕は欠損しているものが多かった。また、甕には穿孔(3×3cm)の痕跡がみられ、手づくね土器は甕や高杯の近くに散乱していた。

古津賀遺跡と具同中山遺跡群の祭祀についてみると、具同中山遺跡群が、古津賀遺跡よりも早い時期に祭祀が行われ、その後古津賀遺跡が祭祀行為の主要な対象地となったと考えられている。今回の発掘調査地点から出土した土器の器種形態は、壺・甕・高杯・手づくね土器の土師器のみで構成され、須恵器は出土しなかった。しかし、これまでの古津賀遺跡と具同中山遺跡群の調査から、『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』の中の古津賀遺跡SF7や具同中山遺跡SF2・4～6、具同中山遺跡群ⅠのSR3¹¹⁾、具同中山遺跡群Ⅲ-2のSF4¹²⁾、具同中山遺跡群Ⅲ-3のSF3やSF8¹³⁾、具同中山遺跡群ⅣのSF5・10・11¹⁴⁾の甕・高杯・手づくね土器と比較してみると、極めて近似した形態を示している。このことから今回の調査区から出土した遺物は、須恵器が既に出現していた古墳時代の前期から中期頃の様相を呈していると考えられる。

3. 神ヶ谷2号窯跡

(1) 遺構について

本遺跡で確認された遺構は須恵器窯跡1基とそれに伴う灰原1カ所であり、本遺跡の東約125mには平成10年度に発掘調査が実施された神ヶ谷1号窯跡⁹³が存在する。両窯跡とも中村宿毛道路の工事中に発見されており、これから新たに発見される可能性も考えられるが、現時点では確認された窯跡は2カ所のみである。

神ヶ谷1・2号窯跡は中筋川中流域の右岸に位置しており、周辺の地形は高知西南中核工業団地や中村宿毛高規格道路の建設に伴い、大きく変貌している。神ヶ谷1・2号窯跡は宿毛市と三原村との境をなす東西に延びる山系から派生した丘陵の斜面部、旧地形をみると北西方向に開いた小規模な谷の開口部付近に立地している。両窯跡とも同様の立地条件を示すが、これはこの地域の自然環境に大きく影響を受けていると考えられる。

須恵器を焼いた工人の生活は、大阪府陶邑窯跡群の調査結果から自らの食糧については自らが農耕を行う兼業で、須恵器工人の生活暦に関しては陶邑窯の近接地である堺市鉢ヶ峰町における民俗調査例との比較から、農閑期である1～3月は薪採り、農繁期の4～10月に農作業の合間をぬっての製作作業、稲刈り後の11・12月に窯焚きが行われたと想定されている⁹⁴。神ヶ谷1・2号窯跡が所在する高知県宿毛市の近世から近代における農村の年間生活暦は、前述した堺市鉢ヶ峰町の生活暦とほぼ同じと考えられ⁹⁵、本遺跡でも農繁期に製品製作、農閑期に薪採りや窯焚きが行われたと想定される。神ヶ谷1・2号窯跡で窯焚きが行われたと想定される冬季には、両窯跡が所在する宿毛市平田町付近では北西方向から強い風が吹き、当時においても同じ風向きであった可能性が高い。前述したように神ヶ谷1・2号窯跡は北西方向に開く谷に立地しており、これは両窯跡で窯焚きが行われたと想定される冬季に吹く北西方向からの風を意識し、築窯する場所を選定した結果ではなかろうか。また、窯体自体も風向きを意識していたとみられ、1号窯跡は主軸方向がN-45°-Wとほぼ焚口が北西方向に向き、ほぼ正面から風を受けるように築窯されている⁹⁶。また、2号窯跡は主軸方向がN-21°-Eと焚口が北東方向を向いており風向きに対して直角だが、焚口から前庭部にかけて窯体の西側は東側に比べ大きく拡張されている。これは本窯跡と時期は異なるが、10世紀第3四半期に比定される兵庫県三田市に所在する相野窯跡群の中池ノ内1号窯跡で確認されている風を多く取り込み、熱効率を上げる工夫と同じであると考えられ⁹⁷、北西方向からの風をより多く取り入れようと意図的に拡げているものとみられる。

また、神ヶ谷1・2号窯跡は立地する標高も異なり、1号窯跡の焚口付近の標高は約9m、比高差は約3mで、2号窯跡は焚口付近の標高は約16m、比高差約10mを測る。香川県綾歌郡綾南町に所在する十瓶山窯跡群では、時期が下るにつれて標高の高い地点へ移動したと考えられており⁹⁸、立地する標高をみると窯移動が想定される。従来、窯移動の原因とみなされてきたのは粘土や燃料薪の枯渇で、燃料薪は本窯跡のような窖窯での長時間の高温焼成にあたっては大量消費されると考えられている⁹⁹。窯焚きに必要とされる燃料薪は周囲の山林から調達されたと考えられるが、焼成に必要な薪燃料が前述したように大量消費されると、周囲の山林は短期間に枯渇してしまうと考えられ、十瓶山窯跡群では通常の須恵器窯の頻繁な移動には、窯周辺にある燃料供給源の枯渇

が大きな要因となっていたことは、概ね肯定できるとされている²³。須恵器窯の窯焚きは年に数回しか行われなかったとみられるが²⁴、燃料薪の消費量を考えると数年で窯の周囲の山林は枯渇し、このような燃料供給方法では比較的短期間に窯を移したと考えられる。このことは窯体の補修にも表れており、本窯跡では1面しか床面は確認されず、燃料薪の枯渇から短期間に廃棄された可能性も考えられる。また、湖西古窯跡群²⁵、壺ノ谷窯址群、十瓶山窯跡群などでは、複数の窯を近接して築窯し薪燃料の伐採量を超過してもなお窯が継続される例がみられる。これは、安定した薪燃料の供給をもとに集約された須恵器生産が行われた結果であると考えられるが、神ヶ谷1・2号窯跡では窯は近接して築窯されず、集約された生産体制はとっていないとみられ、このことも薪燃料の枯渇に起因する窯の移動を裏付けるものであろう。

窯体構造は神ヶ谷1・2号窯跡ともほぼ同じで、概ね焚口が大きく「ハ」の字状に広がり、その床幅については焚口、燃烧部、焼成部とも大きな差はない。1号窯跡は水平長4.85m、最大幅0.85mを測り、2号窯跡とはほぼ同規模・同形状であるが、床面の傾斜角度は焚口から焼成部中央付近までは約24度、焼成部中央付近から煙出しにかけては約34度を測り、焼成部の傾斜角度が約25度を測る2号窯跡と比べ焼成部上半の傾斜角度は急である²⁶。また、1号窯跡の立地する斜面の傾斜角度は約35度を測り、2号窯跡の立地する傾斜角度は約20度と2号窯跡に比べ1号窯跡は急な斜面に築窯されており、このような床面の傾斜角度や築窯された立地条件の相違は窯を築窯する場所の選定や窯体の構築に対しての意識の違いが想定される。時期はやや異なるが相野古窯跡群では操業開始時期の32~38度を測る窯体傾斜角度で地山をしっかりと掘り込む構造から、時期が下るにつれて約25度と窯体傾斜角度が緩やかになり掘り込みも浅い構造に変化していく過程が明らかにされているが²⁷、京都府船井郡園部町に所在する壺ノ谷窯址群²⁸や陶邑古窯跡群²⁹では床面の傾斜角度は時期が新しくなるにつれてきつくなるとされており、床面傾斜角度の変化については一様ではない。

この床面傾斜角度の変化は熱効率を上げるためと考えられ、須恵器工人の工夫の結果であるとみられる。当時の須恵器工人はより良い床面の傾斜角度を求めて窯体構造を変化させていったのであろう。先の相野古窯跡群と壺ノ谷窯址、陶邑古窯跡群に認められる窯体構造の変化の違いは、それぞれの須恵器製作工人の窯体構造に対する意識の違いであると考えられる。

(2) 遺物について

本遺跡で検出された窯体は後世の段畑の影響で途中で分断され、灰原も工事途中で発見されたため下方は削り取られていたが、窯体内や灰原から時期を限定するとみられる須恵器が破片点数で1,442点出土している。このうち比較的多く出土した杯蓋、杯、皿を用いて、神ヶ谷1号窯跡出土資料との比較検討を行いたい。また、焼け歪みや欠損により全体の形態や正確な法量を把握することは困難であるため、法量での分類は行わなかった。本項では特定部位の形態分類を行ったうえで、調整技法などから細分した。

まず、杯蓋は口縁端部の形態から以下のA~C類に分類される。

A類 口縁端部を下方に屈曲させるもの(9~11・40・64・65)で、天井部外面の調整技法により細分を行う。

- A-1類 天井部外面に回転ヘラ削りを施すもの(64・65)
- A-2類 天井部外面に回転ヘラ削りを施さないもの(40)
- B類 口縁端部内面が屈曲に伴い沈線状を呈するもの(12~14・41・66・67)で、天井部外面の調整技法により細分を行う
 - B-1類 天井部外面に回転ヘラ削りを施すもの(12・14・67)
 - B-2類 天井部外面に回転ヘラ削りを施さないもの(13・41)
- C類 口縁端部に特徴を持たないもの(42)

杯は高台の有無で以下のA・B類に分類される。

- A類 平底の杯(3・15~18・31~33・43~51)で、底部切り離し後の調整の有無により細分を行うが、50に関しては底部外面の摩耗が著しく不明である。
 - A-1類 底部の切り離し後、ナデ調整を施すもの(16・18・31・43・48・49・51)
 - A-2類 底部の切り離し後、未調整のもの(3・15・17・32・33・44~47)
- B類 高台を有する杯で(4~6・19~23・34・35・52~57・69~74)、底部切り離し後の調整の有無により細分を行うが、4・23・70・71・74に関しては底部外面の摩耗が著しく不明である。
 - B-1類 底部の切り離し後、ナデ調整を施すもの(5・6・19~22・35・55~57・69・72・73)
 - B-2類 底部の切り離し後、未調整のもの(34・52~54)

皿も高台の有無で以下のA・B類に分類される。

- A類 平底の皿(1・25~29・37・38・61~63・75・76)で、口縁部の形態により細分を行う。
 - A-1類 口縁端部内面が屈曲に伴い沈線状を呈するもの(1・25~27・62・63)で、底部切り離し後の調整の有無によりさらに細分されるが、27・62に関しては底部外面の摩耗が著しく不明である。
 - A-1a類 底部の切り離し後、ナデ調整を施すもの(1・26・63)
 - A-1b類 底部の切り離し後、未調整のもの(25)
 - A-2類 端部内面が屈曲に伴い凹線状を呈するもの(28・38・61)で、底部切り離し後の調整の有無によりさらに細分される。
 - A-2a類 底部の切り離し後、ナデ調整を施すもの(28・38)
 - A-2b類 底部の切り離し後、未調整のもの(61)
 - A-3類 口縁端部に特徴を持たないもの(29・75・76)で、底部切り離し後の調整の有無によりさらに細分されるが、29・76に関しては底部外面の摩耗が著しく不明である。
 - A-3a類 底部の切り離し後、ナデ調整を施すもの(75)
- B類 高台を有する皿である(77)

以上の形態分類をもって、神ヶ谷1号窯跡出土遺物との比較検討を行っていきたい。しかし、調整痕が摩耗し分類不能なものがあり、現実に即していない可能性も否定できないが、おおよその

傾向は掴めるのではなからうか。神ヶ谷1・2号窯跡の対比によって両窯跡の関係が浮き彫りになるものと考えられる。なお後述される分類に関してはそれぞれの報告による。

まず、杯蓋であるが、神ヶ谷1号窯跡の報告書に図示されている杯蓋87点のうちI類(天井部外面に回転・断続ヘラ削りを施すもの)は35点あり、杯蓋全体に対する比率は約40%であるが、本窯跡では回転ヘラ削りがみられるA-1・B-1類は5点で、杯蓋全体に対する比率は約38%と1号窯跡に比べ比率が僅かに下がっている。ただ1号窯跡ではI類は比較的大型であるのに対し、本窯跡ではこの傾向は認められない。口縁端部の形態に関しては、1号窯跡のIIA類(口縁端部を摘み出すもの)、IIB類(口縁端部内面に沈線を巡らすもの)、IID類(口縁端部を丸く収めるもの)の比率をみるとIIA類約37%、IIB類約11%、IID類約14%になり、2号窯跡ではA類約46%、B類約46%、C類約8%でA類とB類の割合が突出している。なお、2号窯跡では口縁端部が屈曲に伴い凹線状を呈するものは確認されていない。

杯A類に関しては、底部の切り離し後のナデ調整の有無に大きな違いが認められる。1号窯跡において、Aa類(底部の切り離し後、丁寧なナデ調整を施すもの)は41点、Ab類(ヘラ切り痕跡が明瞭に残るもの)は21点で、Ab類の比率が全体に対し約34%になるが、2号窯跡においてはA-1類が7点、A-2類が9点で、A-2類の全体に対する比率が約52%に上がり、半数を占めるようになっている。杯B類に関しても1号窯跡では底部切り離し後、未調整なものは1点も認められないが、2号窯跡ではB-2類が出現し、杯A・B類では底部切り離し後のナデ調整を丁寧に行うものは概して少なく、調整が粗雑化する。また、1号窯跡で底部外面にヘラナデ調整やヘラ削り調整などがみられるものが4点確認できるが、2号窯跡では確認されなかった。

皿においては底部外面の調整の有無は杯と逆の傾向を示し、1号窯跡ではAa類(底部切り離し後、ナデ調整を施すもの)が19点、Ab類(ヘラ切り痕跡が明瞭に残存するもの)が7点で、Ab類の比率が全体に対し約27%となるが、2号窯跡ではA-1b・2b・3b類が2点、A-1a・2a・3a類が6点と、A-1b・2b・3b類の比率が全体に対し25%と若干下がっている。口縁端部の形態に関しては、1号窯跡では口縁端部を丸く収めるものが全体の約82%とかなり高い比率を示すが、2号窯跡のA-3類の全体に対する割合は約21%と低く、A-1・A-2類が多く認められる。

これらの結果から判断される大きな特徴は、杯・皿の底部切り離し後に施されるナデ調整の簡略化である。杯A類では1号窯跡は切り離し後未調整なものが約34%と全体の約1/3になるのに対し、2号窯跡では約52%と全体の1/2まで比率が上がり、ナデ調整が施されても粗雑なものが多い。また、杯B類でも2号窯跡ではB-2類の出現が認められる。この結果は若干の誤差は当然含まれると考えられ、鵜呑みにすることは出来ないが、底部外面の調整簡略化の表れとして捉えることは可能であろう。また、2号窯跡は1号窯跡に比べ杯蓋のA・B類や皿A-1・2類の比率が高くなっており、口縁端部の形態に差が認められる。

また、2号窯跡の杯B類の高台内にみられる爪形状圧痕は高台沿いに波状に連続して巡り、高台貼付け時に付いたものと考えられ、1号窯跡で確認されたものと同種の圧痕であるが、35のように高台沿いの圧痕の内側に、高台に対して斜め方向に連続する爪形状圧痕が残る特異なものが1点存在する。また、1号窯跡では殆ど全ての杯B類の底部外面に認められているが、2号窯跡では杯B類

で底部外面が観察可能なもので、爪形状圧痕が残るものは11点、残らないものは6点と約35%のものには圧痕が認められず、違った様相を呈する。しかし、この圧痕は高台貼付け後の調整などで消される可能性も想定されるため、圧痕が残存するものの比率は若干上がるとみられる。

(3) まとめ

遺構・遺物についてみてきたが、本項では1号窯跡との対比によって生じた相違点から両窯跡の時期差について考えてみたい。

1号窯跡では下ノ坪遺跡の成果と対比して8世紀中葉(中央部Ⅰ-4・5期)に位置づけられているが⁸⁹、2号窯跡でも8世紀中葉(Ⅰ-4期)で見られる天井部外面をナデ調整のみで仕上げるものの出現、皿の口縁端部内面が屈曲に伴い凹線状を呈するものが主流となることなどの特徴や、8世紀中葉(Ⅰ-5期)に認められる底部外面の調整簡略化など下ノ坪遺跡との比較では概ね1号窯跡と同時期であると考えられる⁹⁰。しかし、高知県西部では高知県中央部に比べ皿A-2類が比較的遅くまで残る状況が具同中山遺跡群Ⅳ、風指遺跡、船戸遺跡の調査成果から判明しており⁹¹、高知県中央部と西部は一様ではない。

このため1・2号窯跡は下ノ坪遺跡との対比ではほぼ同時期に収まるが、それぞれの窯体構造や出土遺物を比較すると数々の相違点がみられる。前述したように窯跡の立地条件や窯体構造などから1号窯跡と2号窯跡の違いが認められ、これは杯蓋や皿にみられる口縁部形態の出土比率の違いや杯A類における底部外面の調整簡略化などからも支持される。また、前述した爪形状圧痕は須恵器の製作技術や製作工人の特色を表していると考えられており⁹²、神ヶ谷1・2号窯跡にみられる同圧痕の残存状況や一部にみられる特異な爪形状圧痕は須恵器製作に参加した製作工人の特徴を端的に示している可能性があり、このことから両窯跡の違いは明確である。

神ヶ谷1・2号窯跡は同一の窯群を形成していたとみられるが、上記の相違点と合わせて考えると立地条件の変化や底部外面の調整簡略化から1号窯跡から2号窯跡への変遷が仮定され、両窯跡にみられる爪形状圧痕の残存状況の違いや特異な爪形状圧痕は須恵器製作に関係した工人の違いと考えられる。しかし、このことは二つの須恵器窯跡を比較しただけであり、あくまでも仮定である。このような須恵器窯跡の変遷や須恵器製作工人の姿は今後の資料の増加に伴って明らかになっていくものと考えられる。

4. 具同中山遺跡群Ⅱ-2

具同中山遺跡群は中筋川下流域の左岸に位置しており、中筋川の河川改修工事や国土交通省が計画している中村宿毛高規格道路の建設に伴って昭和61年から断続的に発掘調査が行われてきた遺跡である。本年度は平成11年度に発掘調査が実施された中村宿毛道路関連と県道中村下ノ加江線関連の調査区に挟まれた部分について本発掘調査を行った。遺物包含層は弥生時代と古墳時代の2層を確認し、それぞれの層位からは当該期の遺物が出土しており、遺構は古墳時代の遺構検出面でピットが検出された。

本調査区で確認された祭祀関連遺構のSF-1は本調査区で検出された唯一の祭祀の痕跡である

が、遺物量も少なく図示できたものも2点(44・45)のみであった。このうちほぼ完存する44は、前回調査のSF-1出土の甕とほぼ同形態であり、SF-1が確認された位置も前回調査のSF-1と近接していることから、このSF-1は前回調査のSF-1と同一の祭祀関連遺構と考えられる。また、SF-1以外にも遺物集中箇所は3ヵ所確認されたが、これらは遺物量も少ないうえに祭祀跡としての規則性などは認められず、祭祀跡として断定できるものではなかった。本調査区では全体的に遺物量は少なく遺物の出土状態も散発的なものであり、祭祀跡は他の調査区に比べると圧倒的に少ないが、これは本調査区の立地条件によるものと考えられる。

具同中山遺跡群における弥生時代や古墳時代の祭祀行為は自然堤防上で頻繁に行われていたことが、具同中山遺跡群Ⅲ-2・3調査地区での調査結果からも推定される。しかし、自然堤防の縁辺部に位置している本調査区や具同中山遺跡群Ⅱ-2調査地区では祭祀行為を行ったと見られる遺物集中箇所や遺物量は自然堤防上の調査地区に比べ総じて少ない。このように立地条件が異なると祭祀行為の規模や回数に大きな違いがみられ、具同中山遺跡群における祭祀行為は自然堤防上を中心に行われ、自然堤防の縁辺部に立地する本調査区付近では祭祀が行われることは少ないため、祭祀関連遺構の密度は低いと考えられる。また、古墳時代の遺構検出面でピットを検出したが、規則性などは認められず柵列や建物跡を構成すると判断できるものはなかった。

昭和61年から連綿と続いてきた具同中山遺跡群の調査は今回の調査をもって終了する。高知県下最大級の祭祀遺跡である具同中山遺跡群の発掘調査では、古墳時代中期を中心とする歴大な量の祭祀遺物が出土している。また、本遺跡は複合遺跡であるため、古墳時代を問わず縄文時代・弥生時代・古代・中世の各時期の遺構・遺物が出土しており、貴重な資料を蓄積することができた。これら十数年の発掘調査での成果は、高知県西部にとどまらず、高知県全体の歴史を考えるうえでの重要な鍵になるとみられる。

註

- (1) 森岡秀人「高地性集落」『弥生文化の研究7 弥生集落』雄山閣 1997年
- (2) (1)と同じ
- (3) (1)と同じ
- (4) 『具同中山遺跡群Ⅱ-1』-中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- (5) 松田直則「具同中山遺跡群出土の弥生中期の土器について」『具同中山遺跡群Ⅱ-1』-中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- (6) 『古津賀遺跡 東ナルザキ地区 現地説明会資料』 中村市教育委員会 2000年
- (7) (6)と同じ
- (8) (6)と同じ
- (9) 『古津賀遺跡・具同中山遺跡群』-後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ- 高知県教育委員会 1988年
- (10) (6)と同じ

- (11) 『具同中山遺跡群Ⅰ』－中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- (12) 『具同中山遺跡群Ⅲ－2』－中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅹ－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- (13) 『具同中山遺跡群Ⅲ－3』－中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅺ－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- (14) 『具同中山遺跡群Ⅳ』－県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- (15) 『神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡』では「神ヶ谷窯跡」と報告されているが、本遺跡が発見されたため、本報告書では「神ヶ谷1号窯跡」と記載する。
- (16) 中村浩『須恵器』ニューサイエンス社 1980年
- (17) 岡野巖「農業」『宿毛市史』宿毛市教育委員会 1982年
- (18) 『神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡』－中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅸ－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- (19) 『相野古窯跡群』－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財発掘調査報告書(XⅧ)－本文編 兵庫県教育委員会 1992年
- (20) 佐藤竜馬「十瓶山窯跡群の分布に関する一考察」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅱ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1994年
- (21) (20)と同じ
- (22) (20)と同じ
- (23) (16)と同じ
- (24) 『静岡県の窯業遺跡』(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)本文編 静岡県教育委員会 1989年
- (25) (18)と同じ
- (26) 岡崎正雄「まとめ」『相野古窯跡群』－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ－本文編 兵庫県教育委員会 1992年
- (27) 浜中有紀「溝付き窯について－壺ノ谷窯址群の窯構造変化を中心に－」『壺ノ谷窯址群・桑ノ内遺跡』発掘調査報告書 佛教大学校地調査委員会 2000年
- (28) 中村浩『窯業遺跡入門』ニューサイエンス社 1982年
- (29) 久家隆芳「神ヶ谷窯跡出土須恵器について」『神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡』－中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅸ－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- (30) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相－下ノ坪遺跡の成果を中心として－」『下ノ坪遺跡Ⅱ』－農業農村活性化農業構造改善事業 上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書－本文編 高知県野市町教育委員会
- (31) 池澤俊幸「四万十川下流域における古代の土器－まとめと展望－」『具同中山遺跡群Ⅳ』－県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書－ (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- (32) 林日佐子「いわゆる「爪形状圧痕」について」『マムシ谷窯址発掘調査報告書』同志社大学校地学術調査委員会 1983年

圖 版

久木ノ城跡・遺跡



伐採前風景(西より)



伐採前風景(東より)

PL.2



伐採後風景 (西より)



伐採後風景 (南より)



平場検出状態(南西より)



ST-3検出状態(南より)

PL.4



遺構完掘状態(南西より)



遺構完掘状態(北上空より)



バンク1 (西より)



バンク1 (北西より)

PL.6



バンク2(南西より)



バンク2(南東より)



ST-1完掘状態(北東より)



ST-2・3完掘状態(北東より)



第V層弥生土器 (4) 出土状態



第V層磨製石斧 (11) 出土状態



ST-1 (東より)



ST-2・3 (南より)



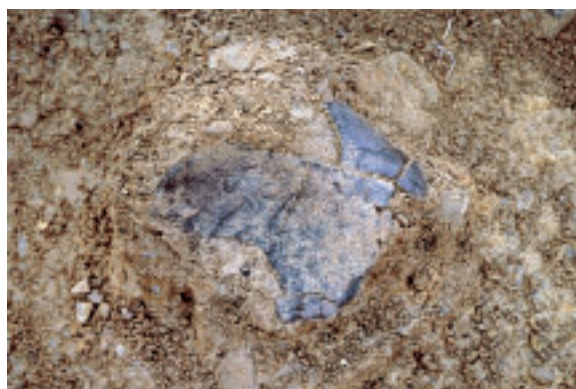
SS-1 (西より)



SS-7 (南西より)



SS-6弥生土器 (31) 出土状態



SS-7遺物出土状態



弥生土器(壺)



弥生土器(壺・甕)

PL.10



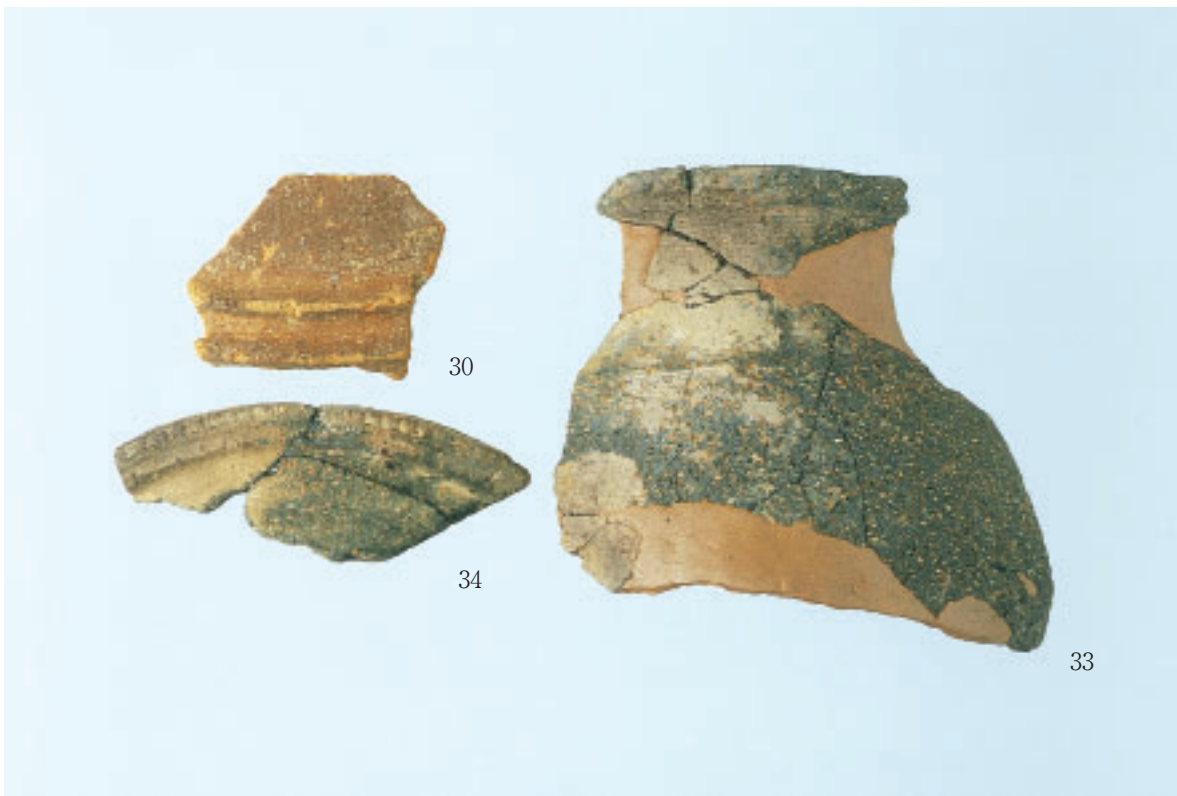
弥生土器(壺)



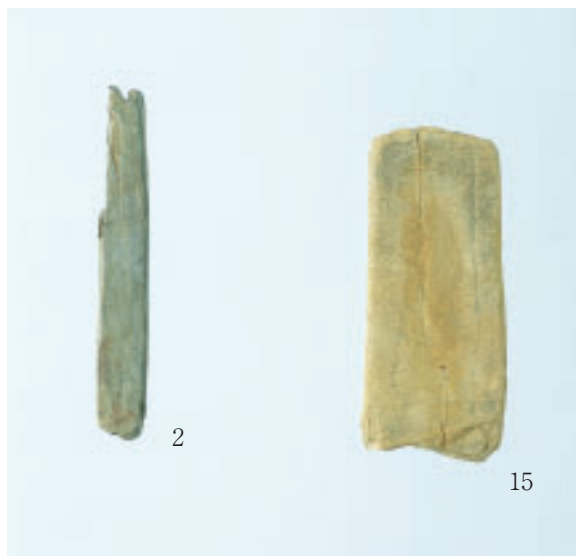
弥生土器(壺)



弥生土器(壺・甕)



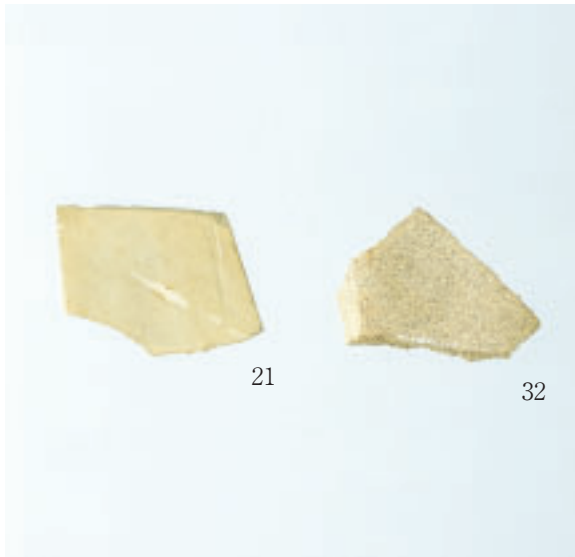
弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕), 石製品(磨製石斧・砥石)



弥生土器(高杯), 石製品(磨製石鏃・磨製石斧・石錐・叩石・凹石)



弥生土器(壺・甕), 石製品(磨石・砥石・台石)

古津賀遺跡



調査前風景(北より)



調査前風景(東より)



SF-1検出状態(南より)



SF-1検出状態(北より)



TR-1北壁セクション(南より)



TR-1完掘状態(西より)

PL.18



TR-2北壁セクション(南より)



TR-2完掘状態(南東より)



TR-3第X層遺構検出状態(南西より)



TR-3第X層遺構完掘状態(南より)

PL.20



TR-3第Ⅶ層遺構検出状態(北より)



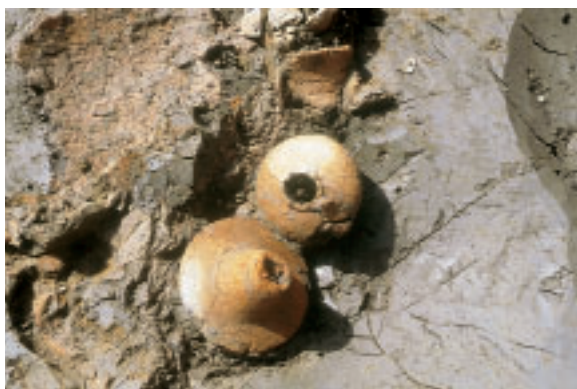
TR-3第Ⅶ層遺構完掘状態(南より)



TR-3北壁セクション(南より)



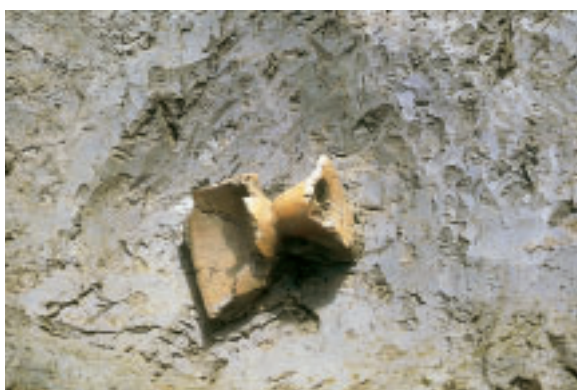
TR-3完掘状態(東より)



SF-1土師器壺・高杯 (5・11) 出土状態



SF-1土師器甕 (6) 出土状態



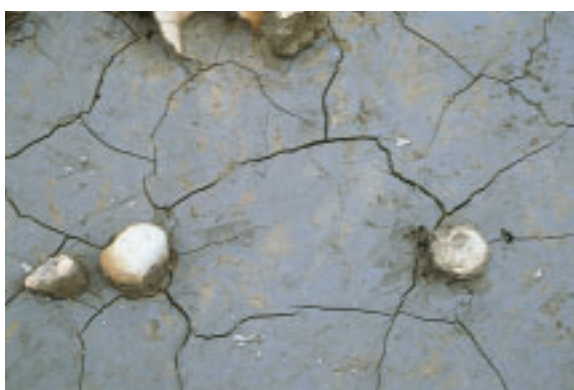
SF-1土師器高杯 (9) 出土状態



SF-1土師器高杯 (12) 出土状態



SF-1手づくね土器 (15) 出土状態



SF-1手づくね土器 (17・18) 出土状態



TR-3土師器甕 (1・2・3) 出土状態



TR-3弥生土器甕 (4) 出土状態



3

土師器(甕)



5

土師器(壺)



弥生土器(甕), 土師器(甕)



土師器(甕)



土師器 (高杯)



手づくね土器

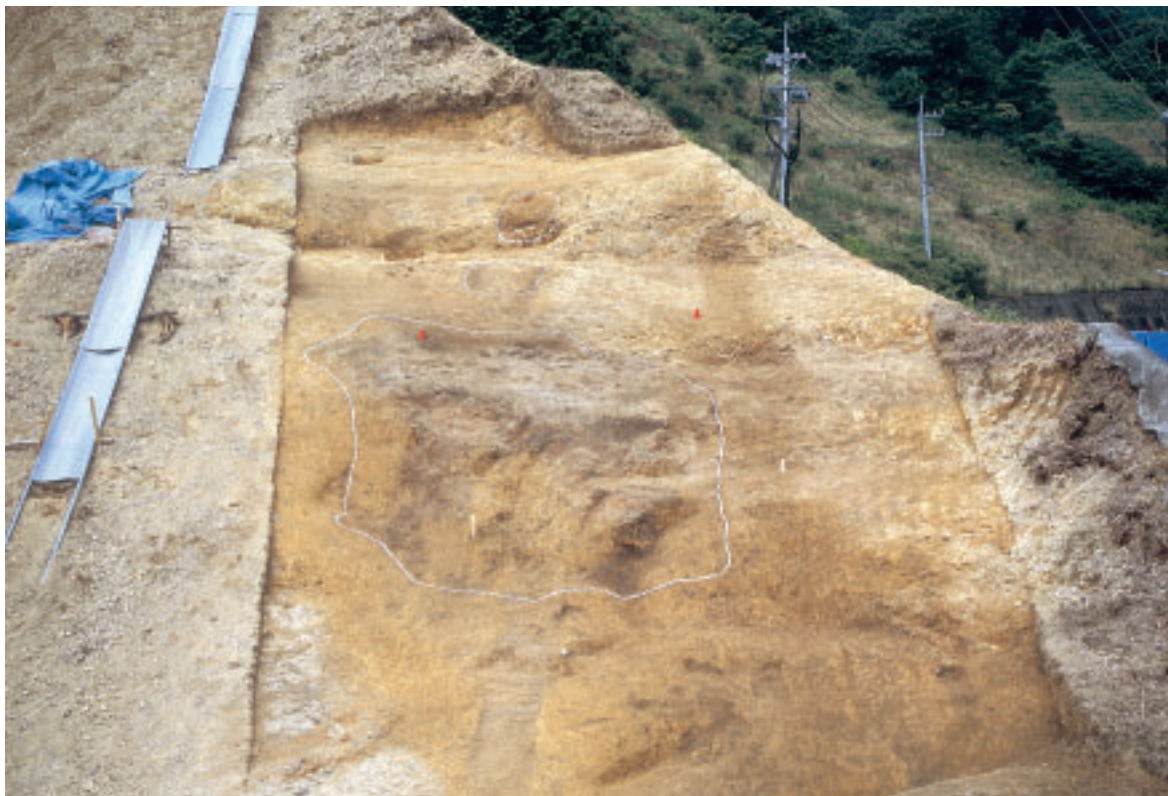
神ヶ谷2号窯跡



調査前風景(北より)



窯体・灰原検出状態(北より)



窯体検出状態(北より)



窯体完掘状態(北より)



窯体検出状態(北より)



窯体完掘状態(北より)



調査区完掘状態(北西上空より)



調査区完掘状態(北上空より)



東壁セクション (北より)



東壁セクション (北西より)



窯体内遺物出土状態(北東より)



窯体内遺物出土状態(北東より)



第X層須恵器出土状態



第VIII層須恵器(3)出土状態



窯体縦バンク(北西より)



窯体横バンク(北より)



灰原縦バンク(東より)



灰原横バンク(南より)



床面須恵器(42)出土状態



床面須恵器(43)出土状態



床面須恵器 (53) 出土状態



床面須恵器 (54・56) 出土状態



床面須恵器 (57) 出土状態



床面須恵器 (61) 出土状態



灰原須恵器出土状態



灰原須恵器出土状態



灰原須恵器出土状態



灰原炭化物検出状態



須惠器 (杯・高杯), 磁器 (皿)



須恵器(杯)



須恵器 (杯・皿・高杯・鉢)



須恵器(蓋・杯・皿・壺)



須恵器 (蓋・杯・皿)



須恵器(蓋・杯)



須恵器 (蓋・杯・皿)



須恵器(蓋・杯・皿)

具同中山遺跡群 II-2



調査前風景(北東より)



調査前風景(西より)

PL.44



西部第XX層遺構検出状態(西より)



西部第XX層遺構完掘状態(西より)



西部第Ⅷ層完掘状態(西より)



西部第Ⅷ層完掘状態(東より)



東部第XX層遺構検出状態(東より)



東部第XX層遺構完掘状態(東より)



東部第Ⅷ層完掘状態(東より)



東部第Ⅷ層完掘状態(西より)

PL.48



西壁セクション(東より)



西壁セクション(東より)



SF-1検出状態(北より)



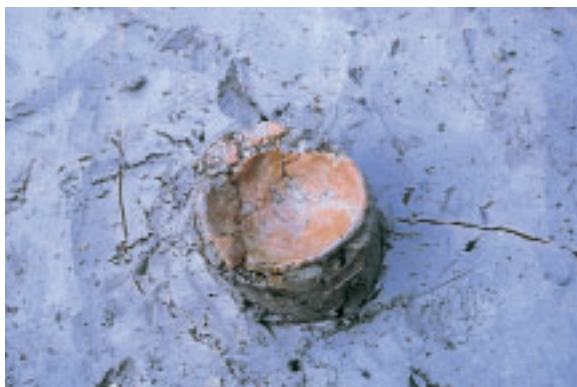
第Ⅷ層弥生土器(31)出土状態



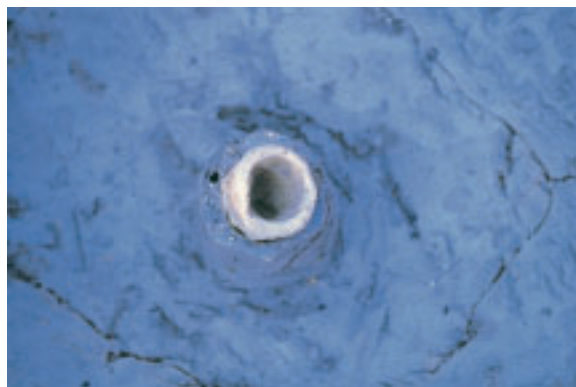
第XXVIII層土師器(4)出土状態



第XXVIII層土師器(8)出土状態



第XXVIII層土師器(14)出土状態



第XXVIII層手づくね土器(20)出土状態



第XXIX層弥生土器(35)出土状態



第XXIX層弥生土器(38)出土状態



第XXIX層弥生土器(43)出土状態



第XXIX層弥生土器(44)出土状態



土師器(壺)



土師器(甕)

PL.52



弥生土器(甕)



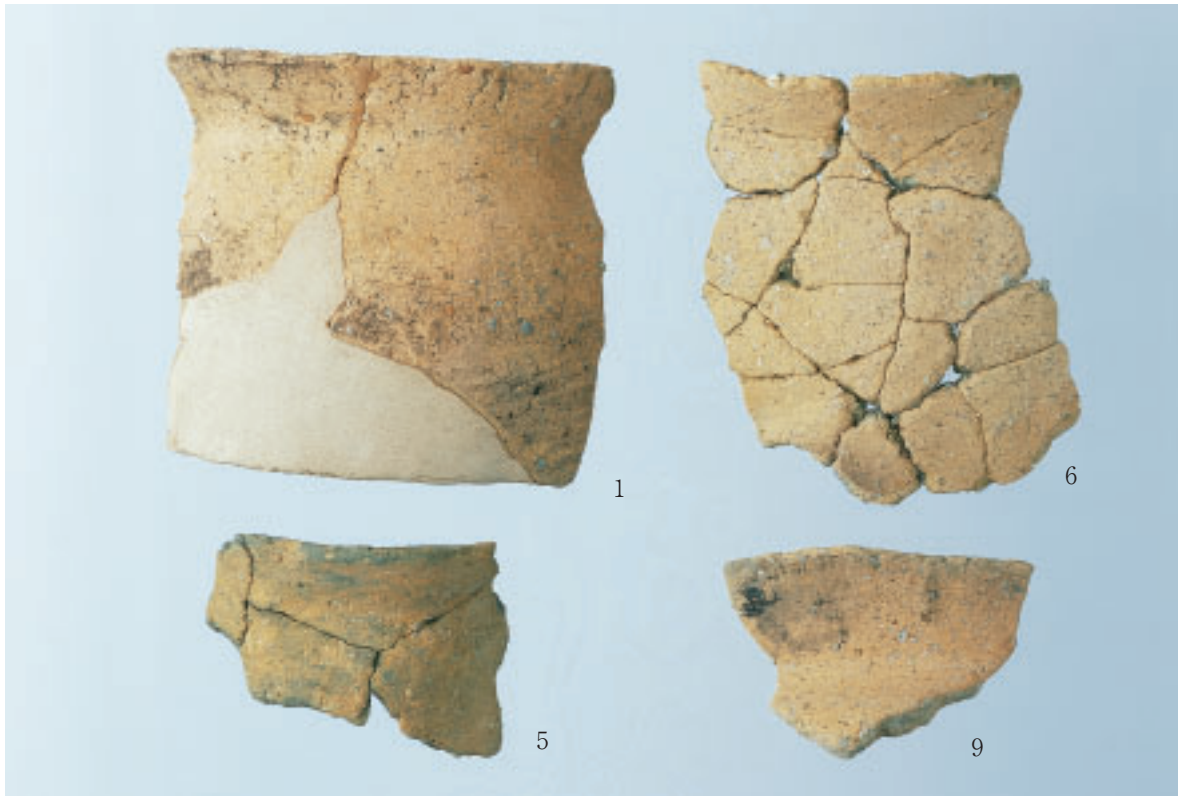
弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕), 土師器(甕)



弥生土器(甕)



土師器 (甕・高杯)



手づくね土器，鉄製品(刀子)



弥生土器(甕), 土師器(甕・鉢)



報告書抄録

ふりがな	ひさきのじょうせき・いせき、こつかいせき、かみがたににごうかまあと、ぐどうなやまいせきぐんにのに							
書名	久木ノ城跡・遺跡、古津賀遺跡、神ヶ谷2号窯跡、具同中山遺跡群II-2							
副書名	中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XII							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第81集							
編著者名	廣田佳久，岩本繁樹，下村裕							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2003年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひさきの 久木ノ じょうせき・いせき 城跡・遺跡	こうちけん 高知県 なかむらし 中村市 かみのどい 上ノ土居	39207	070086	32度 57分 35秒	132度 51分 00秒	20001024) 20010131	2,368	中村宿毛 道路建設
こつか 古津賀 いせき 遺跡	こうちけん 高知県 なかむらし 中村市 こつか 古津賀	39207	070021	32度 59分 02秒	132度 57分 14秒	20010507) 20010613	163	
かみがたに 神ヶ谷 にごうかまあと 2号窯跡	こうちけん 高知県 すくもし 宿毛市 ひらた 平田	39208	080129	32度 57分 28秒	132度 48分 35秒	20010702) 20010725	181	
ぐどうなやま 具同中山 いせきぐんにのに 遺跡群II-2	こうちけん 高知県 なかむらし 中村市 ぐどう 具同	39207	070052	32度 58分 29秒	132度 54分 34秒	20010816) 20011116	1,926	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
久木ノ城跡・遺跡	集落跡	弥生		住居跡 土坑 ピット 段状遺構	3軒 3基 28個 7カ所	弥生土器	弥生時代中期 の高地性集落	
古津賀遺跡	祭祀跡	古墳		祭祀跡 ピット	1基 92個	土師器	古墳時代前期 の祭祀跡	
神ヶ谷2号窯跡	須恵器窯跡	古代		須恵器窯跡 灰原	1基 1カ所	須恵器	古代の須恵器 窯跡	
具同中山遺跡群 II-2	祭祀跡	弥生		祭祀跡	1基	弥生土器 土師器	弥生時代後期 の祭祀跡	
		古墳		ピット	136個			

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第81集

久木ノ城跡・遺跡，古津賀遺跡
神ヶ谷2号窯跡，具同中山遺跡群Ⅱ-2

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

2003年3月26日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社



付図1 久木ノ城跡・遺跡調査区全体図 (S=1/200)

